



伝福岡県京都郡みやこ町彦徳横穴出土単獣環頭  
(九州国立博物館 行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料)

## 第2部 筑紫の大宰と豪族

第1章	九州北部の豪族と筑紫大宰	酒井 芳司	63
第2章	筑紫・大伴・大伴部	小嶋 篤	71
第3章	象嵌大刀と刀装具の世界	小嶋 篤	79
第4章	金銀装大刀と豪族	大谷 晃二	93
第5章	伝彦徳横穴墓出土の単獣環頭大刀	大谷 晃二	113
第6章	筑紫の豪族の馬装	西 幸子	133
第7章	仙掌菴コレクションの馬具	西 幸子	141

第2部では、大宰府の胎動がはじまった古墳時代の社会像について研究する。文献史料で確認できる那津官家や筑紫大宰の構造を整理しながら、倭王権（倭政権）の九州支配や各豪族の動態を追究する。また、考古資料では古墳副葬品のうち、金銀装大刀や象嵌大刀、各種馬具の製作技法や入手経路等を検討することで、往時の社会像を構築するための実証的な情報蓄積を図る。



シンポジウム「大宰府前夜－筑紫の大宰と豪族－」  
当日配布資料の表紙

## 第1章

## 九州北部の豪族と筑紫大宰

酒井 芳司

## はじめに

大宰府の起源と考えられているのが、宣化天皇元年（536）5月に、倭王権が那津の口（博多）に修造したと伝える官家、いわゆる那津官家である。ミヤケ（屯倉・官家）は、倭王権の支配拠点であり（館野1978）、筑紫君磐井の乱後、継体天皇22年（528）12月に磐井の息子の葛子が糟屋屯倉を献上したのを最初として、全国に設置された。この磐井の乱を契機として、倭王権は九州の豪族層の勢力基盤の内部に支配の楔を打ち込むことになる（小田1970）。

その後、糟屋屯倉を含む九州北部の屯倉を統括し、韓半島に出兵するための基地として、那津官家が置かれた。さらに推古天皇15年（607）の遣隋使派遣を契機に、大宰府の前身である筑紫大宰が新たに派遣されて、那津官家に駐留し、外交を掌った。本報告では、磐井の乱前後の九州北部の豪族層の動向と、筑紫大宰の派遣を中心とする倭王権の九州支配のあり方を概観することにした。

## 1. 筑紫君磐井の乱と那津官家の設置

磐井の乱の原因は、直接的には韓半島政策をめぐる倭王権と磐井の対立が背景にある。『日本書紀』や『古事記』によると、継体天皇21年（527）、新羅が加耶諸国に侵攻する情勢のなか、倭王権は加耶諸国を救援するために近江毛野を派遣するが、新羅と独自の交流をもっていた磐井は毛野の軍を妨害する。倭王権は翌年に大伴金村と物部麁鹿火を遣わして磐井を討ち、磐井の子の葛子は贖罪のために糟屋屯倉を献上したと伝える。乱の前には、九州北部の豪族達と広く連合し、その盟主として磐井は継体天皇の王権を支えていたが、ひとたび倭王権と戦うことになった際に、胸肩君や水沼君、火君などの有力豪族は倭王権に協力し、磐井は新羅系渡来人の秦氏系豪族や同族の豊前地域の膳氏などを味方として戦ったとみられ（井上1983）、九州北部の豪族は一枚岩で倭王権と戦うことはできなかった。

磐井を討った物部麁鹿火と大伴金村は、九州の中小豪族をそれぞれの地方の伴造とし、中小豪族の統率下にある人民の一部を部民として間接的に支配下に置いた（図1・3・4）。九州北部には物部氏系部民として、物部のほか、春米部、二田物部、筑紫贄田物部、十市部、鳥飼部、弓削部、矢作部などが分布し、また大伴氏系部民として、大伴部のほか、日下部、久米部、建部、犬養部、伊福部、山部、佐伯、的部、壬生部などがみえる。そして、これらの部民の居住地の近くに筑紫・豊・肥三国の屯倉が設置された（井上1983・田中2008）。

『日本書紀』は安閑天皇2年（535）5月に、筑紫の穂波屯倉（福岡県飯塚市）・鎌屯倉（嘉麻市鴨生）、豊国の藤崎屯倉（北九州市門司区、または大分県国東半島）・桑原屯倉（福岡県八女市黒木町、または築上郡築上町、田川郡大任町）・肝等屯倉（京都郡苅田町）・大拔屯倉（北九州市小倉北区貫）・我鹿屯倉（田川郡赤村）、肥（火）国の春日部屯倉（熊本市国府）が置かれたと伝える。

また京都妙心寺鐘銘に戊戌年（698）に糟屋評造春米連広国が鑄造させた鐘である旨がみえ、春米連が石上氏（物部氏）と同祖とされることから、糟屋屯倉も倭王権に献上された後、物部麁鹿火の支配下にある春米連が現地で屯倉を管掌したと推測される（黛1982）。以上より、まず物部氏と大伴氏が地域の中小豪族と統率下の人民を掌握し、それを前提に倭王権は支配拠点である屯倉を設置していった。九州北部の人民は中小豪族に率いられて屯倉に奉仕した。これら筑紫・豊・肥三国の屯倉は、対外交流

にとって重要な玄界灘沿岸地域と、瀬戸内海から豊前地域を経て博多湾を結ぶ道、豊後地域を経て筑紫君の本拠地である八女地域に至る道をおさえたのである（亀井1991）。

ところで一般に倭王権が屯倉の物資を輸送する際には、倭国王や中央豪族それぞれに仕えている地域豪族に命じて、各豪族が預かる屯倉の物資を運ばせるという、人格的な縦割りの命令系統で輸送がおこなわれた（黒瀬2000）。したがって、物部氏系部民には物部氏をつうじて、大伴氏系部民には大伴氏をつうじてでなくては物資を運べないのである。九州北部各地に屯倉は分散し、かつ屯倉間の横の交通が確立していないこともあり（森2009）、韓半島での対外戦争を遂行する際に、三国の屯倉では緊急時に人的・物的動員をしようとしても、拠点とするには不十分である。

このような状況に対応するため、『日本書紀』によると、宣化天皇元年（536）5月、実年代は6世紀の中頃と推定されるが、倭王権は那津の口に官家を修造した【史料1】。それは三国に散在する屯倉の倉の一部を収蔵する穀ごと那津に移築して集めるという方法で行われ、三国の屯倉に奉仕していた地域の中小豪族と支配下の部民は、地元の屯倉に加えて那津の屯倉にも奉仕することになった。この那津官家の修造によって九州北部各地から穀と人を那津に恒常的に集中させる体制が成立したのである。それは大宰府の西海道（九州）総管の歴史的前提といえる（酒井2008）。

屯倉・官家の実際の運営は中小豪族が隷属下の人民を率いて行ったが、これらの労働力は、ミヤケの設置と連動して地域豪族が任命された国造が貢進した（大川原2009）。那津官家は、筑紫三宅連という豪族が存在することから、実際は筑紫官家と呼ばれた可能性が高いが、この筑紫三宅連を実務的な管理者として、筑紫国造となった筑紫君葛子が那津官家への労働力の貢進を担ったのであろう。なお大伴氏や物部氏の支配下に入らず、筑紫君の統率下にあった中小豪族もあったが、それらも県稲置に任じられ、筑紫国造に率いられて屯倉に奉仕し、究極的には倭国王（大王）に仕えた。

このようにして那津に集積された穀と人は、韓半島での戦争に動員されることになる。戦争の実際の指揮にあたるのは、宣化天皇2年（537）10月に韓半島に派遣されたという大伴狭手彦や、筑紫に留まってその国政を執ったという兄の磐のように中央豪族であった。その際、九州に多くの部民を設置した大伴氏が将軍であったことは那津官家への動員を十分に行うために必要なことであったであろう。

## 2. 厩戸王子（聖徳太子）一族の九州支配と撃新羅将軍久米王子

6世紀の倭王権の韓半島出兵は、欽明天皇23年（562）正月、加耶諸国が新羅に滅ぼされて失敗に終わる。しかし、その後も加耶の復興を企図して新羅に軍事的圧力をかけ続けた。崇峻天皇4年（592）11月、紀男麻呂・巨勢猿・大伴嚙・葛城烏奈良を大將軍として筑紫に出兵させる。これら四氏族は用明天皇2年（587）7月に蘇我馬子の呼びかけに応じて物部守屋討滅に参加しており、この出兵を契機に物部氏から九州の支配を奪っていった（田中2008。図1）。

その後も加耶諸国復興は進まず、また九州には複数の中央豪族が進出し、地域社会の支配は複雑さを増していったものと思われる。推古天皇8年（600）2月、境部臣と徳積臣が将軍として派遣され、同10年（602）2月、厩戸王子（聖徳太子）の同母弟である久米王子が撃新羅将軍として派遣され、4月には後の筑前国嶋郡に駐屯し船舶を集めて軍糧を運んだ。嶋郡や早良平野を含む博多湾西側は、新羅・加耶・百濟からの土器が搬入されており、7世紀第2四半期まで対外交渉の拠点として機能し続けた。さらに元岡・桑原遺跡群では鍛冶道具を副葬した古墳があり、6世紀から7世紀にかけて製鉄工人の存在が想定され、7世紀後半には中央政権主導による鉄生産方法が導入され、8世紀まで存続した（日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会2012の加藤隆也・寺井誠・村上恭通論文、小嶋2016）。このように嶋郡周辺は対外交渉と鉄生産の拠点であったことから、久米王子も戦争準備のために駐屯したのであろう。実際、『肥前国風土記』三根郡条には、久米王子が物部若宮部をして物部経津主神を物部郷に鎮祭させ、また忍海漢人を漢部郷にすえて兵器を造らせたと伝えており、久米王子は嶋郡以外の地でも地域支配

や兵器生産を行っていた。

その後、久米王子は病にかかり翌年2月に没する。しかしこれを契機に厩戸王子一族（上宮王家）が九州各地を支配していくことになる。とくに嶋郡には生部（壬生部）・財部・搗米部（舂米部）・久米部・多米部・難波部（大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍）・白髪部（太宰府市国分松本遺跡出土木簡坂上2013）など上宮王家の王子・王女の養育を担当した部民が集中する（図2）。これらの部民は玄界灘沿岸や周防灘周辺、後の筑前国嘉麻郡、国東半島、肥後国北部、筑紫君の本拠地である八女地域や肥前国・肥後国南部など有明海沿岸、さらに日向国・大隅国・薩摩国にも分布する。先にみた糟屋屯倉も管掌氏族が舂米連であり、物部守屋討滅に功績があった厩戸王子に与えられ、厩戸王子は娘の舂米王女の養育を舂米連に担当させたとみられる（黛1982）。このほか、厩戸王子に仕えた秦造河勝や葛城氏、平群氏、妃の父である膳臣傾子の部民も九州各地に分布しており、上宮王家は部民制の集積によって九州を広範に支配下に置いていたのである（酒井2009）。

## 3. 隋との国交開始と筑紫大宰の派遣

このような情勢のもとで、『日本書紀』推古天皇17年（609）4月庚子条に筑紫大宰が初見する。同15年（607）7月に小野妹子を遣隋使として派遣しており、筑紫大宰は隋使来着に備えて現地で迎接するために派遣された（倉住1985）。この点で、厩戸王子とともに推古朝の王権中枢を構成した推古天皇の養育にあたった額田部、蘇我馬子の部民である蘇我部が後の筑前国早良郡や嶋郡など博多湾周辺に分布することも注目される。上宮王家が九州各地を支配し、推古天皇と蘇我馬子も博多湾沿岸を掌握していた。7世紀後半の筑紫大宰の就任者には、栗隈王や屋垣王、河内王、三野王のように敏達天皇系王族が多いので、7世紀前半の筑紫大宰も常駐したかどうかは確証がないが、厩戸王子一族の王族が就任したと推測する。

『備中国風土記』逸文に百濟救援戦争に際して、斉明天皇が筑紫に向かう途中、後の備中国下道郡逆磨郷で2万人の勝兵を集めたという伝承があるので、倭国王が現地に行幸することで、多くの豪族と人民を戦争に徴発できたことが理解される。推古朝の撃新羅将軍・久米王子に諸々の神部、国造・伴造らと軍兵2万5000人が授けられたように、王族将軍は倭国王の代理として部民制の人格的支配原理にもとづいて軍隊を率いており、久米王子は物部氏や大伴氏の豪族将軍と同様の原理によって、九州の地域支配をも進めた。そして九州の部民の多くが上宮王家、その滅亡後には敏達天皇系王族に隷属したこともふまえれば（武光1979。図5）、筑紫大宰は、久米王子が就任した王族将軍の系譜に連なり（波多野1954）、部民制によって九州の豪族と人民を支配していたといえる。

『善隣国宝記』所引「海外国記」には、天智天皇2年（663）8月の白村江の敗戦の翌年に来朝した唐使郭務悰に應對した筑紫駐在の官職の文書として、唐使に宛てた「筑紫太宰辞」と、熊津都督府の唐の鎮将劉仁願に宛てた「日本鎮西筑紫大將軍牒」がみえる。後者を後世の造作とみる見解もあるが（倉住1985）、表記の修飾はあるにしても、同一の史料のなかでの書き分けであり、筑紫大宰が対外的に将軍を称した可能性は否定できない。少なくとも天智朝の筑紫大宰は将軍としての機能を持っていたのであり、筑紫大宰が王族将軍の系譜を引くことを傍証する。

なお、王族でない筑紫大宰の就任者には、隠流とされた蘇我日向、筑紫大宰であった可能性が低い阿倍比羅夫、短期的な就任の蘇我赤兄、高位の官人ではない田部櫛子、丹比嶋と粟田真人がある。天智朝後半の筑紫大宰は、短期間に栗前王（栗隈王）から蘇我赤兄、さらに栗隈王と変遷する。大友王子と大海人王子が王位を争った壬申の乱では、栗隈王は大海人王子に、蘇我赤兄は大友王子に従った。九州の掌握のために、天智天皇・大友王子と、大海人王子それぞれの陣営が、筑紫大宰の地位を得ようと争っていたのであろう。

大化改新以後、7世紀後半の九州には広域を管轄する地方官として、筑紫大宰と別に新たに筑紫掾

領（竺志惣領とも。以下、筑紫総領と表記する）が置かれ（亀井2004）、総領のもとで律令制地方支配組織が成立して行く。総領は、『常陸国風土記』に東国惣領がみえるほか、『日本書紀』に吉備、周芳、伊予、筑紫の総領がみえる。

#### 4. 筑紫における律令制地方支配の進展と豪族

皇極天皇4年（645）6月の蘇我本宗家討滅に始まる大化改新までは、地域の豪族が国造・伴造・県稲置となつて、ミヤケの現地管理者となり、それぞれの支配下にある人民（部民）を率いて、ミヤケに奉仕させた。豪族の支配下には、これらミヤケに奉仕させられた人民以外にも、倭王権に把握されていない豪族の私有民もあり、これらの私有民は、豪族の経営する田荘たぢょうに使役された（図3）。

大化改新により、孝徳朝に従来のミヤケは評こおりに編成された（天下立評）。しかし、評や五十戸さきと（厳密に編成された五十戸一里ではないので、以下、「サト」と表記する）の編成によって、倭王権に把握されたのは、ミヤケに奉仕させられていた人民（部民）であり、倭王権は豪族の私有民を掌握していなかった（以下、酒井2016・2018による。図6も参照）。

九州北部においては、6世紀以来、那津官家（筑紫官家）が筑紫・豊・火（肥）三国の屯倉を統括し、韓半島における対外戦争の拠点となっていた。この三国の屯倉は、それぞれ所在する地域の中小豪族が、伴造や県稲置となつて支配下の人民を率いて経営し、これらを統括する那津官家を、筑紫国造となつた筑紫君が管理した。そしてこの那津官家と豊・火国にも飛び地的に散在する統括下の三国の屯倉に奉仕させられていた人間集団の総体が、筑紫国造の筑紫国の実態であった。

筑紫国造たる筑紫君の支配下には、その影響下にあった中小豪族が私有する人民も含めて、多くの私有民が存在した可能性がある。したがって、評の編成によって、那津官家が筑紫評となり、その統括下の三国の屯倉、例えば、糟屋屯倉であれば、これが糟屋評となつたとしても、那津官家が三国の屯倉を統括する体制、すなわち国造の国としての筑紫国は容易に解体できなかつたであろう。ゆえに、九州北部においては、筑紫評が糟屋評など旧三国の屯倉由来の評を重層的に支配する体制が維持された。筑紫君は筑紫評造として、国造国としての筑紫国を支配し続けたのである。

天智天皇3年（664）2月の甲子の宣によって、民部・家部として豪族私有民の把握が進められるが、豪族による人民の私有は否定されなかつた。さらに、同9年（670）2月の庚午年籍こうごねんじやくの編纂によって、すべての人民が戸籍に登録されるが、ミヤケに奉仕していた部民が、評やサトごとに登載される一方、民部・家部といった豪族私有民は、所属する豪族単位で登録されていた。したがって、同2年（663）8月の白村江の敗戦後も、天智朝には豪族による人民の私有は廃止できず、筑紫君が筑紫評造として、筑紫評と統括下の三国の評を支配する体制、すなわち国造国としての筑紫国も解体できなかつたのである。

筑紫大宰と筑紫総領は、大化改新後も那津官家（筑紫評）において、筑紫評造たる筑紫君と協力して、地域支配を行っていたが、白村江の敗戦後、水城や大野城、基肄城などの国防拠点が現在の太宰府市近辺で構築され、その司令部となるために、筑紫大宰は、新たに建設された大宰府政庁Ⅰ期古段階の建物へと移転した。しかし、筑紫評造が、依然として那津の筑紫評において、国造国としての筑紫国を支配していたので、九州の統治を担う筑紫総領は、筑紫評を離れることはできなかつた。

天武天皇元年（672）の壬申の乱を経て、大海人王子おおあまのみこが即位して天武天皇となり、この天武朝において、人民の厳密な五十戸一里への編成が進展する。天武天皇4年（675）2月には、甲子の宣で豪族に賜つた部曲かきべ（民部・家部）が廃止され、豪族による人民の私有が禁止された。これによって国造国としての筑紫国も解体されることになり、筑紫君も筑紫評造から解任され、本拠地である上陽咩評かひつやめのこおり（後の筑後国上妻郡）の評造を帯するのみとなつたのだろう。豪族私有民の廃止と厳密な五十戸一里の編成を受け、天武天皇12～14年（683～685）にかけて国境画定が行われ、律令制の国（令制国）としての筑紫国・

豊国・肥国が成立する。その集大成として、持統天皇4年（690）9月に、人民が厳密に五十戸一里に編戸されて登録された庚寅年籍こういんねんじやくが作成された。なお、隼人支配が天武朝に進展することと、私見が『古事記』のもとになった帝紀・旧辞の虚偽を定める作業が天武天皇の生前に完了したとみることから、熊曾国（後の日向・大隅・薩摩国に相当する南九州地域）も天武朝に成立したと考える。豊国や肥国、熊曾国には、国宰くにのみこともちが派遣されたが、筑紫国は筑紫総領が国宰を兼務した。

筑紫評の施設は、天武朝に大小に分割されて筑紫大評・筑紫小評おごおり（『日本書紀』では、筑紫大郡・筑紫小郡と表記される）となり、天武朝以降、新たに整備された筑紫館つくしのむらつみ（後の鴻臚館）とともに外交施設として機能した。筑紫大評は、那津官家推定地である福岡市比恵遺跡群の南側に隣接する那珂遺跡群に所在したと推定されている。筑紫君が筑紫評造を解任された後の筑紫評は、おそらく筑紫君の下で筑紫評の実務を行っていた中小豪族である筑紫三家連が評造となり、所在する周辺地域を支配する官衛かんが（後の筑前国那珂郡衛の前身）としても機能したであろう。

この段階でようやく、筑紫総領が筑紫評を離れる条件が整つたとみられ、天武朝後半から持統朝にかけての時期（680年代後半）に、筑紫総領は現在の太宰府市近辺に移転したであろう。持統天皇3年6月の飛鳥浄御原令施行にともなうとみられる、九州統治に適した構造を持つ政庁Ⅰ期新段階建物の建設や、蔵司西地区での7世紀末の荷札木簡「久須評」（後の豊後国球珠郡）の出土など、大宰府政庁跡周辺において九州の内政統治機能が、この時期に充実することもその傍証となる。最終的には大宝元年～2年（701～702）に施行された大宝律令によって、筑紫以外の総領が廃止され、軍事と外交を掌る筑紫大宰と九州の内政を掌る筑紫総領が統合されて、筑紫における唯一の大宰府が完成する。

#### おわりに

倭王権による九州支配のあり方は、考古学による遺跡や遺物の研究成果による、地域社会の具体的動向をふまえながら、さらに詳しく文献史料を検討する必要がある。本報告は仮説であり、今後の研究の進展によって修正が加えられ、充実した九州の古代史が明らかにされることを祈念している。

#### 参考文献

- 井上辰雄1983「大和政権と九州の大豪族—その統治政策を中心として—」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館
- 大川原竜一2009「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』137
- 小田富士雄1970「磐井の反乱」『古代の日本3九州』角川書店
- 亀井輝一郎2004「大宰府覚書—筑紫大宰の成立—」『福岡教育大学紀要』第53号第2分冊社会科編
- 黒瀬之恵2000「日本古代の王権と交通」『歴史学研究』742
- 倉住靖彦1985『古代の大宰府』吉川弘文館
- 小嶋篤2016『大宰府の軍備に関する考古学的研究』九州国立博物館 福岡県立アジア文化交流センター
- 酒井芳司2008「那津官家修造記事の再検討」『日本歴史』725
- 酒井芳司2009「倭王権の九州支配と筑紫大宰の派遣」『九州歴史資料館研究論集』34
- 酒井芳司2016「筑紫における総領について」『九州歴史資料館研究論集』41
- 酒井芳司2018「筑紫国造と評の成立」大宰府史跡発掘五〇周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院
- 坂上康俊2013「嶋評戸口変動記録木簡をめぐる諸問題」『木簡研究』35
- 武光誠1979「聖徳太子とその内政」『歴史公論』5・11
- 館野和己1978「屯倉制の成立—その本質と時期—」『日本史研究』190
- 田中正日子2008「筑紫大宰とその支配（その1・2）」『ふるさとの自然と歴史』321・322
- 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会2012『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表史料集』
- 波多野皖三1954「大宰府淵源考—筑紫大宰の性格について—」『日本歴史』72
- 黛弘道1982「春米部と丸子部—聖徳太子子女名義雑考—」『律令国家成立史の研究』吉川弘文館
- 森公章2002「倭国から日本へ」『日本の時代史3倭国から日本へ』吉川弘文館
- 森公章2009「評制と交通制度」『地方木簡と郡家の機構』同成社



図6 大宰府の成立過程と官衙遺跡

関連事項	太宰府市周辺		那津（博多）周辺		6世紀
	筑紫総領【内政】	將軍・筑紫大宰【軍事・外交】	筑紫総領【内政】	將軍・筑紫大宰【軍事・外交】	
527 磬井の乱 槽屋屯倉献上 535 筑紫・豊・火三國の屯倉設置			536 那津官家（比惠遺跡） 筑紫国造管理	新羅等を撃つ將軍 600 境部臣 537 大伴狭手彦・大伴磐 591 紀・巨勢・大伴・葛城	
607 遣隋使小野妹子派遣			那津官家（那珂遺跡） 筑紫国造管理	602 擊新羅將軍 久米王子 609・643 筑紫大宰（初見）	601～645年
660 頃 豊・肥國宰（筑紫國は筑紫総領の直轄） 663 白村江敗戦 664 甲子の宣 670 庚午年籍 675 部曲（民部・家部）廃止 682 頃 熊曾（日向）國宰 683 頃 國境画定 689 飛鳥浄御原令 この頃、筑前・筑後、肥前・肥後、豊前豊後分割 690 庚寅年籍	689 前後 筑紫総領が移転（政庁I期新段階周辺） 700 生志總領・筑紫総領石上麻呂・大貳小野毛野	664 筑紫大宰 日本鎮西筑紫大將軍（善隣國宝記）が移転（政庁I期古） 新段階 660 阿倍比羅夫 669 蘇我赤兄 668・671 栗隈王 676 屋垣王 682 丹比嶋 689 粟田真人・河内王 694 三野王	筑紫評（673 筑紫大郡・筑紫小郡 那珂遺跡） 筑紫国造（筑紫評造）管理 650 前後 筑紫総領	649 筑紫大宰帥蘇我日向 688 筑紫館	645～700年
701～2 大宝律令		702 大宰府石上麻呂	那珂郡家（那珂遺跡）	筑紫館（後の鴻臚館）	701年以降

【史料1】『日本書紀』宣化天皇元年（536）5月辛丑朔条（現代語訳）

夏五月の辛丑朔（1日）に、詔して、「食は天下の本である。黄金が万貫あっても、飢えを癒すことはできない。白玉が千箱あっても、どうやって凍えから救うことができようか。そもそも筑紫国は、遠近の国々が来朝する所、往復の関門となる所である。そこで海外の国は海の状態をうかがってやって来ては、賓客となり、天雲の様子を見ては、貢物を献上した。胎中之帝（応神天皇）より我が御世に至るまで、収穫した穀物を収蔵し、食糧を蓄積して来た。それをずっと凶年の備えとし、賓客を饗応する糧としている。国を安定させる方法は、これに過ぎるものはない。

それゆえ、私は阿蘇仍君を遣わして（未詳である）、河内国の茨田郡の屯倉の穀も加えて運ばせよう。蘇我大臣稲目宿禰は尾張連を遣わして、尾張国の屯倉の穀を運ばせよ。物部大連鹿火は新家連を遣わして、新家屯倉の穀を運ばせよ。阿倍臣は伊賀臣を遣わして、伊賀国の屯倉の穀を運ばせよ。官家を那津の港に建てよ。

筑紫・肥・豊の三國の屯倉は遠く離れて散在している。運搬するのに不都合である。もし必要となった場合、緊急に対応することは難しい。そこで諸郡に命じて（各屯倉の倉庫と稲穀を）分け移して運ばせ、那津の港に集めて建て、非常の場合に備え、長く人民の命の糧となるようにせよ。早急に郡県に命令を下して、私の心を知らしめよ」と仰せられた。

第2章

筑紫・大伴・大伴部

小嶋 篤

はじめに

平成31年4月1日に新元号「令和」が発表され、出典となった『万葉集』巻五「梅花の歌三十二首 併序」に注目が集まった（画像1）。梅花の宴の舞台となった大宰府も、全国的に脚光を浴びることになった。九州国立博物館では、本機会を活かし、大宰府のさらなる魅力発信を図るために新元号記念特別企画「令和」を催し、会期中（平成31年4月23日～令和元年12月22日）に280,988人のご来場を頂いた<sup>1)</sup>。本解説は、特別企画会場で配布した資料を再構成した内容となっている。

以下では、大宰帥・大伴旅人が催した梅花の宴につながる「歴史」と「交流」の体系的な繋がりに着目する（表1・2）。具体的には、「歴史」として、大伴旅人が大宰府に赴任する背景を「筑紫君磬井の乱」に始まる、大伴氏と九州（筑紫）の繋がりにから説明する。また、「交流」として、大宰府の文化的側面を遣隋使・遣唐使の役割、梅花の宴と漢籍（中国の書物）の繋がりにから説明する。



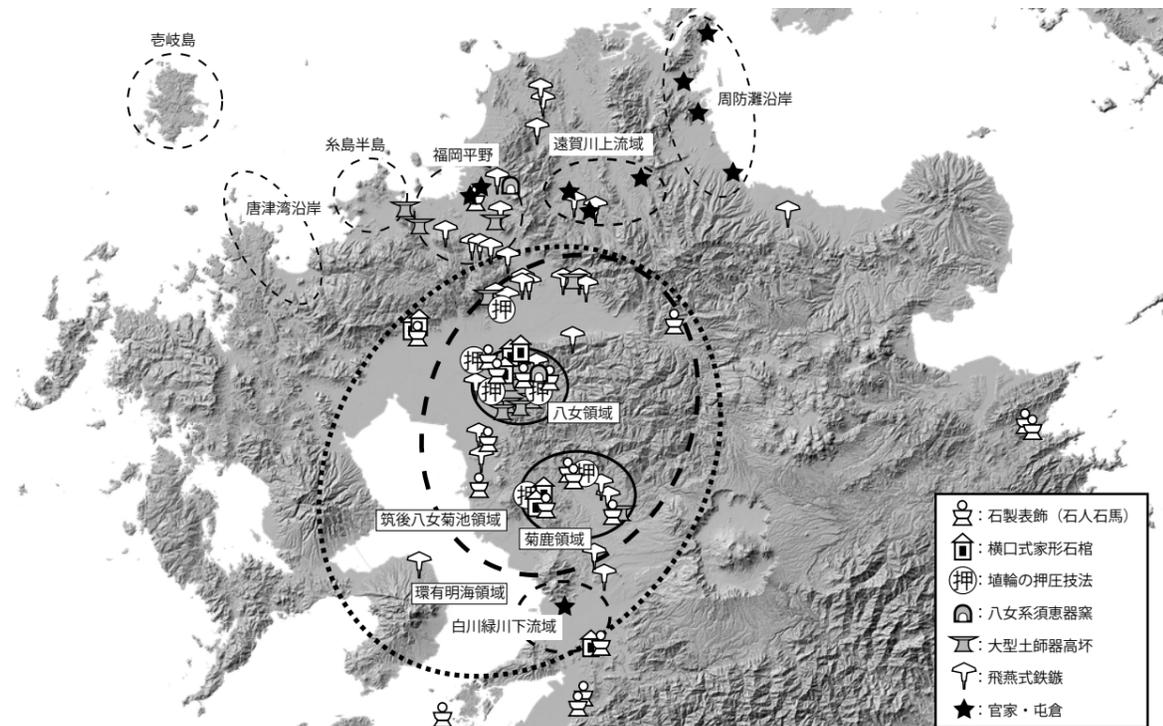
画像1 『万葉集』巻五版本（九州国立博物館蔵）

1. 「筑紫君磬井の乱」後の大伴氏の進出

大伴氏は大阪湾沿岸を拠点とする豪族で、筑紫とはもともと縁のない豪族である。しかし、大伴金村が5世紀後半～6世紀前半に倭政権中枢で台頭し、「筑紫君磬井の乱」（527-528年）を契機として物部氏とともに九州各地に進出した（図1）（小嶋2021）。具体的には筑紫君等に従っていた部曲（私有民）を、大伴氏の部曲に編入する形で「大伴部」（大伴氏の私有民）等を設置し、大伴氏の軍事活動（倭王権の軍事活動）等に動員した。この軍事活動の中心は朝鮮半島への派兵であり、筑紫の人々の大きな負担と犠牲を生んだ。その最たる事例は筑後国在住の大伴部博麻で、661～663年の百済の役（百済救援戦争）で唐軍の捕虜となり、690年まで長安に奴隷として抑留されていたことが『日本書紀』に記されている。

筑紫における大伴氏の勢力拡大（大伴氏の軍事動員数の増加）と朝鮮半島への出兵は、結果的に『征討將軍の有力候補＝大伴氏の氏上（頭領）』という構造を定着させる原動力となった。つまり、大伴旅人の征軍人持節大將軍、大宰帥の就任は、旅人自身の資質とともに、古墳時代より大伴氏・大伴部が積み上げた実績も要因の一つであったと評価できる。

これらの政治的動向は、豪族が葬られた古墳にも影響を与えている。筑紫君の本拠地を含む有明海沿岸域では、九州独自の石製表飾（石人・石馬）とともに、大王墓造営により地方に広がった中央様式の埴輪（V群系埴輪）も併用され、中央と地方の要素が同居する古墳が築かれていた（小嶋2019）。なお、『筑後国風土記逸文』では、磬井が築いた墳墓において「官軍が石人石馬を破壊した」と伝えている。その真偽は不明だが、風土記が記された奈良時代にはすでに石人石馬が破損していたことを示唆する。また、有明海沿岸の古墳内部の石室に描かれた装飾壁画には、「船に乗せられた馬」が複数描かれている。



【八女領域：筑紫君の主たる直接動員範囲】  
 乱前：横口式石棺 + 筑肥型・筑後型石室 + 裝飾壁画 + 石製表飾 + 埴輪押圧技法  
 乱後：筑後型・八女型・肥後型石室 + 石屋形 + 裝飾壁画 + 石製表飾 + 埴輪押圧技法 + 八女系須恵器の生産・消費 + 大型土師器高坏 + 飛燕式鉄鍬

【菊池領域：筑紫君と継続的に協力関係にある豪族の主たる直接動員範囲】  
 乱前：横口式石棺 + 肥後型石室 + 石屋形 + 裝飾壁画 + 石製表飾 + 埴輪押圧技法  
 乱後：肥後型・宇土型石室 + 石屋形 + 裝飾壁画 + 石製表飾 + 埴輪押圧技法 + 八女系須恵器の消費 + 少量の大型土師器高坏 + 飛燕式鉄鍬

【筑後八女菊池領域：筑紫君に同調した豪族が多かったと見られる範囲】  
 八女型・筑後型・肥後型石室が主流 + 裝飾壁画 + 石製表飾 + 埴輪押圧技法有 + 八女系須恵器の消費 + 少量の大型土師器高坏 + 少量の飛燕式鉄鍬

【環有明海領域：乱前より筑紫君と協力関係にあり、筑紫君に同調した豪族を含む範囲】  
 乱前：舟形石棺 + 横口式石棺 + 筑肥型・肥後型石室分布 + 石製表飾

【筑紫国・火国・豊国：「筑紫君磐井の乱」の最大参画範囲】  
 福岡平野（乱後：那津官家 + 糟屋屯倉 + 石製表飾 + 八女型石室 + 八女系須恵器窯の生産・消費 + 飛燕式鉄鍬 + 大型土師器高坏が分布）  
 周防灘沿岸・遠賀川上流域・白川緑川下流域（乱後に屯倉設置）、糸島半島（乱後の派遣將軍の駐屯地）、  
 唐津湾沿岸・吉岐島（大陸渡航の主要航路・肥後と共通する要素が長期的に見られる地域）

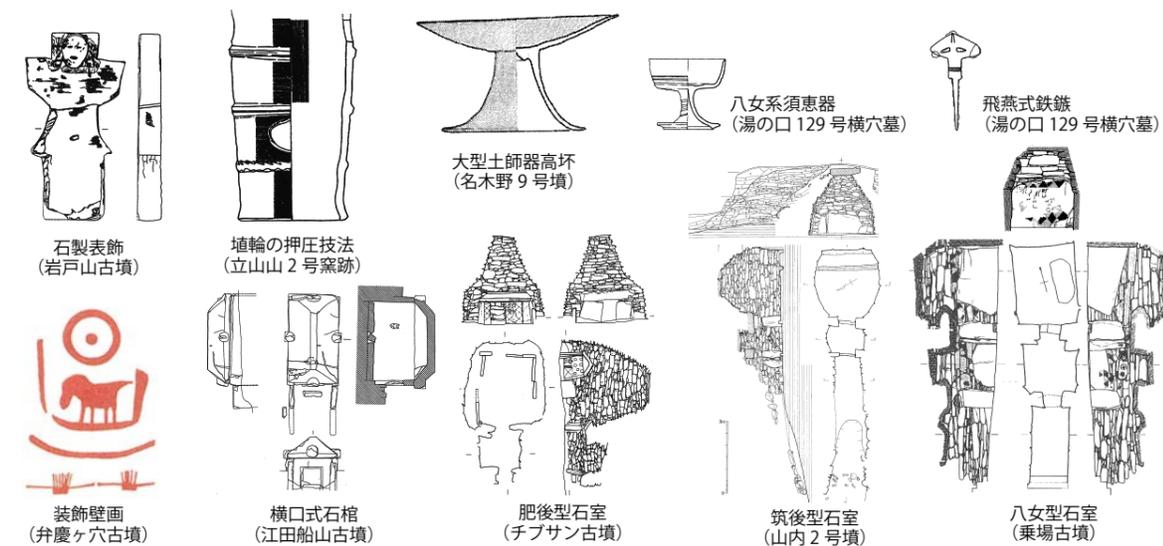


図1 「筑紫君磐井の乱」に関する考古資料とミヤケ（小嶋2021）  
 （石製表飾S=1/60、埴輪S=1/12、土器S=1/10、鉄鍬S=1/8、石棺S=1/200、石室=1/300、壁画縮尺任意）

船と馬という特殊な組み合わせは、『日本書紀』にも記された朝鮮半島への軍馬の渡航を暗示するものとして注目できる（原田1973）<sup>2)</sup>。

## 2. 大伴旅人と大宰府

大伴金村の躍進の後、大伴咋（旅人の曾祖父）・狭手彦等は派遣將軍として九州北部で軍備を整え、朝鮮半島に赴いたことが『日本書紀』に記されている。また、内乱となった「壬申の乱」（672年）では、大伴吹負・安麻呂（旅人の父）は、大和制圧等の大功を挙げた。このような名門氏族の直系として、665年に大伴旅人は誕生した。旅人の生きた時代は、律令国家（天皇集権国家）が形づくられていく期間と重なっており、唐・新羅から新来文化が次々と流れ込む一方で、古墳時代の旧来要素も残る過渡的な時代であった。この新旧要素の狭間で誕生した最たるものが「大宰府」である。大宰府は古墳時代に起源をもつ地方行政官「大宰」を、律令制に取り込んだことで成立した日本独自の行政府である。

順当に出世を重ねた旅人は、720年に勃発した「隼人の乱」を鎮めるために「征隼人持節大將軍」として、56歳のときに筑紫に派遣された。詳しい行程は不明だが、大宰府を経由して軍備を整え、薩摩・大隅へと向かったと考えられる。その後、728年頃に大宰府の長官「大宰帥（正三位）」として、63歳で再び筑紫に派遣された。旅人の大宰帥着任には、729年に中央政界で起こった「長屋王の変」との関わりも指摘されているが、上述したように征討將軍としての実績を積み上げてきた大伴氏の氏上として、当時の政界でも説得力のある人事であったことも併せて評価しなければならない<sup>3)</sup>。大宰府自体は統帥権を有さないが、「外敵への備え」として日本有数の軍事力を保持していた（小嶋2016）。その潜在的な軍事力は740年に勃発した「大宰少式・藤原広嗣の乱」で発露し、広嗣号令下で大宰府常備軍を中心に1万人以上の軍団兵士が反乱軍として動員された。広嗣（大宰少式）による軍団兵士の動員は、天皇の命令である「勅」の偽造が想定されており、不正ながらも法的根拠に基づいて実施されたと考えられている。

なお、旅人が大宰府に住んだ728年頃～730年は、古代都市・大宰府の整備が完了していた時期にあたり、平城京の規模を縮小した形で条坊都市（基盤目状の町並み）が整えられていた（画像2）。旅人が務めた大宰府の役所は、大宰府式と称される立体感ある鬼瓦や、蓮華文をあしらった軒丸瓦・軒平瓦などが屋根に葺かれ、国家の威容を誇る佇まいであっ



画像2 「大宰府政庁」復元模型（九州国立博物館蔵）



画像3 「梅花の宴」復元模型  
 （公益財団法人古都大宰府保存協会蔵、山村延輝作）

表1 大伴氏の年表（仁賢紀～天武紀）

天皇(年号)	元号	西暦	大伴氏氏上等【官位等】	日本書紀の記事(他引用文献等)
仁賢			おおとものかなむら 大伴金村【大連】 (生没年不明)	498 金村、平群父子を征討 武烈天皇を擁立
武烈		499		
		506		506 金村等、継体天皇を擁立 527 筑紫君磐井の乱 物部麁鹿火と金村を派遣(古事記) 石人石馬の破壊伝承(筑後国風土記) ※九州で物部氏・大伴氏の勢力拡大
継体				
安閑		531		
		535		
宣化			さてひこ 大伴狭手彦【大將軍】 (生没年不明)	536 那津官家の整備 537 磐・狭手彦を百濟救援に派遣 松浦佐用姫との悲話(肥前国風土記)
欽明		539		
		571		
敏達				583 百濟達卒・日羅(肥葦北国造の子) 金村を「われらの君」と呼称
用明		585		
崇峻		587	くい 大伴咋【大徳・大將軍】 (生没年不明)	587 蘇我物部戦争(丁未の乱) 咋、物部守屋討伐軍に参加 591 咋、大將軍として筑紫駐留 600 遣隋使の派遣(隋書) 608 咋、高句麗に外交使節として派遣 609 筑紫大宰による奏上
推古		592		
		628	ながとこ 大伴長徳【大紫・右大臣】 (生年不明～651)	肥後国葦北津に百濟僧来着 遣唐使の派遣(旧唐書・新唐書)
舒明		629		
		641	ふけい 大伴吹負【大錦中】 (生年不明～683)	645 大化の改新(乙巳の変) 蘇我本宗家滅亡
皇極		642		
		645		
孝徳	大化			
	白雉		やすまろ 大伴安麻呂【大納言】 (生年不明～714)	660 百濟滅亡 663 白村江の戦い 筑後国の大伴部博麻、唐軍捕虜として長安に連行される ※大宰府(大野城・水城等)建設開始
齊明		654		
		655		
		661		
		668		
天智				
弘文		671	たびと 大伴旅人【大納言】 (665～731)	672 壬申の乱(吹負・安麻呂は天武側) 筑紫大宰・栗隈王が派兵拒否 吹負、倭京(飛鳥)の軍事権掌握 吹負、大和を制圧し、難波へ進軍 安麻呂、大海人皇子への使者に ※「大伴部」木簡(大宰府史跡蔵司地区)
天武		672		

表2 大伴氏の年表（天武紀～清和紀）

天皇(年号)	元号	西暦	大伴氏氏上等【官位等】	日本書紀・続日本紀の記事(他引用文献等)
天武	朱鳥	686		
	持統	690	たびと 大伴旅人【大納言】 (665～731)	690 大伴部博麻、新羅使とともに帰国 701 大宝律令の制定
文武	大宝	697		
	慶雲	701		
	和銅	704		
元明	和銅	708	こまろ 大伴古麻呂【左大弁】 (生年不明～757)	710 旅人、左將軍として騎兵・隼人・蝦夷らを率い朱雀大路を行進。 720 隼人の乱(隼人、大隅守を殺害) 旅人、征隼人持節大將軍として出兵
	靈龜	715		
		717		
元正	養老			721 大宰府城門の火災(類聚国史) 728 旅人、大宰帥として大宰府に赴任 妻・大伴郎女、子・家持も同行
		724		
	神龜		やかもち 大伴家持【中納言】 (718頃～785)	729 長屋王の変 730 旅人、「梅花の宴」を催す(万葉集) 同年、帰京(翌年、死去)
聖武	天平			733 古麻呂、遣唐留学生として唐に渡る 740 藤原広嗣の乱(大宰府) 家持、伊勢行幸に従駕
		749		
	天平感宝			753 古麻呂、遣唐使として再び入唐 玄宗臨御の朝賀で新羅と席次争い 独断で鑑真の入船許可
孝謙	天平勝宝			756 聖武天皇御遺愛品を奉獻(東大寺) 757 橘奈良麻呂の変 古麻呂は獄死、他一族も処罰
		757		
淳仁	天平宝字		つくひと 大伴継人【左少弁】 (生年不明～785)	763 藤原仲麻呂暗殺計画の露見 家持、薩摩守へ左遷 同年、藤原仲麻呂の乱
		765		
称徳	天平神護			767 家持、大宰少式として大宰府に赴任
		767		
	神護景雲			770 氷上川継の乱により、家持解官 784 家持、持節征東將軍として蝦夷征討 785 家持没後に藤原種継暗殺事件 家持の官籍除名(806年、恩赦)
光仁	宝龜		とものくにみち 伴国道【参議】 (768～828)	806 永主・国道は流罪、継人は処刑 823 国道、大伴から伴に改姓 842 承和の変 伴健岑、流罪
	天応			
桓武	延暦			
		781		
		782		
平城	大同			
	弘仁			
嵯峨	天長			
	承和			
淳和	嘉祥			
	仁寿			
仁明	齐衡			
	天安			
文徳	貞観		よしお 伴善男【大納言】 (811～868)	851 家持の官籍除名(806年、恩赦) 854 永主・国道は流罪、継人は処刑 857 国道、大伴から伴に改姓 859 承和の変 伴健岑、流罪
		806		
		810		
		810		
		824		
		834		
		848		
		851		
		854		
		857		
清和		859		866 応天門の変 善男流罪、一族処罰

た。また、大宰府管轄下の諸国には、筑前国に山上憶良（筑前守）、筑後国は葛井大成（筑後守）等の優れた歌詠みも赴任しており、彼らとの交流を経て、旅人は歌人としての円熟期を迎えていった（森2019）。

新元号「令和」の典拠である「梅花の歌三十二首 併序」の舞台となった梅花の宴は、大宰府にある大伴旅人邸で催された（画像3）。この宴は「書聖」と称される王羲之（生没年未詳、303～365年頃）が催した「蘭亭の宴」との繋がりが指摘されている。実年代にして約350年も開きがある二つの宴は、いかにして繋がったのか。その背景には、大国・唐の存在がある。唐の太宗（2代皇帝、在位626～649）は、自ら王羲之の伝記を執筆するほど、王羲之に傾倒しており、崩御に際しては陵墓に「蘭亭序」を副葬するよう遺言したと伝わる（島谷他2013）。つまり、旅人が生まれる直前には、王羲之の人気は絶大なものになっており、唐を中心とする律令国家群において、王羲之の書は官僚・文化人が模範とするべき教養の一つとなっていた。

蘭亭の宴は、せせらぎに浮かべた坏が流れ着く前に詩を詠み、流れてきた坏の酒を飲むという「曲水の宴」である。そして、この宴で詠まれた詩集の序文として王羲之が記したのが、傑作「蘭亭序」である。つまり、旅人が催した「梅花の宴、その詩集と序文」の構成は、王羲之が催した「蘭亭の宴、その詩集と序文」の構成と一致する。また、能書として知られる王羲之は、東晋の建国を支えた名族の出身で官僚や將軍職を歴任しており、旅人自身の生涯とも重なる。旅人が王羲之をどの程度意識していたかは定かではないが、舶来の白梅を愛でる唐風の宴を取り入れた梅花の宴は、当時の日本の最先端をいく宴であったのは確実である。

以上を総括すると、梅花の宴および序文は、「①武人・官僚として歩んだ大伴氏の歴史」、「②中国大陸で洗練されてきた文化」、「③対外交流の窓口である大宰府」、「④後世に万葉筑紫歌壇と称される歌詠みとの交流」、「⑤日本の気候と風土」等の、国内外の歴史・文化・自然の重層的な繋がりで成立したと評価できる。新元号「令和」には、アジアの一員としての日本の姿が投影されていると言えよう。

### 3. 律令官人としての大伴氏

日本が築いた律令国家は、天皇集権の法治国家であり、文書行政により支えられていた。大伴旅人、その息子である大伴家持も官僚として、書類作成や添削に励んでいた（画像4）。その姿を垣間見える史料が、家持が署名した「太政官符」である。太政官符とは、律令制下の最高行政機関である太政官が、管轄下にある役所や諸国に命令を下した公文書である。天皇の命令である詔・勅も文書として発行される際には、太政官符を副え、本文の中に詔勅の内容を組み込んで太政官符の形をとって伝達された。家持は、このような太政官符の文書作成者として署名している。この「大伴家持自署の太政官符」は、現存する奈良時代の太政官符四通のうちの一通で、重要文化財に指定されている。「大伴家持自署の太政官符」には、右大臣より神祇官にむけて「大和国広瀬郡の広瀬神社を月次祭の対象社としなさい」と命令が下ったので、実行するようという指示が記されている。古代日本は政教一致の統治がなされていたため、祭祀にかかわる命令も国家の重要な役割であった。このような命令は『続日本紀』等の六国史にも、多数記述が見られる。



画像4 「大宰帥」復元衣装  
（九州国立博物館蔵）

律令国家の成立とともに、古墳時代以来の豪族である大伴氏も、奈良時代には律令官人として活躍した。律令官人は文書行政で国家を運営する一方で、上級官人層では恒常的に政争も繰り広げた。歌人として知られる家持も、757年の「橘 奈良麻呂の変」、763年の「藤原仲麻呂暗殺計画の露見」、782年の「氷上川継の乱」で大伴氏一族の処罰や左遷等を経験している<sup>4)</sup>（中西他2017）。とくに家持自身が没した直後に起こった785年「藤原種継暗殺事件」では、その関与が断じられ官籍剥奪の憂き目にあっている（806年、恩赦）<sup>5)</sup>。これらの政争を経て、大伴氏の勢力は衰えていくことになった。

### 4. 万葉筑紫歌壇と遣唐使

梅花の宴は、中国大陸で洗練されてきた文化を日本が取り込むことで成立した。その過程で大きな役割を果たしたのが、遣隋使・遣唐使、さらには新羅使・遣新羅使である。唐・新羅とは661～663年にかけて朝鮮半島南部で戦火を交えたが、668年以後、7世紀後半～8世紀前半にかけて、両国との友好関係を築いていく。この期間は、日本の律令国家形成期にあたり、唐律令をはじめとする多くの文物が唐・新羅からもたらされた。これらは消極的な受容ではなく、留学を含めた文化習得であり、「梅花の歌三十二首 併序」との関係が注目される『文選』（帰田賦）等の漢籍も積極的に収集された。飛鳥・奈良時代の国家運営の特徴は、担い手である上級貴族にも渡唐経験者が複数存在した点にあり、近代国家建設を進めた明治政府と似た印象を受ける。

そのような渡唐経験者の一人に、大伴古麻呂（旅人の甥、家持の従兄弟）がいる。古麻呂は733年に遣唐留学生として唐に渡り、753年に遣唐副使として再び、入唐を果たす。この際には、新羅使との席次争い等の逸話をのこしているが、とくに重要なのは帰国時における鑑真の乗船許可である。古麻呂の独断が無ければ、鑑真の来日、その後の日本での戒律の確立は果たされなかったと言える。このように、遣唐使を含む各国の外交使節が果たした役割は、政治・宗教・文化・商業という諸分野にまたがり、非常に大きいものであった。彼らの命がけの渡航が国と文化を結びつけ、その末端の一つの現象が、梅花の宴であったと評価できる。

文化交流の恩恵を日本で真っ先に受容できたのが大宰府である。大宰府では近年、外交使節が滞在した客館の実態が明らかになり、大宰府の都市整備と外交機能に密接な関係があることが分かってきた（日本遺産・古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～）（井上2019）。当然、外交使節を受け入れるには、都市整備だけでは足りない。国家の威信をかけて、外交使節を迎えるための技能や教養をもった人員の配置が求められた。後に万葉筑紫歌壇と称される大伴旅人や山上憶良等の歌人（教養人）が、大宰府管内に多数集結していたことも無関係ではない。対外交流の窓口である大宰府には、文化的先進地としての歴史的風土が形成されていた。

ただし、他国との境界域に位置する大宰府には、負の要素も存在する。奈良時代に日本列島を席卷した天然痘は、まず大宰府管内で流行した。また、筑紫大宰・栗隈王が述べたように、筑紫（九州）には外敵から国を守る備えが求められた。国の備えは国家間が友好関係にあるときにも求められ、その負担は防人に代表されるように多くの公民に課せられていた。

### おわりに

梅花の宴が催された天平2年（730）、前年の左大臣・長屋王に次いで、大納言・多治比池守が亡くなったため、旅人は大宰府にいながら臣下最高位となった。そして、同年11月に大納言に任じられ、大宰府から平城京へと向かった。

帰京にあたっては、蘆城駅家で宴が催されるなど、多くの人々に見送られた。また、古代都市・大宰府の外郭線となっていた水城を題材にした、旅人と児島の別れの歌は『万葉集』に収録され著名である（画

像5)。これらの歌は、大納言となった旅人と遊行女婦である児島の身分差とともに、二度と逢えないという両者の予感が哀愁を漂わせている。

平城京にもどった天平3年(731)7月25日、旅人は67歳で没した。旅人が大宰府で詠んだ和歌は、息子の大伴家持等の編纂を経て『万葉集』に収録され、「令和」の時代にいたるまで親しまれている。



画像5 水城跡

#### 註

- 1) 文化交流展覧の来場者数で集計している。
- 2) 騎馬文化自体が古墳時代中期に定着した渡来文化の一つであり、朝鮮半島と日本列島間の馬の海上輸送は歴史的事実として把握できる。
- 3) 「長屋王の変」は旅人不在の朝廷内で生じた政争であり、皇親勢力の筆頭である長屋王が排斥された。長屋王の邸宅を囲ったのは藤原広嗣の父・藤原宇合で、変後、藤原氏の勢力が拡大した。
- 4) 「橘奈良麻呂の変」では、藤原仲麻呂政権の打倒を目指したが事前に露見。処罰では、遣唐副使として知られる大伴古麻呂も獄死した。「藤原仲麻呂暗殺計画」は、藤原良継(藤原広嗣の弟)主導で進められたが失敗。良継は姓・官籍剥奪。大伴家持は薩摩守に左遷された。天武天皇の曾孫にあたる「氷上川継の乱」でも、大伴家持は連座で一度解官され、782年に赦免されている。
- 5) 長岡宮の造営監督をしていた藤原種継が暗殺された事件。暗殺犯として大伴竹良が逮捕され、大伴氏一族の多くが死罪・流罪となった。この事件は、早良親王の配流・憤死にまで発展し、平安京遷都の要因にもなった。

#### 参考文献

- 井上信正2019「[西の都] 大宰府と外交施設」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館
- 小嶋篤2016『大宰府の軍備に関する考古学的研究』九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
- 小嶋篤2019「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』第9号 埴輪検討会
- 小嶋篤2021「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会
- 島谷弘幸(監修)2013『もっと知りたい書生 王羲之の世界』東京美術
- 中西進(監修)2017『官人 大伴家持—困難な時代を生き抜いた良心—』桂書房
- 原田大六1973『新稿 磐井の叛乱』三一書房
- 森弘子2019「梅花の宴—遠の朝廷の文華—」新元号記念特別企画「令和」関連特別講演会資料 九州国立博物館

### 第3章

## 象嵌大刀と刀装具の世界

小嶋 篤

### はじめに

刀は「サムライ」を象徴する武器であり、日本列島の武装体系の中で独自の発展を遂げ、今日ではひろく「日本刀」と総称され親しまれている<sup>1)</sup>。本発表で取り上げる古墳時代は、両刃の剣から片刃の刀(直刀)へと近接戦闘武器の主体が移行する時期にあたり、大局的には日本刀成立に向けた胎動がはじまる。この胎動は片刃という形態的共通に留まらない。日本刀が単なる武器ではなく、特権階級では権威を具備、あるいは神性を帯びた器財であったのと同様に、古墳時代の刀も権威と結びつくことで形態変化を生じさせ、象徴的器財にもなった点で共通項を見出せる。

本稿では古墳時代に用いられた刀のうち、象嵌大刀に着目する。象嵌大刀には刀身や装具の形態・構造的特徴に加え、古代人が意図的に埋め込んだ文字や文様がのこされており、古墳時代の技術や思想、社会組織等を探る有益な情報が抽出できる。九州国立博物館文化交流展「古墳時代への誘い」(令和2年1月1日～2月26日)で、初公開した象嵌大刀(伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀)もその一つである。まずは、今日確認されている古墳時代の刀剣銘文を概観する。

### 1. 古墳時代の刀剣銘文

古墳時代の刀剣銘文では、以下の8振(時代順に配列)が確認されており、いずれも時代像を物語る重要資料として認知されている<sup>2)</sup>。

①東大寺山古墳出土鉄刀(奈良県): 4世紀

「中平□□[184～189年]五月丙午、造作文刀百練清(釧)、上應星宿、(下辟不祥)」

②石上神宮伝世七支刀(奈良県): 4世紀

「泰(和)四年[369年](五)月十(六)日丙午正陽、造百練(鉄)七支刀、出辟百兵、宜供侯王、永年大吉祥」

「先世以来、未有此刃、百濟(王)世(子)奇生聖音、故為倭王旨造、伝示(後)世」

※七支刀は考古学分類では両刃の剣に属する。

③稲荷台1号墳出土鉄剣(千葉県): 5世紀

「王賜□□敬□」「此廷□□□□」

④埼玉稲荷山古墳出土鉄剣(埼玉県): 5世紀

「辛亥年[471年]七月中記、乎獲居臣、上祖名意富比跪、其兒多加利足尼、其兒名豆已加利獲居、其兒名加披次獲居、其兒名多沙鬼獲居、其兒名半豆比」

「其兒名加差披余、其兒名乎獲居臣、世々為杖刀人首奉事来至今、獲加多支齒大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也」

⑤江田船山古墳出土鉄刀(熊本県): 5世紀

「(治)天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无(利)豆、八月中、用大鐵釜、并四尺廷刀、八十練、(九)十振、三寸上好(刊)刀、服此刀者、長壽、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太(和)、書者張安也」

⑥岡田山1号墳出土鉄刀（島根県）：6世紀

「額田部臣□□素□大利□」

⑦元岡古墳群G6号墳出土鉄刀（福岡県）：6世紀

「大歳庚寅〔570〕正月六日庚寅日時作刀凡十二果□」

⑧箕谷2号墳出土鉄刀（兵庫県）：7世紀

「戊辰年〔608〕五月□」

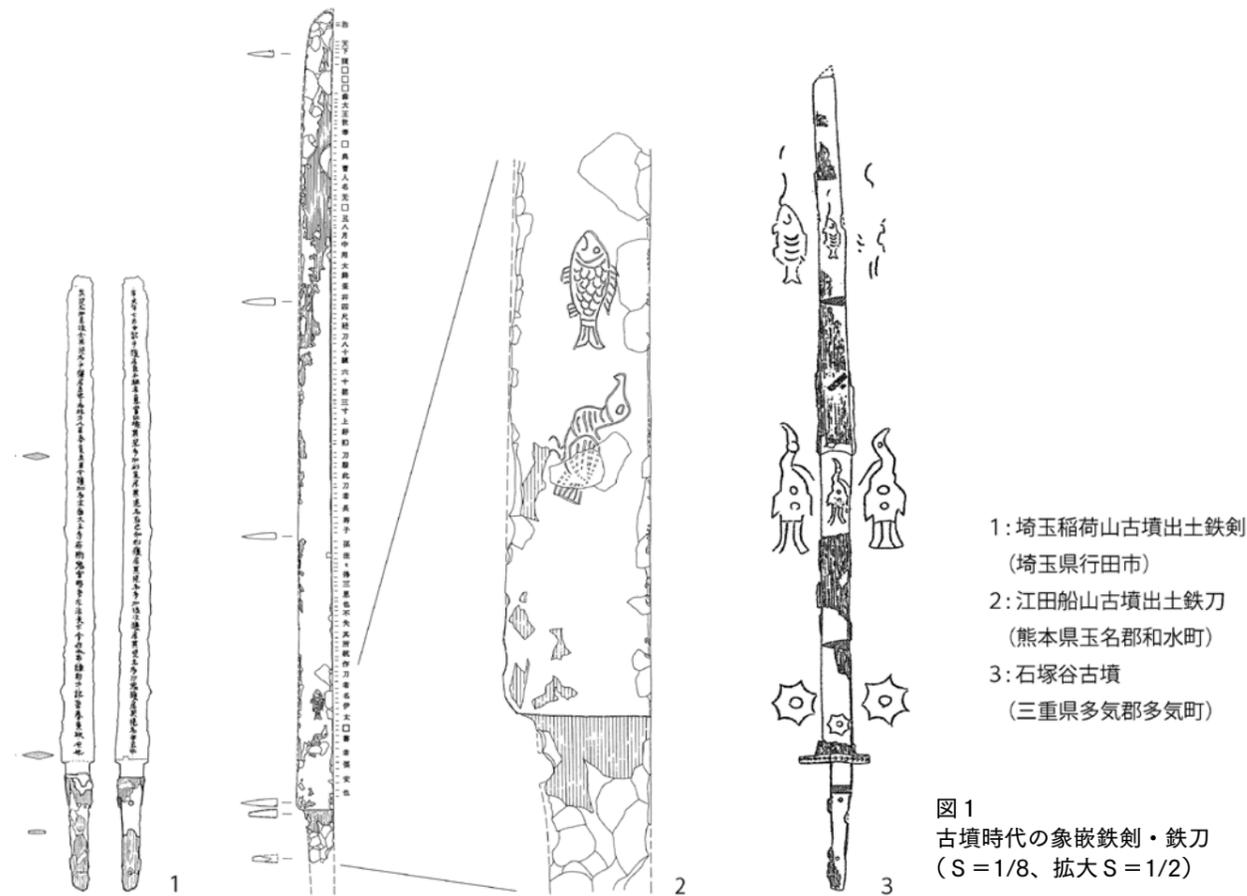
②石上神宮伝世七支刀は、土中にうずもれることなく、今日まで守り伝えられてきた神宝である。刀身に暦が記されており製作年代が把握できるとともに、銘文と象嵌技術（なめくり象嵌）から、百済で製作されたことが確認できる（鈴木2017）。七支刀銘文には「出辟百兵」・「永年大吉祥」という吉祥句に続いて、「百済王」と「倭王」が登場する。本銘文からは王の武威を前提とした、中国（東晋）の冊封体制の外縁に位置する百済・倭の国際関係が透けて見える。なお、七支刀は『日本書紀』神功皇后52年に記載がある「七枝刀（ななつさやのたち）」と同一品と見られ、百済からもたらされた旨が記されている。

七支刀のような武器・武具の長期保管は、律令兵制の整備が進む飛鳥時代（7世紀後半）以降に顕在化するが、本例から古墳時代にも一部で武器の長期保管がなされていたことが分かる（小嶋2016）。文献史料では『日本書紀』垂仁天皇39年の記載に、茅渟の菟砥の川上宮で作った「劍一千口」を石上神宮に納めたとあり、加えて「神宝を収める高い宝庫（高床倉庫）」と保管施設の記述が続く。この石上神宮における宝庫は、『日本後紀』延暦24年（805）にも記載があり、山城国葛野郡に収納していた「兵杖（武器・武具）」を石上神宮に返還する際に、「単功十五七千余人」を要したと記述がある。単功は延人数だが、157,000人で運搬するという膨大な量の武器・武具が、9世紀の石上神宮の宝庫に累積していたことは確認できる。内容物の多くは飛鳥時代以降に製作された武器・武具であったと想定されるが、七支刀や鉄盾の事例から古墳時代の製品も含んでいたと判断できる。

顕著な長期保管ではないが、個人的保管期間（製作年代と埋没年代のズレ）では、近年新たに発見された⑦元岡古墳群G6号墳出土鉄刀が注目できる。本鉄刀は570年（6世紀後半）に製作されたと銘文から想定されているが、出土古墳は7世紀前半に築造されており、個人的保管期間は30～50年の範囲で見積もれる。ただし、本鉄刀の象嵌については、毛筆による筆跡を忠実に再現する象嵌技術（平象嵌相当）から7世紀後半以降の製作という指摘がある（鈴木2017）。本指摘はG6号墳の築造・埋葬時期とも整合しており、今後さらなる議論が必要であろう。同様の問題は、①東大寺山古墳出土鉄刀にもある。「中平□□〔184～189年〕」の銘文からは2世紀の中国での製作と読み取れるが、一方で、3～4世紀の三角縁神獣鏡の銘文と内容・字面が類似することから、3世紀末～4世紀末の日本列島内で製作されたという説も提示された（鈴木2017）。いずれに決着するにせよ、銘文内容（文字史料）を「史実」と直結するのではなく、資料間の相互検証を経た論証手続きが求められていることは確かである。

④埼玉稲荷山古墳出土鉄剣は、「辛亥年〔471年説有力〕」という暦に続いて、「乎獲居臣（ヲワケの臣）」の8代の系譜が記されている（図1）。また、「世々為杖刀人首奉事来至今、獲加多支齒大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下」から、「杖刀人首」として「獲加多支齒大王（雄略天皇説有力）」に仕えていた旨が記されている。父系に基づく血統認識と、大王と地方豪族の関係を物語る重要資料である。⑤江田船山古墳出土鉄刀の「獲□□□齒大王」も、上記銘文から「獲加多支齒大王」と判読されている。本鉄刀の所有者と見られる「名无弓」は、「典曹人」として仕えていた。上記の鉄剣・鉄刀については、改めて後述する。

⑥岡田山1号墳出土鉄刀の象嵌銘「額田部臣」は、6世紀の地方（山陰）において部民制が展開していたことを実証する（図2）（松尾2019等）。額田部は額田部皇女（後の推古天皇）の養育に資する人々を指し、臣とあることから本鉄刀の保有者は額田部の統括者であったと分かる。また、岡田山1号墳は出雲国造の墳墓と見られる山代二子塚古墳に次ぐ規模の古墳であることから、出雲国造を頂点とする地域秩序に



1: 埼玉稲荷山古墳出土鉄剣（埼玉県行田市）  
2: 江田船山古墳出土鉄刀（熊本県玉名郡和水町）  
3: 石塚谷古墳（三重県多気郡多気町）

図1 古墳時代の象嵌鉄剣・鉄刀（S=1/8、拡大S=1/2）

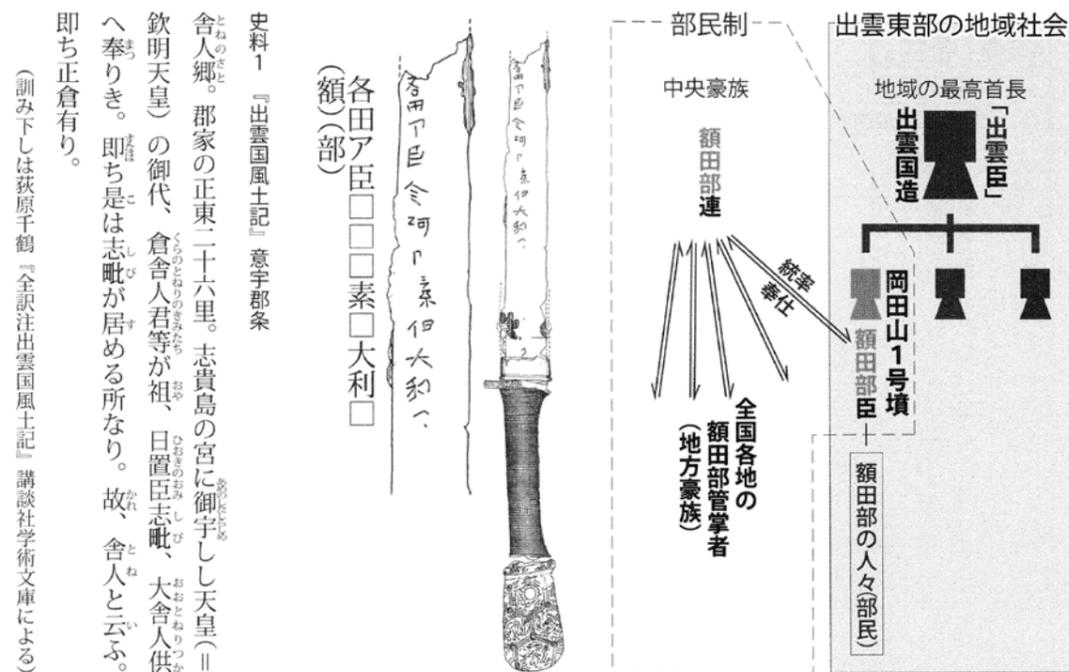


図2 岡田山1号墳出土象嵌鉄刀と部民制（松尾2019）

も属していたと想定されている。このような同一人物を覆う重層的な社会組織は、『日本書紀』記載の豪族名からもうかがえる。ここでは、その代表例として敏達天皇12年（583）記載の「火葦北国造刑部鞞部阿利斯登」（ひの・あしきたの・くにのみやつこ・おさかべの・ゆけい・ありしと）を挙げる。本豪族の名から、同人物は現在の熊本県八代市周辺にいた国造であるとともに、刑部（皇族に仕える部民）と鞞部（大伴氏に仕える部民）を併任していたことがうかがえる。さらに興味深いのは、同人物の子供である「日羅」が百濟達率（百濟国の官僚）の地位にあり、大伴金村を指して「我が君」と称した点である。6世紀の人々が、倭王権・中央豪族・地方豪族・国造制・部民制、さらには諸外国という幾重にも重なった社会組織の中で暮らしていたことが分かる。

## 2. 九州国立博物館所蔵の象嵌大刀

2018年、九州国立博物館に新たな象嵌大刀が収蔵された。本大刀は「群馬県藤岡市西平井<sup>にしひらい</sup>」で出土したと伝わる資料である（画像1～3）。以下では、本大刀の特徴を紹介するとともに、出土伝承地について検討を加える。なお、本大刀の事実報告については、小嶋2021b「伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀の研究」に詳述している。

### （1）象嵌大刀の特徴

【刀身】切先付近に欠損、損傷が見られるものの刀身のほぼ全体が良好な状態で遺存する。復元全長は約120.5cm、刀身幅（刃関幅）は4.5cm。刃関は二段関に成形され、関付近に<sup>はばきもとあな</sup>鰻本孔が一個穿たれている。茎には三個の目釘孔が確認できる。

本大刀を特徴づける銀象嵌は、刀身中央の片面（佩裏）に「魚」と「鳥」、鰻本孔両面の周囲に「花形輪状文（連弧輪状文）」が埋め込まれている（画像4）。背等に他の象嵌がないか、X線CT等で検討を加えたが、他の象嵌は存在しなかった。上記の象嵌を詳細に観察すると、象嵌が埋め込まれた溝はきれいな直線・曲線ではなく、幾度も途切れたり、想定される計画線よりもはみ出ている箇所が数多く確認できる。これらの特徴は、刀身に溝をつくる際の方法や工具により生じた。他の類例（⑤江田船山古墳出土鉄刀等）と技術的検証から、本特徴は「工程1：一文字状打ち込み鑿を連続的に打ち、列点状に線を刻む」と「工程2：円弧状なめくり鑿で、線をなめらかに整形する」という二つの工程を経ていると把握できる（画像5）（鈴木2014）。この不揃いともいえる溝に銀を埋め込むわけだが、微細な打ち込み痕にも銀が入り込んでいたため、溶けた銀を流し込む形で象嵌がなされたと考えられる。

【刀装具】刀装具は柄<sup>つか</sup>と鞘が確認できる。柄の遺存状態は断片的だが、柄木に带状の紐を巻き付ける構造であったことが分かる。刀身と柄の固定は、柄木上方（刀身背側）から刀身を落とし込み、3個の目釘を用いてなされている。

鞘は3片の鞘木がのこり、うち1片は鞘口方向の端部がのこる。他2片との接合面は存在しないが、鞘木の破損状況と刀身錆との対応関係からおおよその配置が把握できる。鞘外面に取り付けられた金銅装具はすべて剥落し、固定のための釘足のみが残る。表面観察およびX線CTスキャナから、鞘木の木取り状況が把握でき、丸太から板材を製作したのち、板材を削り出すことで鞘木を成形する工程がうかがえる。鞘木表面には全面的に織布が張り付いており、色調は黒色を呈する。

断片的に残る釘足は、貴金具・鞘口金具・刃留金具の固定に用いられたものであり、貴金具・鞘口金具の装着箇所には、金具表面から彫られた文様（点打ち）が鞘木に転写されて残る。また、鞘木の貴金具・鞘口金具・刃留金具が剥がれた箇所には、やや太めの撚糸で織布を縫い付ける状況が確認できる。鞘木内面には刀身をおさめるための削り込みがなされているが、漆の塗布等の表面処理は認められない。

以上情報を統合すると、鞘は「工程1：板材から佩表・佩裏の鞘木を削り出す」→「工程2：表裏の鞘木をあわせた後、鞘棟側から織布を被せて縫合（端切れ縫合巻き）」→「工程3：鞘外面に黒漆を塗る」



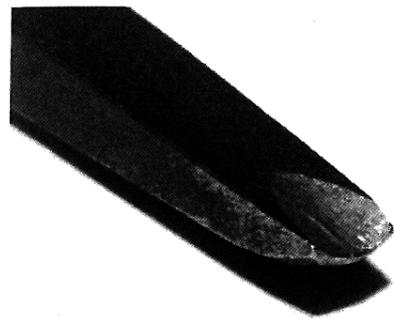
画像1 刀身佩表・鞘裏面

画像2 刀身佩裏・鞘表面

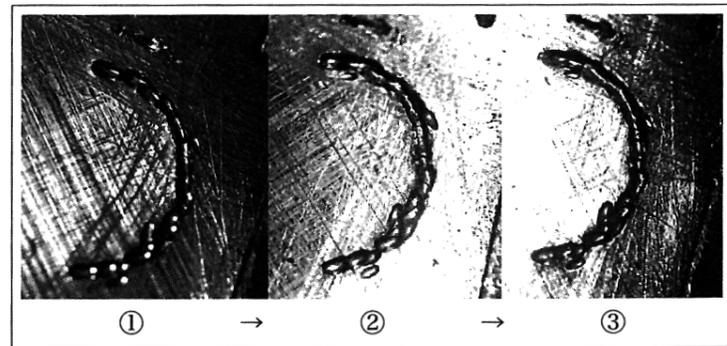
画像3 刀身・鞘のX線CT画像  
※切先部分を除く



画像4 伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌鉄刀の細部



画像5 円弧状なめくり鑿と彫金工程  
（鈴木 2017 より引用）



下書きに沿って小さな一文字状打ち込みたがねを打ち（①）  
円弧状なめくりたがねで円弧を次第になめらかにする（②→③）。  
円文象嵌の溝には打ち込みたがねの跡が明瞭に残る。

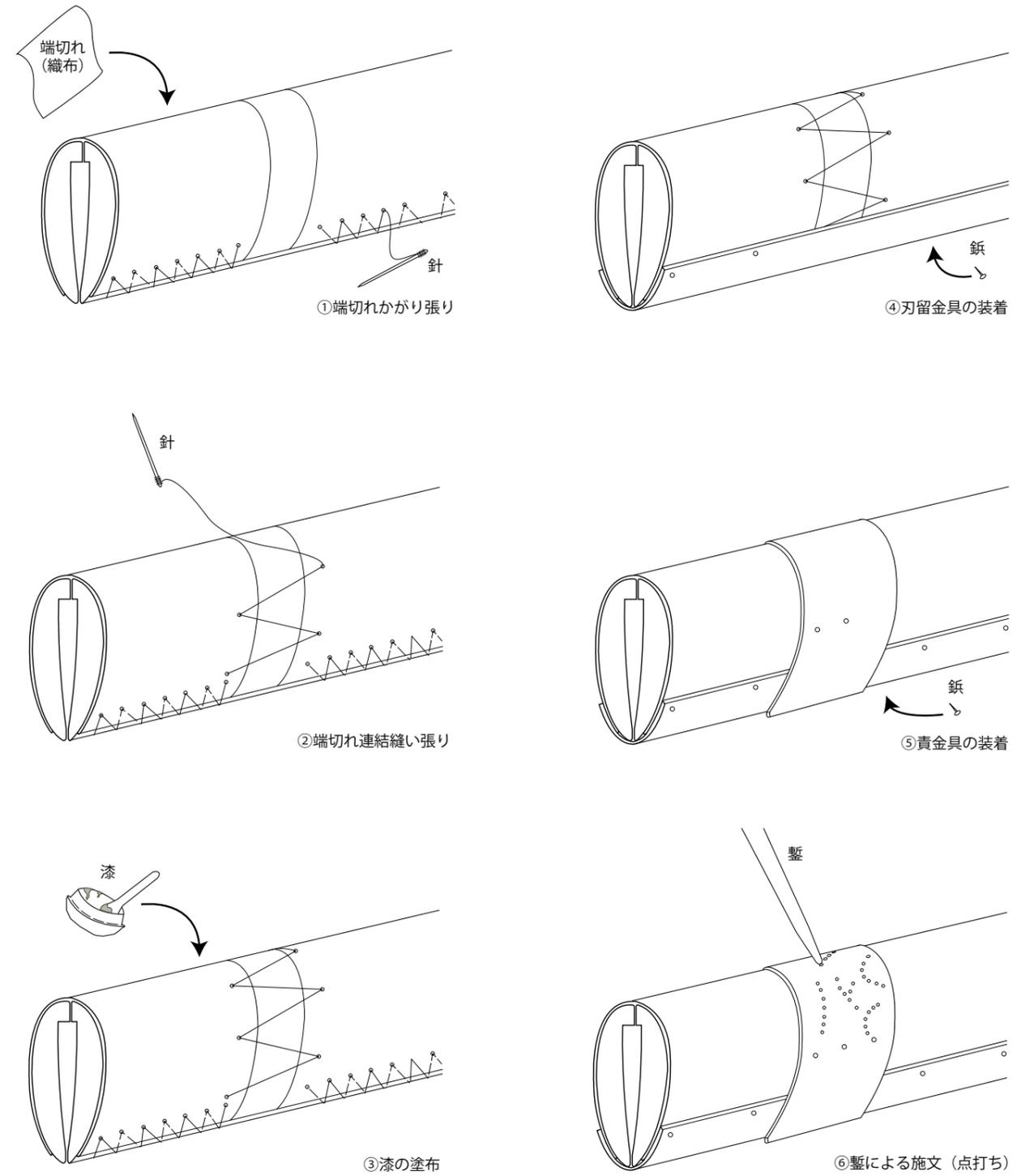


図3 伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀の鞘の製作工程模式図（小嶋2021b）

→「工程4：金銅装具（鞘頭金具・責金具・鞘口金具・刃留金具）を鉾で固定する」→「工程5：金銅装具の表面に鑿を打ち込んで文様を刻む（点打ち）」の5工程で製作されたと考えられる（図3）。なお、上記5工程うち、工程2の織布の縫合では、「工程2-1：鞘棟側から被せた織布の鞘刃先側で糸を用いて鋸歯状に縫う（端切れかがり張り）」作業、「工程2-2：織布同士を糸でつなぐ（端切れ連結縫い張り）」作業の二つの小工程を内包する。利用した織布の大きさは均一ではないが、おおむね14×12cmと小さく、「端切れ」と言ってよい素材を用いる。鞘製作時に意図的に織布を裁断した可能性はあるが、もともと手許にある「端切れ」を利用した可能性もある。この端切れを縫合する目的は、織布の端部に始末をつけるためではなく、鞘木に織布を張ることにある。縫合技法は現在の「かがり縫い」に類似し、主目的の「端切れを張る」と組み合わせて、筆者は工程2-1を「端切れかがり張り」と呼ぶ。これに対し、工程2-2は端切れ同士を連結させることで横方向に張ることから、「端切れ連結縫い張り」と呼ぶ。そして、両者を組み合わせた鞘巻き技法を「端切れ縫合巻き」と呼称する。

以上から、完成時の大刀の外観は光沢をもった黒鞘に金色の金具を装着した姿であったと判断できる。

## （2）象嵌大刀の出土伝承地

出土伝承地を検討するにあたり、まず出土状況の基本情報を把握できる「資料の残存状態」を確認する。本資料は修復がなされているが、鞘木内面の錆付着状況から見ても、保存処理で大々的な錆落としがなされたとは考え難く、ほぼ当時の外形を保った状態で遺存してきたと判断できる。紫外線による劣化も認められないため、当然、外気への長期間の露出も認められない。以上を総合すると、水中や土中に埋没していたのではなく、石室のような密閉空間内に安定した状態で置かれていたと考えられる。他の類例をふまえても、古墳への副葬品と見てよく、資料の残存状態から、発見時まで古墳は未開口（未盗掘）であったと想定する。

出土伝承地の群馬県藤岡市西平井は利根川の上流域に位置し、令制国の上野国に属する。碓氷峠をぬけた東国への入り口とも言える場所に位置し、5～7世紀の有力古墳群が形成された地域である。このうち、平井地区では古墳時代中期以降に白石古墳群が造営され、全長175mの白石稲荷山古墳、全長145mの七興山古墳等の大型前方後円墳を含む、245基の古墳が築かれた。ただし、大字「西平井」は白石古墳群からやや離れた南方に位置し、一体の古墳群とは捉えられない。藤岡市教育委員会作成の『藤岡市遺跡分布図（2009年版）』を参照すると、大字「西平井」の範囲では29基が確認されている（藤岡市2009）。いずれも未調査で造営時期も不明だが、通称「大塚」と呼ばれる古墳（詳細分布調査・平井地区No.216、古墳総覧平井地区No.1）を内包する点が注目できる。他の類例から見て、長大な倭装象嵌鉄刀は豪族所有品であるため、この「大塚」が現状での出土有力候補となる。なお、藤岡市域は安閑天皇元年（534）に生じた「武蔵国造の乱」後に、設置された「緑野屯倉」の推定地である。

## 3. 伝群馬県藤岡市西平井出土の象嵌大刀から読み解く歴史

### （1）製作年代

伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀（以下、伝西平井出土大刀）の製作年代を、属性毎に検証する。まず、製作年代把握をする上で、刀身幅（刃闊幅）が注目できる。古墳時代の鉄刀は、古墳時代中期（5世紀）を通じて、刀身幅を広げることが明らかにされている（齊藤2018a）。この変化は純粋な武器としての機能的変化（殺傷力強化のための重量増加等）に伴うものではなく、鞘飾りへの過剰な装飾付加とも連動する豪族の身分表象としての形態変化と捉えられる。伝西平井出土大刀のような倭装大刀は、古墳時代後期前半（6世紀前半）の大阪府・峯ヶ塚古墳（世界遺産・古市古墳群内の前方後円墳）で多量副葬が見られるほか、大阪府・今城塚古墳の大刀形埴輪の多量配列、三重県・宝塚1号墳の船形埴輪船内での誇張表現、福岡県・岩戸山古墳における大刀形石製表飾のように、副葬品・墳丘表飾として重要視されている（齊藤2018b）。その極地とも言えるのが、九州国立博物館でも展示している福岡県・宮

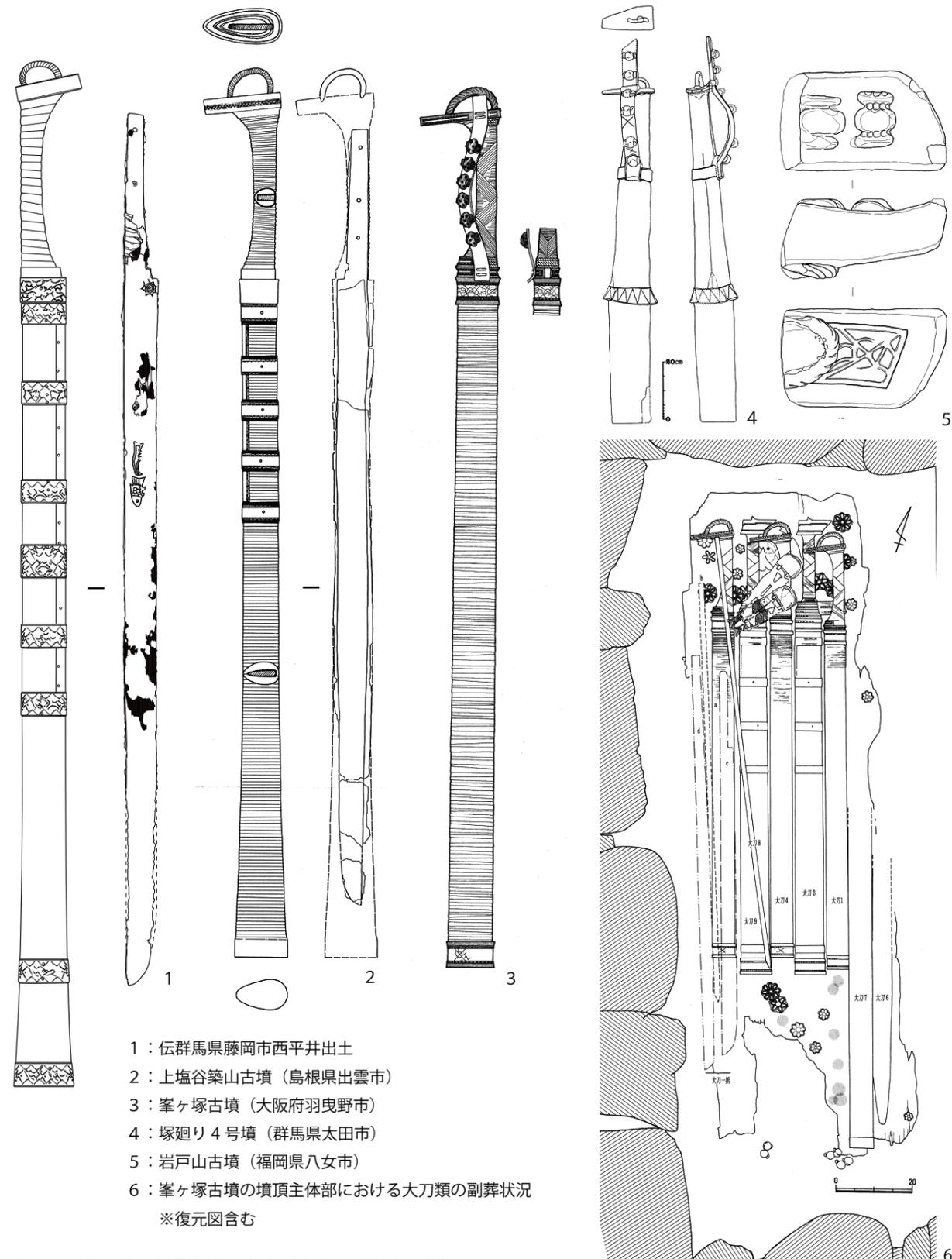


図4 倭装大刀と副葬状況、および倭装大刀形埴丘装飾  
（鉄刀：S=1/8、埴輪：S=1/20、石製装飾：S=1/10）

地嶽古墳出土の頭椎大刀<sup>かぶつちのたち</sup>で、復元全長が約3mにもなる。伝西平井出土大刀の刃関幅は4.5cm、刀身は全長120.5cmで、実用サイズの倭装大刀では最大級の大きさを誇る。したがって、刃関幅が顕著に拡大する古墳時代中期後半（5世紀後半）以降に製作されたと把握できる（齊藤2018a）。また、鞘には金銅装具が用いられており、倭装大刀の金属装化がはじまる古墳時代後期前半（6世紀前半）以降の製作と見られ、刀身の検討結果とも整合する。

次に象嵌文様に注目する。「魚」・「鳥」・「花形輪状文（花形文）」を組み合わせた銀象嵌は、他に熊本県の江田船山古墳出土大刀、三重県の石塚谷古墳出土大刀がある。一見して分かるように、江田船山古墳出土大刀の方が精緻なデザインであり、伝西平井出土大刀の文様は形骸化が進む。とくに伝西平井出土大刀は、かろうじて「鳥」と判別できる水準にある。したがって、伝西平井出土大刀は江田船山古墳出土大刀（5世紀後半）よりも後出すると見てよく、刀身・刀装具の検討結果とも整合する。石塚谷古墳出土大刀の文様は、魚と鳥については伝西平井出土大刀の文様と前後関係が明確ではない。しかし、石塚谷古墳出土大刀（6世紀後半）の花形輪状文の形骸化は著しく、刀装具等を加味しても、伝西平井出土大刀の方が古く位置づけられる。動物・神獣の図像を刀身に刻む象嵌大刀は、日本列島では5世紀に突如出現し、6世紀前半までに事例が集中する。

上記の検討結果を総合すると、伝西平井出土大刀は古墳時代後期前半（6世紀前半）に製作されたと考えられる。

## （2）象嵌文様の意味

「魚」・「鳥」・「花形輪状文（花形文）」を組み合わせた象嵌大刀は、今回新たに確認した伝西平井出土大刀を加えて3例となった。以下では、これら3例の象嵌文様の意味について検討する。

描かれた鳥は、江田船山古墳例が「鈎形の<sup>くちばし</sup>嘴・<sup>くびひも</sup>頸紐」、石塚谷古墳例が「鈎形の嘴・頸紐・両翼を閉じて前に進む姿」から、「鶉（う）」とする見解が提示されている。伝西平井出土大刀も「鈎形の嘴」が表現されており、同じモチーフの図像と捉えてよい。同一面の鳥前方に魚を描くという点も「鶉」さらには、「鶉飼漁」を描いたとする説を補強する。

「鶉飼漁」は単なる生業の一場面として描かれたのではなく、王権儀礼の一場面として描かれたと考えられる（森田2018）。鶉・鶉飼漁に関する資料は、畿内と関東に集中し、継体天皇陵と目される今城塚古墳等の巨大古墳の墳丘表飾（埴輪）に数多く確認できる。関東でも保渡田八幡塚古墳等の大型古墳の埴輪で見られる。これら墳丘表飾の生産時期は5世紀後半～6世紀後半で、「魚」・「鳥（鶉）」を組み合わせた象嵌大刀の製作時期と一致する。

ただし、象嵌大刀の「魚」には鶉飼漁の範疇では説明できない要素も見られる。福岡県・番塚古墳の象嵌大刀刀身の「魚」は、口元から蓮華の蔓がのびるように描かれる。このような表現は、江田船山古墳・伝西平井古墳出土大刀には認められないが、石塚谷古墳出土大刀には認められる。花と魚の組み合わせは、中国の伝統年画に継承される「花喰魚（吉祥文）」に類例がある（重藤・高久1993）。また、魚の後に鳥が続く図案は、後漢の画像石（157年）、西晋代の墓室天井壁画、北魏の木棺漆画（5世紀後半）、高句麗の三室塚天井壁画（5世紀後半）に類例があり、天界図像として東アジアでひろく共有されていた（塚田2016）。鉄刀象嵌銘からも分かるように、日本列島の豪族間でも「吉祥句（①東大寺山古墳・②江田船山古墳象嵌銘文等）」が認知されており、図案のみを別枠で認識する訳にはいかない。

王権儀礼としての鶉飼漁と、東アジアで共有される天界図は、5世紀後半の日本列島で同時併存していたと見るべきで、象嵌文様の図案も必ずしも二者択一ではなく、複合事例を内包していたと考える。外来文化と内在文化の融合と改変は、日本列島において通時的に認められる現象であり、渡来文化（製陶・乗馬・炊飯・紡織等）の体系的な導入が図られた古墳時代中期（5世紀）においては、多分野にまたがって生じている。

以上の象嵌と外装の検討結果から、伝西平井出土大刀は権威の象徴（身分表象）を第一義とし、吉祥の意味合いも複合していたと考えられる。

## 4. 象嵌大刀と豪族

鋼素材（刀身）へ鋼工具（鑿）で溝を彫る技術は、21世紀に至っても最難関の技術であり、古代においてはより高水準の最先端技術であった（鈴木2017）。象嵌大刀の多くは、彫金技術の水準と「獲加多支齒大王」の銘文から、朝鮮半島や倭王権下の工房での生産が想定されてきたが、九州南部における円弧状なめくり鑿の存在（円文線刻鉄鏃）が確認されたことで、生産工房は日本各地に存在していた可能性が提示された（鈴木2017）。その背景には、渡来系工人が各地の豪族の求めに応じて出向いて製作、つまり、彫金専門の移動型工人集団が「渡来系工人ネットワーク」を形成したと想定されている（鈴木2017）。本仮説では繰り返し、「王権と工人の関係は主従関係ではなく、平行関係にある」ことが主張されている。工人の生活基盤が権力ではなく、自らの技術にあることは肯首できる。しかし、王権と工人（技能者）の関係を論じるのであれば、金工技術をこえた、より体系的な視野でも論じる必要がある。

古墳時代に運用された「人制」や「部民制」は、各集団の職能（技術）を駆使して、大王や豪族に従事することを義務付けている。また、巨大古墳の墳丘表飾に表現された鶉飼、鷹飼、力士等の技能者の埴輪は、王権と技能者に主従関係が存在したことを端的に示している。『古事記』・『日本書紀』でも、たびたび登場する技能者に対し、神・王権・豪族は強い関心を示し、彼らを自らの組織内に積極的に取り込もうとする様が記されている<sup>3)</sup>。発掘調査からの裏付けとしては、古墳時代中期の渡来系集団の墓地（古寺・池ノ上墳墓群等）は、倭人集団の造墓秩序の下で墓域を共有する形で営まれており、同一組織（豪族下の地域集団）を形成していたと判断できる（小嶋2013・2017）。ただし、上記の見解は王権・豪族と工人が必ず主従関係にあるという主張でもなければ、工人集団独自のネットワークの存在を否定する主張でもない。王権は技能者に対する強い関心をもっており、両者に主従関係が結ばれる場面は存在したという主張であることを強調しておく。あえて、ネットワークという表現を用いれば、上述した「火葦北国造刑部鞞部阿利斯登、子・日羅」のように、古墳時代の人々は「単一の論理で形成されたネットワーク下で生活していたのではなく、異なる論理で形成された複数のネットワーク下で生活していた」のが実情であろう。筑紫君磐井も①王権、②筑紫の豪族、③新羅等の複数のネットワークを駆使して基盤をつくり、相反するネットワークの矛盾が表出することで、「乱」と記された歴史的事件の当事者となったのである。

話を象嵌大刀に戻すと、地方における彫金技術（円弧状なめくり鑿）の存在から、伝西平井出土大刀等の象嵌大刀製作工房を現状では特定地域に限定することはできない。ここでは技術的視点（製作地論争）を一旦離れ、文様・象嵌銘の思想的背景から象嵌大刀と豪族の關係に着目する。

埼玉稲荷山古墳出土鉄剣は乎鞞居臣（ヲワケの臣）が代々「杖刀人の首」として奉事し、「獲加多支齒大王」に仕えた旨が記されている。江田船山古墳出土鉄刀においても、「獲□□□鹵大王」の御世に「典曹人」として奉事したことが記されている。文面から見て、鉄剣・鉄刀の製作発注者は王権ではなく、地方豪族であったと見られるが、「獲加多支齒大王（獲□□□鹵大王）」、すなわち王権に対し自身がどのように奉事しているのかを表明する点は重要である。宮への上番を含む地方豪族の奉事は、人・物の移動とともに、豪族間における情報共有を促し、王権そのものを支える社会認識（神観の共有等）も再生産しただろう。継体天皇21年（521）、筑紫へ進軍してきた近江の毛野臣に対し、「昔は仲間として肩や肘をすり合わせ、同じ釜の飯を食った仲だ」という筑紫君磐井の発言も、倭王権への参画（畿内への上番）を示唆する<sup>4)</sup>。

豪族の権威を象徴する倭装大刀は、王権下の豪族間で形成された共通認識の上に存在している。儀礼行為としての「鶉飼漁」、吉祥文としての「魚・鳥」も、理解度の差はあれども、豪族間の共通認識の一つであった。熊本県・三重県・伝群馬県という遠隔地にまたがる「魚」・「鳥」・「花形輪状文（花形文）」を刻む倭装象嵌大刀も、『王権下の豪族』という存在を抜きには成立し得ない。

## おわりに

伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀を基点に、主に古墳時代中期～後期（5～6世紀）の王権と地方豪族の関係を探った。本大刀の出土伝承地である群馬県域は、古墳時代には上毛野君が権勢をふるった地域である。上毛野君は天智天皇2年（663）、前将軍として百済救援戦争に派遣されている。また、上毛野君と同祖氏族である車持君は、筑紫の車持部・充神民（かむべらのたみ）を配下の部民に編入しようと試み、宗像神（宗像君）と激しい衝突を起こした<sup>5)</sup>。このように遠く離れた東国と筑紫は、朝鮮半島情勢と絡みながら、幾度も結びつき、律令制下では「防人」として、東国からの兵士派遣が制度化されることにもなった。

筑紫と東国の関係は6世紀前半に「筑紫君磐井の乱」・「武蔵国造の乱」という反乱伝承と、その後の「屯倉」の設置による王権の拡大という共通点でも重要である（小嶋2021a）。6世紀前半に製作された伝西平井出土大刀の存在は、「緑野屯倉」という視点からも注目できる。

## 追記

本稿は令和2年（2020）2月23日に開催予定であった九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム『大宰府前夜－筑紫の大宰と豪族－』の配布資料を基に、小嶋2021bでの研究成果を反映した内容となっている。伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀の実測図等の事実報告は、小嶋2021bを参照頂きたい。

## 註

- 1) 中国・宋時代の詩人、歐陽脩（1007－1072）による「日本刀歌」を参照すると、平安時代後期（11世紀）には、東アジア諸国で「日本刀」の認識が成立していたことが分かる。
- 2) 各銘文の文字の同定については、現在も検証が進められており、研究者間で結論が異なる文字もある。また、文字同定は不能だが、銘文の痕跡が確認できる資料は他にもある。
- 3) 「〔応神天皇37年2月〕阿知使主・都加使主を具に遣わして、縫工女を求めさせた。…呉の王は縫女の兄媛・弟媛・呉織・穴織の4人を与えた」〔〔応神天皇41年2月〕阿知使主らが呉から筑紫についた。そのときに宗像大神が工女らを欲しいといわれ、兄媛を大神に奉った〕  
上記は『日本書紀』でも応神紀に記された内容であり、史実とするわけにはいかないが、古墳時代における技能者に対する王権・豪族の関心の高さまでは認められる。
- 4) 磐井に直接関わる考古資料は、現状では岩戸山古墳出土品に限られるが、その墳丘表飾は畿内系埴輪（V郡系埴輪）と石製表飾の併用がなされており、表飾の品目（武人・力士・大刀等）自体は畿内の大王墓（今城塚古墳等）と類似する。岩戸山古墳の墳丘表飾は、筑紫の中でも畿内との結びつきがとくに強い。
- 5) 車持君は東国を離れ、畿内に在住する内廷氏族として存在していた。

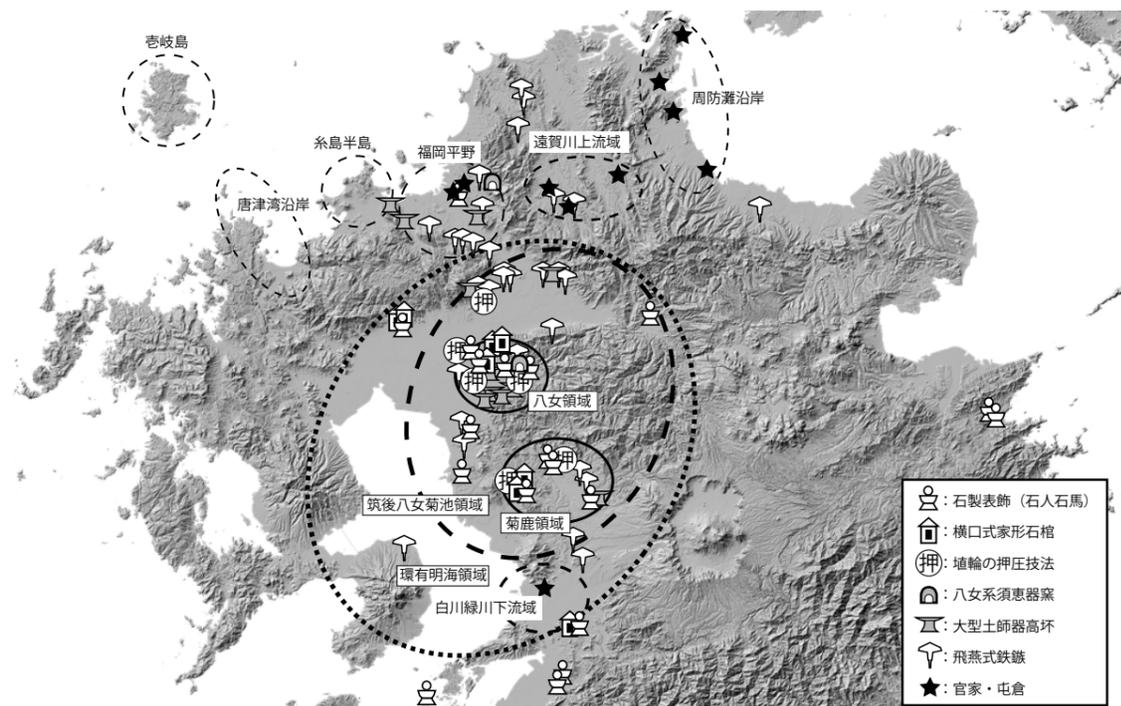
## 参考文献

- 大谷晃二1999「武器・武具」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県教育委員会
- 小嶋篤2013「九州北部の渡来人集団と地域社会－古寺・池の上墳墓群と吉武遺跡群の検討－」『九州歴史資料館研究論集』38 九州歴史資料館
- 小嶋篤2016『大宰府の軍備に関する考古学的研究』九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
- 小嶋篤2017「埴輪に見られる技術複合」『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会
- 小嶋篤2019「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』第9号 埴輪検討会
- 小嶋篤2021a「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会
- 小嶋篤2021b「伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀の研究」『東風西声』第16号 九州国立博物館
- 齊藤大輔2018a「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究』vol.14 古代武器研究会
- 齊藤大輔2018b「岩戸山古墳出土の振り環頭大刀形石製表飾」『古文化談叢』81 九州古文化研究会
- 齊藤大輔2019「古墳時代後・終末期における武装保有の実態－境界領域としての北部九州－」『九州考古学』第94号 九州考古学会

- 重藤輝行・高久健二1993「武器」『番塚古墳』苅田町文化財調査報告書第20集 苅田町教育委員会
- 鈴木勉2014「九州の円弧状なめくりたがねと（渡来系）工人ネットワーク－江田船山銀象嵌銘大刀など円文を持つ鉄製品－」『文化財と技術』第6号 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
- 鈴木勉2017「日本古代象嵌技術の起源と展開」『文化財と技術』第8号 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
- 塚田良道2016「魚を追う鳥」『魂の考古学』豆谷和之さん追悼事業会
- 藤岡市教育委員会2009『藤岡市遺跡分布図』
- 松尾充晶2019「出雲の装飾付大刀からみた、古墳時代後期の地域首長と王権」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会
- 森田克之2018「倭王権と鶴飼儀礼・序論－頸紐を巻き、翼をひろげ、木にとまる－」『構築と交流の文化史』雄山閣

筑紫・火・豊という広域で展開したとされる「筑紫君磐井の乱」を考古資料から検証する。反乱軍の主力であろう筑紫君の主たる直接動員範囲は、大型古墳築造の動員体系（古墳築造技術の広がり）から見ると、筑紫国・八女領域（矢部川流域）に限定される。つまり、広域での反乱には他豪族の命令系統に基づく、間接動員が不可欠であったことは確かである。この間接動員の筆頭には火国・菊鹿領域（菊池川上流域）が挙げられ、造墓動員の重複だけでなく、物流面でも長期的に結びついていることがうかがえる。

（小嶋 篤）



「筑紫君磐井の乱」と「筑紫国造」に関する考古資料とミヤケ（小嶋2021より一部抜粋）

参考文献

小嶋篤2020「筑後の横穴式石室墳－筑後型石室と八女型石室－」『福岡大学考古学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会  
小嶋篤2021「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会

第4章

金銀装大刀と豪族

大谷 晃二

はじめに

古墳時代後期後半・終末期（6世紀後半～7世紀前半）は、単竜・単鳳・双竜・獅嚙・三累環頭、円頭、圭頭、頭椎など様々な形式の金銀装大刀が存在する。これら多様な大刀の形式が何を反映しているのかについては、いくつかの説がある。例えば、身分や地位（穴沢・馬目1989）、何らかの職掌（外交・軍事・祭祀など）（町田1976、穴沢・馬目1986、橋本2013）、畿内の特定有力豪族との結びつき（後藤1936、新納2002）を反映するなどである。

この問題に迫るためには、解決すべき課題がある。①その大刀は誰がどこで作り（中国・朝鮮半島か、倭の工房か、渡来工人か、倭人か）、②誰の意図でその形式の大刀が作られたのか（工人の自由意思か、その工人・工房を管理する豪族または倭王権の意思か）、③その工人・工房は誰が管理・運営していたのか＝「工房の管理主体」、④誰の意図で配布され（特定の中央豪族か、倭王権の意図か＝「配布主体」、⑤誰が受け取ったのか（地方の大首長が一括して入手して、配下の中小首長に再配布したのか、それとも各地の中小首長が個別に入手したのか）、⑤すべての金銀装大刀が同じ意味をもつのか、大刀形式によって示したいことがらの種類が違うのか、である。

私は、これらの課題の解決のために、金銀装大刀の柄頭形式を横断して大刀の製作技術の共通性や意匠の理解度などから、工人系譜や工房の復元を試みている（大谷2012）。また、そこから導かれた内容が、古墳やその副葬品から復元される地域の政治集団の状況にどのように当てはまるかを検討してきた（大谷1999b・2019）。今回は、北部九州の金銀装大刀について、こうした問題を考えてみたい。

なお、本章では、古墳や大刀の名称の後に「TK43」「飛鳥I」などと記すが、これはその大刀とともに出土した須恵器の型式名（田辺1981・奈良文化財研究所2019）である。この型式名はその古墳に被葬者が埋葬された時期つまり、大刀が副葬された時期を示すものあり、大刀が作られた時期を示すものではないが、およその時期の目安とさせていただきたい。

1、金銀装大刀の工房を復元する視点

金銀装大刀について、舶載品か倭製品かを考える視点として次の点を重視する。①朝鮮半島と日本列島それぞれに特徴的な技法・手法、②倭独特の装具、③図像に対する工人の理解度・思想性の有無。

①については、中国・朝鮮半島の大刀に特徴的な手法として、柄頭の環頭と刀身茎を直接つなぐ手法（「茎直接ぎ法」）がある（図1-②）。

また、柄木と刀身茎の取り付け方では、刀身茎を表裏2枚の柄木で挟む朝鮮半島の「柄二枚合わせ技法」（菊池2010:p91）に対して、倭では、柄木の背側に溝を彫り、刀身茎をはめ込む、「茎落とし込み法」が一般的である（図1-①）。これに関連して、倭の大刀は「柄の刃側が大きく内湾する」特徴的な形状をもつに対し、朝鮮半島の大刀は刃と背側で対称形となる。

この「茎直接ぎ法」や「茎落とし込み法」は、大刀が完成すると柄間に糸巻きや銀線巻きが施されるため見えなくなる。また、必ずしもこの方法を用いなくても外見上同じものを作ることはできる。にもかかわらず、これらの手法を用いるのは、そうした手法で作ることを先輩工人から伝習されているからだと考えられる。本稿では、「茎直接ぎ法」は舶載品、または渡来工人かその後継者の作と考え、「茎落

とし込み法」の大刀は倭の工人の作と考える。ただし、7世紀後半の方頭大刀の「茎直接ぎ法」は、唐などの新たな大刀の伝来の影響を考え、倭製品が多いと考える。

②については、単脚足金具の佩用装置(図1-③f)がある。大刀には、1ヵ所で支えて大刀をさげる「縦佩き」(吊手佩用)と、鞘の2ヵ所に金具を設けて垂下する「横佩き」(二足佩用)がある。いずれも中国・朝鮮諸国から日本に伝わった佩用法であるが、その金具の形態として、単脚足金具は日本にしかない。6世紀後半に二足佩用の風が日本に伝わり、定着する過程で創出されたものであろう(瀧瀬1991:p758)。単脚足金具を備える大刀は、倭製品と考える。

また、透入大型板鐔と薄い小型板鐔も日本独特の鐔である(図1-④c d)。大刀の板鐔は高句麗の平壤旧兵器廠出土の三葉文環頭大刀(6世紀)(末永1941)のように小型で厚手の板鐔の片面を斜めに面取りした鐔鐔がある(大谷2018)。また、韓国伏岩里3号墳(全南大校博物館2001)の金銅装圭頭大刀は、貴金具のように小さな鐔(環状鐔)をもつ。倭のように薄い板状や大型の板状の鐔は中国・朝鮮半島にはみられず、こうした鐔の大刀は倭製と考える。

③については、単竜・単鳳環頭、双竜環頭大刀の図像の変化をどう評価するかの問題である。これまでは、整った図像が崩れていくと、これを「図像を理解しないまま工人が模倣を繰り返したため」と解釈して、倭の工人の作とする見方が一般的であった。しかし、図像の変化には、工人が図像をわかった上で手数を省略している簡略化と、意味を理解していないままに模倣した退化がある。前者は、図像の意味・思想性を先輩工人から受けついでいるのに対して、後者はこれがおこなわれていない。前者は舶載品または渡来工人とその子孫の作であり、後者は倭人が模倣した結果と解釈したい。単竜・単鳳環頭大刀は前者の例であり、双竜環頭大刀は後者の例である(大谷2014)と考える。

この他にも、加工技術の精度の違いから、工人が直接技術を後継者に伝えて作ったのか(「直接継承型」の技術移転)、製品を見て模倣したものなのか(「形状模倣型」の技術移転)の違いも(勝部・鈴木1998:p239)、工人の問題を考える上で特に重要な視点である。

次節から金銀装大刀の工房の展開を説明する。以下では、工房と工人系譜を次のような意味で用いる。**工房**：工人たちの作業場所のこと。工人たちが技術や意匠の思想を共有・伝授・直接模倣する場とその組織。**工人系譜**：先輩(師)工人から後輩(弟子)工人へと直接的に技術やその文様の意味が伝習される工人のつながり。

## 2 金銀装大刀生産の工房の試案

6・7世紀の倭の金銀装大刀の展開をおおまかに5つの段階に整理し、大刀の意匠(デザイン)に製作技法や手法を加味して工房を想定し、大刀の変化を示したものが図1である。私は、倭の工房としてA~Dを想定し、大刀の形式と工房の変化を次のように理解する(大谷2012)。(以下大刀の後の( )数字は図2の番号に同じ)。

### (1) I段階(TK47~TK10)

倭では5世紀から続く伝統的な意匠をもつ木装大刀を金や銀の薄板を張った金銀楔形柄頭大刀、金銀楕円形柄頭大刀(9)(白石1993)、これらに捩じり環を取り付けた金銀装捩じり環頭大刀が5世紀後葉から作られる。これらをまとめて金銀倭装大刀と呼ぶことにする<sup>1)</sup>この大刀には、銅や銀の鑢付けの技術は用いられていない。一方で、馬具・甲冑・帯金具の金銅製品を装飾した蹴り彫りの装飾技法が用いられており、倭にいたこうした工人が参加したことが考えられる。この【工房A】で製作された倭装大刀は、金銀装>鉄地銀象嵌装>木装大刀のように、装具の素材などにより「仕様による階層性」が存在する(橋本2013)。この段階には、朝鮮半島の百濟・伽耶では伽耶式竜鳳文環頭大刀(3)が、新羅では三累環頭大刀(1)などが作られ、倭へも少数がもたらされている。



図1 金銀装大刀製作の技法

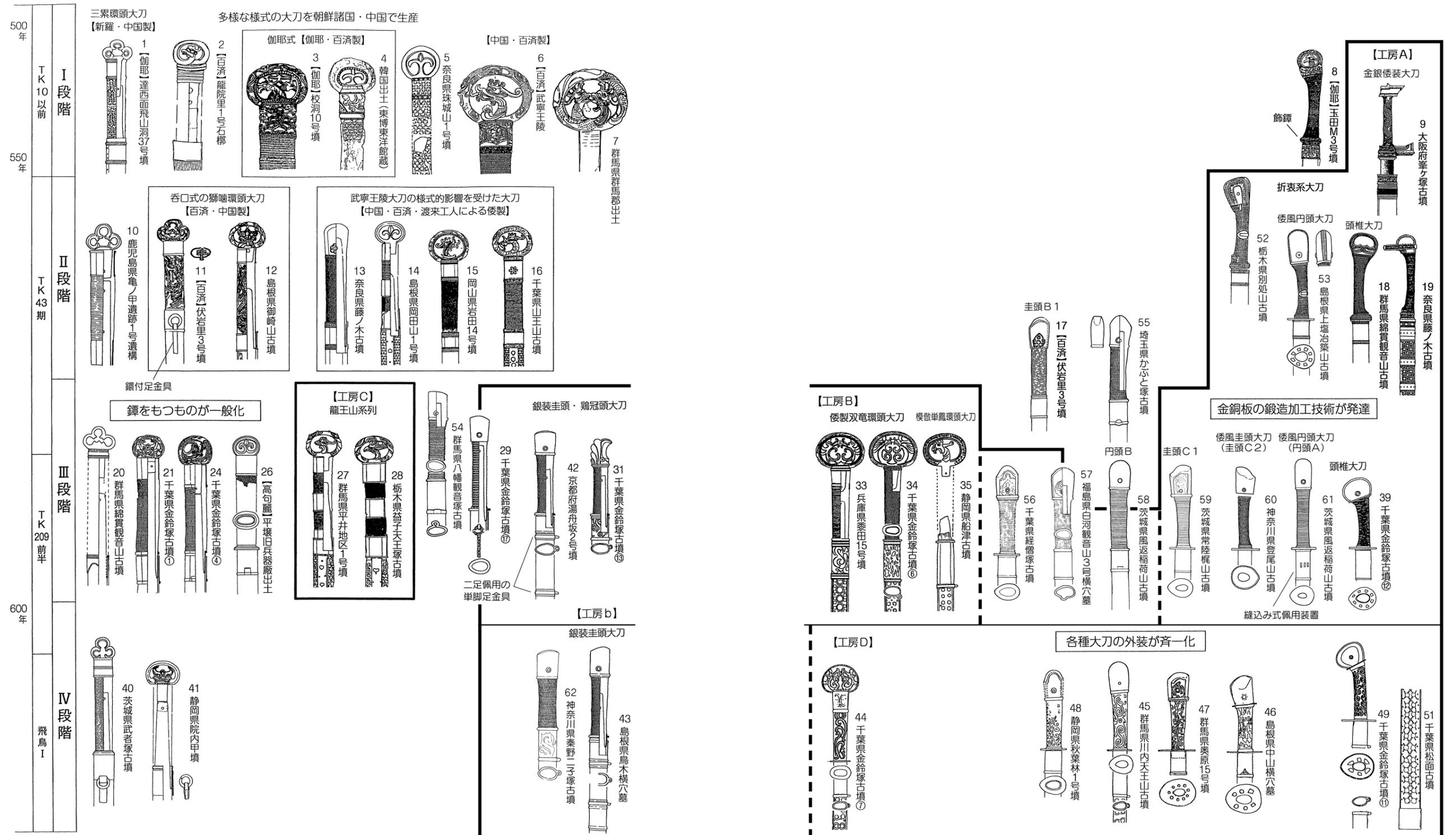


図2 古墳時代後・終末期の金銀装大刀の展開と倭と工房試案（大谷2012を改訂）

工房区分の線上にある大刀は、舶載品か倭製品か判断に迷うもの。56～58は【工房A】か【工房B】かの判断を保留する。

(2) II段階 (TK43)

【工房A】では、金銀倭装大刀に加えて、意匠やサイズは倭装大刀の流れを引き継ぎながら、新たに鑢付けや鍍金などの技術を導入して頭椎大刀(18)や倭風円頭大刀(53)(大谷2018)が製作され始める。特徴は、全長が大きく、柄頭が肥大化し、断面かまぼこ形の大型の鐔や大型の板鐔を採用することである。これらは「折衷系」大刀とも呼ばれ(橋本2006)、倭の工人の模倣による部分と、柄の銀線巻や貴金具の製作など、渡来工人の参加が考えられる部分がある(勝部・鈴木1998)。

この段階以降、朝鮮半島での金銀装大刀の出土例が少なくなり、その実態が不明確になる。一方、倭の竜鳳文環頭大刀は、それまでの加耶で出土する竜鳳文と異なり、百済武寧王陵の単竜環頭大刀(6)の意匠・様式を引き継ぐ単竜・単鳳環頭大刀(15・16)の出土例が増加する。これらの単竜・単鳳環頭大刀には、百済からの舶載品説(穴沢・馬目1986、町田1987)、伽耶滅亡に伴う渡来工人による倭製品説(持田2005・金2017)がある。また、これと同じ装具をもつ円頭・三葉環頭大刀(13・14)もある。後者の説をとる場合は、倭にもうひとつの金銀装大刀工房があることになる。

(3) III段階 (TK209前半)

朝鮮半島で環状鐔や環付足金具を伴う新しい様式の大刀(17・26)が作られており、これらが倭に舶載され始める。その例には、圭頭大刀B1類(菊池2004)(57)、円頭(55)、単竜環頭・単鳳環頭・獅噛環頭・三累環頭大刀(20・21・24)などがある。この影響で、倭でも小型板鐔の大刀が作られ始める。

この段階に倭で多く出土する単鳳環頭大刀には、同型または同範品がみられ(図3)(大谷2006)、簡略化・量産化された単鳳環頭大刀(龍王山系列)(27・28)が倭で製作される(穴沢・馬目1986)。これを【工房C】とする。これらは中心飾の鳳凰像や環部走竜文は簡略化されながらも、基本の構図が崩れることはない(図4)。この工房の工人は、その基本図形を正しく教えられた工人であり、渡来工人またはその子孫であると考える。これらの単竜・単鳳環頭大刀には、先に述べた環状鐔や環付足金具など中国・朝鮮半島での新しい大刀様式が採用されていない。一方、環状鐔を採用する千葉県金鈴塚古墳の単竜・単鳳環頭大刀(24)は、この点からも倭の工房の作ではなく、舶載品であると考えられる(大谷2015)。

【工房A】の「折衷系」大刀には、銅板の鍛造成形と鑢付け技術を用いて、定型化した頭椎大刀(39)、倭風円頭大刀、倭風圭頭大刀(圭頭C2類)(60)<sup>2)</sup>が作られる。

竜鳳文環頭大刀の中から、双竜文が選択されて倭製化し、倭製双竜環頭大刀(33・34)が製作される。その外装の違いから頭椎大刀とは異なる工房の作と考えられ、これを【工房B】とする。この工房の技術や意匠の特徴は、①柄間の銀線巻に「2列刻み三角形銀線」(図5-①~③)を用いること、②仏教美術に用いられるデザインを取り入れること、③木彫銀張り技法により文様を表現するものがあること(図5-⑦~⑨)、④「鐔・鋸一体銀張り」の手法(図1-④b)、⑤環頭柄頭はその当初から鑄造ではなく、鍛造で作ること<sup>3)</sup>これらの共通点が見られる大刀の存在から、この工房で作った大刀には、倭製双竜環頭大刀(33・34)、銀装圭頭大刀(42)、銀装鶏冠頭大刀(31)がある。また、圭頭大刀B1類(56)も上記の③の特徴があり、【工房B】の作である可能性があるが、現状では判断は保留したい。

【工房B】の大刀は、唐草文・雲気文・火炎文など仏教美術に見られるデザインが当初は比較的きれいに描かれるが、次のIV段階になると本来の図形は完全に崩れてしまう。また、双竜環頭大刀では、環部の竜文のくずれから、III段階の頃から工人が竜に対する知識を欠いていることもわかる(図4)。この点は、【工房C】の龍王山系列とは大きな違いである。こうした図像の知識がないことから、【工房B】の工人は倭人であると考えられる。

なお、双竜環頭大刀と外装が同じ単鳳環頭大刀(35)が存在する。これらは後述するように【工房B】で単鳳環頭を模倣して作った「模倣単鳳環頭大刀」である(図7-⑩)。それらは、本来の単鳳環頭大刀の柄頭に【工房B】の双竜環頭大刀の装具を取り付けもの(群馬県安坪3号墳単鳳環頭大刀)や、模倣

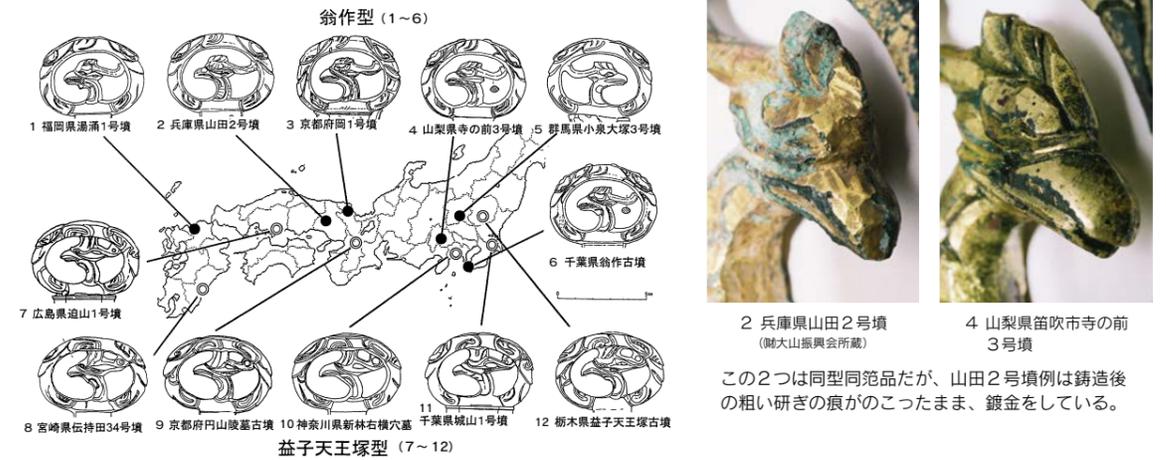


図3 単鳳環頭の同型・同範品(【工房C】)



図4 環部走竜文から見た各種環頭大刀の違い

単鳳環頭に本来の単竜・単鳳環頭大刀の装具を付けたもの（福岡県高崎2号墳・図7）がある。これらは【工房B】で拵え直したものであると考えられる。

**工房の管理主体** 倭製双竜環頭大刀を作った【工房B】の工人は倭人であり、【工房C】の工人は渡来人またはその子孫と考えた。両工房は、同じ竜鳳文の大刀を作りながら、【工房B】は鍛造技術を用い、【工房C】は鑄造技術を用いる。【工房B】の柄間の銀線巻は「二列刻み三角形銀線」であるが、【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀にはこれがない。こうした点からも両工房の工人は、直接的な交流がなかったと考えられる。こうした両工房の没交渉的なあり方から、私は【工房B】と【工房C】は特定の有力豪族がそれぞれに管理・運営していたと考える。

**大刀の意味するもの** 【工房A】【工房B】で作られた大刀の長さを比較すると、金銀倭装大刀>金銅装頭椎大刀・双竜環頭大刀>金銅装圭頭・円頭・単竜・単鳳環頭大刀>銀装圭頭・鶏冠頭大刀と4つのグループに分けることができる（図6）。古墳時代の倭製の器物は、銅鏡のように大きさで格差を表現する傾向があり（上野2020）、大刀も同様である。つまり、伝統的な倭の大刀を金銀で飾った金銀倭装大刀が別格の位置にあり、その次に金銅装頭椎大刀と双竜環頭大刀が並ぶ。舶載品を模倣して作り始めた圭頭大刀B1・C1類も長大化するものが現れ、倭の大刀が大きさを目指していることがわかる。これに対して、【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀は、長大化への指向性がまったく見られない。

また、外来の大刀を模倣して倭製化した【工房B】の大刀は柄頭の肥大化、板鐔の採用など倭風化を強めるのに対し、【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀はまったく倭風化しない。この【工房A】【工房B】の大刀と【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀の違いは、その大刀が何を表徴するのか、誰に何を見せたいのかという目的が違っていたのではないと思われる。なお、千葉県金鈴塚古墳の単竜・単鳳環頭大刀は、【工房C】の大刀よりも格段に長大であるが（図6-17）、これは舶載品であり、中国・朝鮮半島ではこうした大刀が作られていたと考えられる。

さらに、倭製の銀装圭頭・鶏冠頭大刀は短刀であり（図6-24~29）、その用途も含めて他の大刀とは別の意味があったのかもしれない。金鈴塚古墳では、他の大刀が遺体の両脇にまとめられていたのに対して、銀装鶏冠頭大刀2振は石棺の中央（遺体の上に置かれていたのであろう）から出土している（滝口編1952）。

以上をまとめると、【工房A】【工房B】の多くの大刀は、大刀の大きさで格差を表現するが、【工房C】の単竜単鳳環頭大刀は、そうした意図が見られない。また、【工房B】の銀装圭頭大刀は、短刀であり、他の大刀と異なる用途の大刀の可能性が考えられる。

**大刀の配布主体** このように【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀と【工房A】【工房B】の大刀の性格には著しい違いがある。また、【工房C】の単竜環頭と倭製双竜環頭大刀が同じ古墳から出土した事例は、現在まで確認されていない<sup>4)</sup>。これらに先の工房の管理・運営する豪族が違うことも含めて考えると、配布主体も異なり、工房を管理・運営する豪族の意図によって配布された可能性も考えられる。

#### （4）IV段階（TK209後半・飛鳥I）

龍王山系列の単鳳環頭大刀の生産が終わり（【工房C】の閉鎖）、【工房A】と【工房B】が統合される段階。この統合された工房を【工房D】と呼ぶ。

倭製双竜環頭（44）・頭椎・圭頭・円頭大刀（45~49）など、多様な形式の倭製金銅装大刀が作られるが、それらは、柄頭・鐔・鞘尻の形状を除けば、柄間・鞘の筒金具・貴金具・佩用装置の形や構造、円形浮文とくずれた唐草文の文様や、それらを打ち込み列点文で装飾する施文の技法などが共通している（町田1976）。こうした外装や製作技術の齊一化から、【工房A】と【工房B】が統合されたと考える。

【工房D】の大刀は、同じ技術で作り、同じ文様、同じ佩用装置を備えながら、柄頭、鞘尻を作り分けている。さらに圭頭・円頭大刀などよく似た柄頭の大刀でも、倭風圭頭大刀（圭頭C2類）（46）・倭風円頭大刀（菊池の円頭A類）（45）（菊池2010：p89）など丸尻の倭風スタイルの大刀と、圭頭B1類・



図5 倭製双竜環頭、銀装圭頭、銀装鶏冠頭の共通性

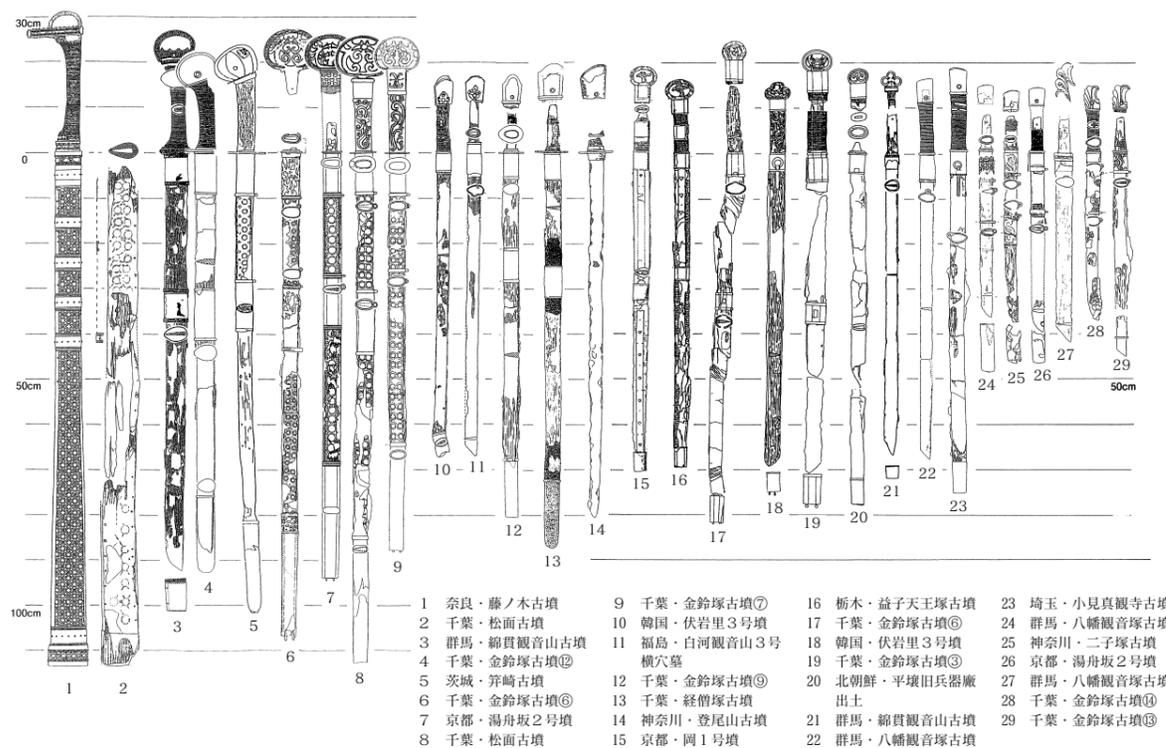


図6 金銀装大刀の長さの違い

C 1 類、外来系円頭大刀（菊池の円頭B類）のように柄間に湾曲がなく小型板鐔で平尻の外来風スタイルの大刀（圭頭B 1類・C 1類）が作り分けられている。ただし、この違いは次第にあいまいになる。（菊池2010：p 94）金銀倭装大刀も【工房D】で作り続けられ、松面古墳（51）のように、双竜環頭大刀に鞘金具に見られる円形浮文の金銅板で飾る金銀倭装大刀もある（齋藤2020：p 147）。

【工房B】の銀装圭頭大刀は、【工房D】の大刀と関連する要素があまりない。【工房D】との統合に残った工人グループが、銀を使った簡素な装具の大刀を作り続けたとみられる。これを【工房b】とするが、これは工房が分離したというよりは、この時期の銀装圭頭大刀が短刀であることから、【工房D】に統合された後も、特別な意味をもつ短刀を特定の様式で作り続けた可能性を考えたい。

なお、III・IV段階の獅嚙環頭大刀と三累環頭大刀は、鑄銅製の環頭に鉄製の茎を差し込む手法や「茎直繋ぎ法」など、この段階の倭の工房には見られない手法を用いており、私はその多くは舶載品であると考えている（穴沢・馬目1979）<sup>5)</sup>。

**大刀の意味するもの** 【工房D】という同じ工房で、あえて異なる形式の大刀が作り分けられている理由について、橋本英将の指摘は興味深い（橋本2013・2014）。橋本は、6世紀の前半から倭装大刀には、金銀装、鉄地銀象嵌装、木装の3つの「仕様による階層性」があり、6世紀末には、金銀装、銀装、象嵌装、木装と、前段階まで倭装大刀に付与されていた「仕様による階層性」が頭椎、円頭、圭頭大刀に転化されたという。さらに、「半島系」の環頭大刀や、6世紀末に同じ工房で製作している双竜環頭大刀には、「仕様による階層性」は現れないという。つまり、頭椎大刀の佩用者には、「外装の仕様と対応した縦方向の階層が存在」すると想定した（橋本2014：p 173）。そして、軍事面の編成においては、最上位から一般兵まで通底する、頭椎大刀の階層性による秩序が形成され、渡来系文物・技術の獲得・内製の活動においては、「高麗剣」すなわち環頭大刀が、関係する上位層の儀刀として配布されたと考え、この大刀形式の違いを「実態としては特定氏族とのつながりというよりも、実質的な職掌を強く反映したものと考える方が妥当であろう。」とした（橋本2014：p 174-175）。

**工房の管理主体・大刀の配布主体** 【工房D】では、同じ工房で柄頭と装具のデザインの異なる大刀をあえて作り分けている。その理由が、橋本の考えるように、列島各地の古墳被葬者たちを序列化する大刀と何らかの職掌を表示する大刀を作り分けているのであれば、その生産と配布を特定の豪族の意図のみで行っていたと考えるよりは、王権の意図のもとで行われていると考える方が合理的であろう。私は、【工房D】は官営工房的なものに近づきつつあったもの理解する。もちろん、直接的には特定の有力豪族が担当していてもかまわないし、実際にそうであったと考える。

これらと異なる性格を持つのが、IV段階に倭での出土例が増加する獅嚙環頭、三累環頭大刀である。私はこれらを舶載品と考えており、その入手は必ずしも倭王権を通じたものではないと考える。

### （5）V段階

各種金銀装大刀の生産が終了し、方頭大刀が生産される（新納1987）。方頭大刀は圭頭大刀に唐の大刀の要素を加えて作ったものと考えられ（津野2008）、【工房D】や【工房b】の系譜上に生産されたものであろう。

## 3、各地の事例から見た金銀装大刀の形式の意味

金銀装大刀の分布から、その意味を考える場合、私は次の三点に留意する。①石室や横穴墓の地域色や規模から、地域の政治集団の範囲と階層構造を復元し、それを踏まえて大刀形式の分布上の特色を抽出する。②柄頭の形状だけでなく、前節のような製作工房の違いや倭製品か舶載品かを考慮する。③金銀装大刀の生産のあり方がTK 209型式期（先のIV段階）で変化することを考慮する。

筑前北部と豊前北部の金銀装大刀の分布は、齋藤大輔により、糸島周辺に竜鳳文環頭大刀が集中する

こと、宗像沿岸部に頭椎・圭頭・円頭大刀が濃密に分布することが指摘されている（齋藤2014）。ここでは、これらの地域で出土した大刀のいくつかをとりあげ、前節のように工房を想定した場合、どのような理解ができるかを示し、あわせて上記の3点を考慮してこの地域の様相を考えてみよう。

### （1）京都平野の竜鳳文環頭大刀

この地域には、II段階・III段階を通じて竜鳳文環頭大刀が集中する。

**箕田丸山古墳（TK 10）の単鳳環頭大刀（IないしII段階前半）**（小田・下原・山口2004）墳長37mの前方後円墳で、京都平野北西部の首長墳である。この大刀は、環部が有稜素文の銀張りの珍しいもので、舶載品と考えられ、王権を介さずに朝鮮半島から直接に入手したとする説（齋藤2014：p 146）や新羅系技術者の影響のある大刀とみる説もある（持田2010）。また舶載品とする説に慎重な意見もある（金2017）。

実見したところ、特徴は次のとおりである。鐔のない呑口式の大刀である。柄頭の無文の環部は、磁石がくつつくので、おそらく鉄地銀張りで、中心飾の鳳凰は金銅製である。環部と中心飾の付け根には、ホゾを設けて取り付けているようである。中心飾の鳳凰像は、冠毛が板状であり、顔の表現も簡素である。その一方で頬毛（頸毛）は強く反って立ち上がる珍しいものである（図7-①）。

柄頭筒金具と鞘口の筒金具は銀製で、その両端に貴金具を取り付ける。ともに断面は八角形である。貴金具は金張りで円文と菱形文の連続文様である（図7-①）。その下地は通常銅板であるが、金板が剥離したところも鉄錆に覆われた状況のため、明らかに銅を思える部分が見えない。柄間には銀線を巻くが、それは千葉県金鈴塚古墳や岡山県岩田14号墳の単竜環頭大刀と同じで、断面カマボコ形の銀線に刻みをいれたものである（図7-①）。鞘口金具の下に柄縁金具がわずかに見える。堰板はなく、その素材は鉄地銀張りか、金銅製か判断がつかなかった。柄間の全体で磁石がくつつくので、環頭茎と刀身茎がつながっている「茎直接ぎ法」の可能性が高い。

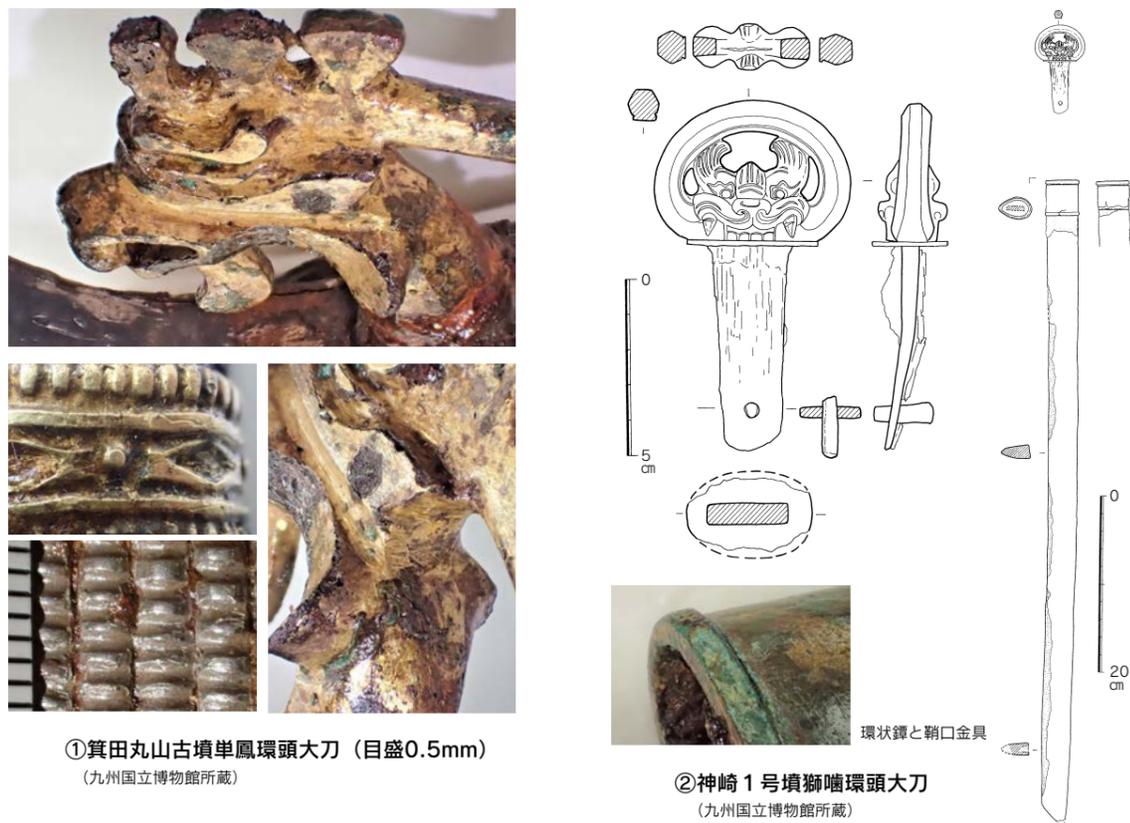
「茎直接ぎ法」や中心飾の簡素な鳳凰像が後の日本出土の単鳳環頭大刀に引き継がれないことから、私は舶載品でよいと考える。

**伝彦徳横穴墓の単獸環頭（II段階後半）**（図8-18）金銅装の柄頭の中心飾は竜や鳳凰ではなく特異な獣の像で、中国南朝の皇帝陵に建てられた石獸の頭部に似ている。こうした図像を知っている工人の作と考えられる。伝彦徳例は、中心飾の口と舌の作りから鑑型鑄造によるもので、製作時期は古く考えられてきたが、環部の走竜文は日本出土の単鳳環頭によくみられ、特に広島県釜屋1号墳の単鳳環頭（II段階後半）と環部が同型品と考えられる（本書第5章参照）。伝彦徳例は、II段階後半になっても舶載品が存在する事例と考える。

**皆見大塚古墳（TK 43～飛鳥1）の単鳳環頭（III段階）**（坂本編2015）（図8-20）13mの円墳だが、京都平野南部の首長墳と考えられる。金銅装の単鳳環頭大刀で、【工房C】の龍王山系列の大刀である。鞘尻金具は失われているが、刀身から復元できる全長は64cm前後になり、龍王山系列の大刀のサイズとほぼ同じである。

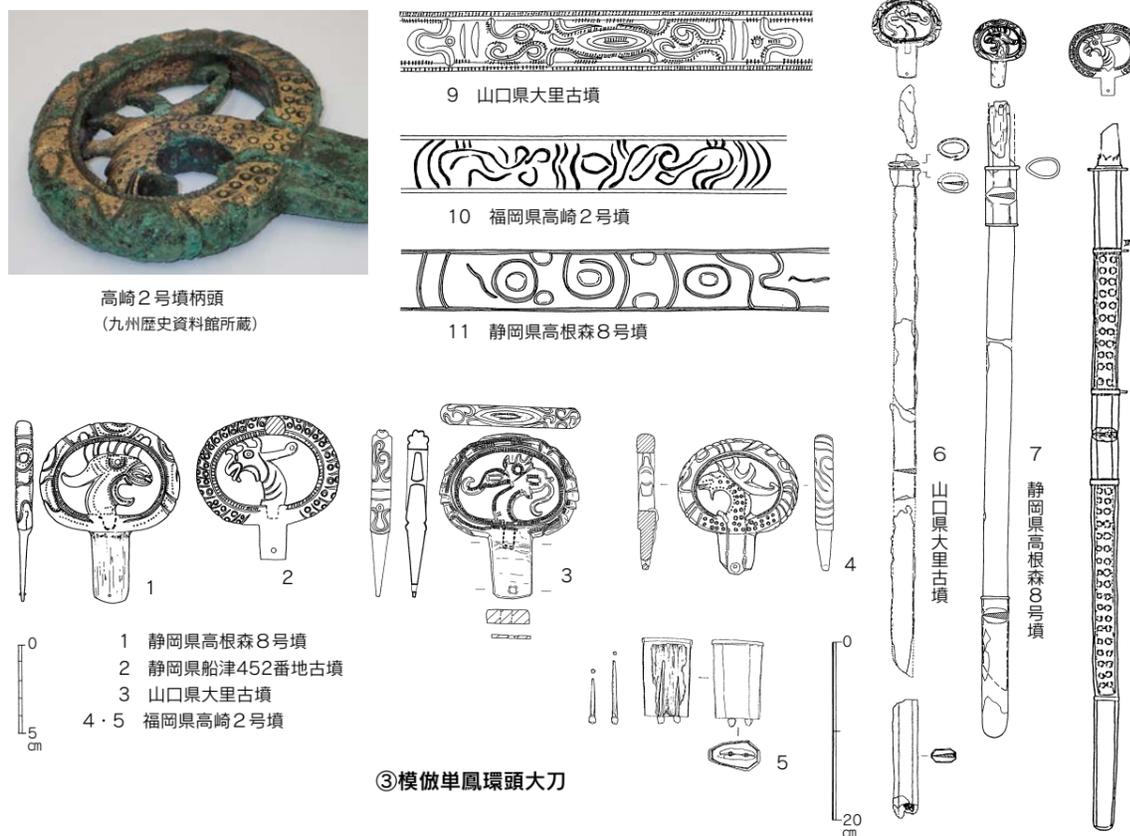
**伝甲塚方墳出土の単鳳環頭（III段階）**（図8-23）福岡県みやこ町（旧豊津町）の「みやこ甲塚方墳」から、単鳳環頭大刀の柄頭が出土したことが東洋文庫の「梅原考古資料 日本之部」に記録されている。「みやこ甲塚」は別名、「豊津甲塚」「千畳敷古墳」などといわれ、先の単獸環頭大刀を出土したと伝えられる彦徳横穴墓のちかくにある現在の甲塚方墳である（以上は穴沢味光氏のご教示による）。甲塚方墳は46×35mの方墳であり、京都平野の今川流域の首長墳である。資料には柄頭の拓本がのこされており、それを見ると【工房C】龍王山系列の福島県大志田天神塚古墳出土の単鳳環頭（菊池2009）に似ている。

**伝京都郡出土の単鳳環頭（III段階）**（図8-26）穴沢味光氏によると、上記の伝甲塚方墳とは別物の、伝京都郡出土という単鳳環柄頭の実測図が梅原考古資料にある。写真もなく、所蔵者も記されていないという。図をみると、【工房C】の龍王山系列の兵庫県山田2号墳の単鳳環頭に似ている。



①箕田丸山古墳単鳳環頭大刀（目盛0.5mm）  
（九州国立博物館所蔵）

②神崎1号墳獅嚙環頭大刀  
（九州国立博物館所蔵）



高崎2号墳柄頭  
（九州歴史資料館所蔵）

9 山口県大里古墳

10 福岡県高崎2号墳

11 静岡県高根森8号墳

③模倣単鳳環頭大刀

1 静岡県高根森8号墳  
2 静岡県船津452番地古墳  
3 山口県大里古墳  
4・5 福岡県高崎2号墳

図7 筑前北部・豊前北部の金銀装大刀（1）

まとめ 伝出土が多いのが気になるが、これらが本当であるならば、京都平野には、Ⅱ段階からⅢ段階にかけて、舶載品の単鳳・単獸環頭大刀2振、【工房C】の単鳳環頭大刀3振が出土していることになる。

同じⅢ段階には彦徳横穴墓群に隣接する竹並G-69号横穴墓から、【工房B】の倭製双竜環頭大刀（図8-17）が出土している。竹並横穴墓群（竹並遺跡調査会編1979）では、Ⅳ段階の【工房D】の金銅装圭頭大刀（C1類）（竹並G121-1号横穴墓）（図8-18）や柄頭は不明だが、環付足金具と単脚足金具を併用する大刀（竹並C4-4号横穴墓）がある。その一方で、柄頭不明だが、環付足金具をもち、小型で厚手の鎬鐔の大刀（竹並A68-2号横穴墓）、柄頭不明だが、透付帯状足金具をもつ大刀（竹並H55-6号横穴墓）（図8-24）の2振は【工房D】ではなく、舶載品の可能性が考えられる。

前節で、【工房C】の単鳳環頭大刀は、【工房A】【工房B】のように倭風化しないことに触れた。私は、【工房C】の大刀は舶載品の代用品として作られたとも思える。そう考えるなら、この京都平野では、単竜・単鳳環頭大刀への志向が一貫して強い地域であったと言える。

また、同じ地域の隣接する横穴墓や古墳において、単竜・単鳳環頭大刀と倭製双竜環頭大刀が出土する事例は、出雲東部の安来平野でも見られる。双竜環頭大刀を出土した島根県高広IV区1号横穴墓と単竜環頭大刀を出土した白コクリS-2号横穴墓は、丘陵を隔てて800mの距離にある。その佩用者はともに地域の首長墳である石棺式石室を模倣した形態の横穴墓に埋葬され、同じ安来平野北東部の工人が作った家形石棺に埋葬されている（大谷2010）。日常的には同じ集団に属しながらも異なる豪族から異なる形式の大刀を入手している。

## （2）糸島平野の竜鳳文環頭大刀

日拝塚古墳（TK43）の単鳳環頭大刀（Ⅱ段階前半）（中山・玉泉・島田1930）と西堂古賀崎古墳（TK10）の単竜環頭大刀（Ⅱ段階）（岡部・大谷2015）（図8-5・1）日拝塚古墳は47mの前方後円墳で大型の横穴式石室をもつ首長墳である。西堂古賀崎古墳は、径20mの円墳だが、金銅装馬具など豊富な副葬品をもつ首長墳である。

両資料とも柄頭は環部と中心飾を一体で鋳銅し、中心飾は鍍金、環部は金張りで仕上げる。西堂古賀崎例は、私が一須賀様式と呼ぶものである（大谷2006）。この2例は、環部に型割り線の痕跡が見えるもので、金字大はこれらを加耶からの亡命渡来工人（またはその2世代目）の作と考える（金2017）。この説に立つならば、畿内にある工房で製作、配布されたものとなる。

湯湧1号墳（TK209）の単鳳環頭大刀（Ⅲ段階）（平ノ内1984）と石ヶ元8号墳の単鳳環頭大刀（Ⅲ段階）（松浦編2003）（図8-6・3）湯湧1号墳は径16mの円墳で、石ヶ元8号墳は墳丘規模形態は不明である。ともに群集墳中の一基である。湯湧1号墳の単鳳環頭は、同型同範品が複数ある翁作型で、【工房C】の作であり、石ヶ元8号墳も同様に【工房C】の龍王山系列のものである。倭の【工房C】を管理した中央豪族との結びつきを示す大刀である。これらの近くには、大門出土の倭製双竜環頭大刀（Ⅲ段階）（図8-2）がある（浜田・梅原1923）。【工房B】と【工房C】の製品が隣接して分布する。

高崎2号墳（TK209前半）の模倣単鳳環頭（Ⅲ段階）（図7）（浜田・栗原1970）15mの方墳で群集墳中の一基である。本来の図像をまったく理解していない工人が作ったものである。類例には山口県大里古墳、静岡県高根森2号墳、静岡県船津452番地古墳の単鳳環頭がある。大里刀は成分分析の結果、純銅製であり<sup>6)</sup>、鍛造製と解釈される。さらに大里刀、高根森2号墳刀、船津刀は、X線写真によって、別作りの環部と中心飾をホゾで接合しており、双竜環頭と同じ手法をとる。また、これら3例の鐔や鞘の装具は双竜環頭大刀と同じものである。こうした点から、これらは【工房B】の双竜環頭を作る工人が、鍛造技術で単鳳環頭を模倣して作ったものとする。大里刀の環部文様は、かろうじて単鳳環頭の環部走竜文を模倣したことがわかる（図4）。高崎2号墳例の鞘尻金具は、【工房C】の単鳳環頭大刀に一般的なものであり、【工房C】の大刀に、【工房B】の柄頭が取り付けられている。

この模倣単鳳環頭大刀の存在は、金銀装大刀についてさまざまなことを考えさせる。例えば、双竜環

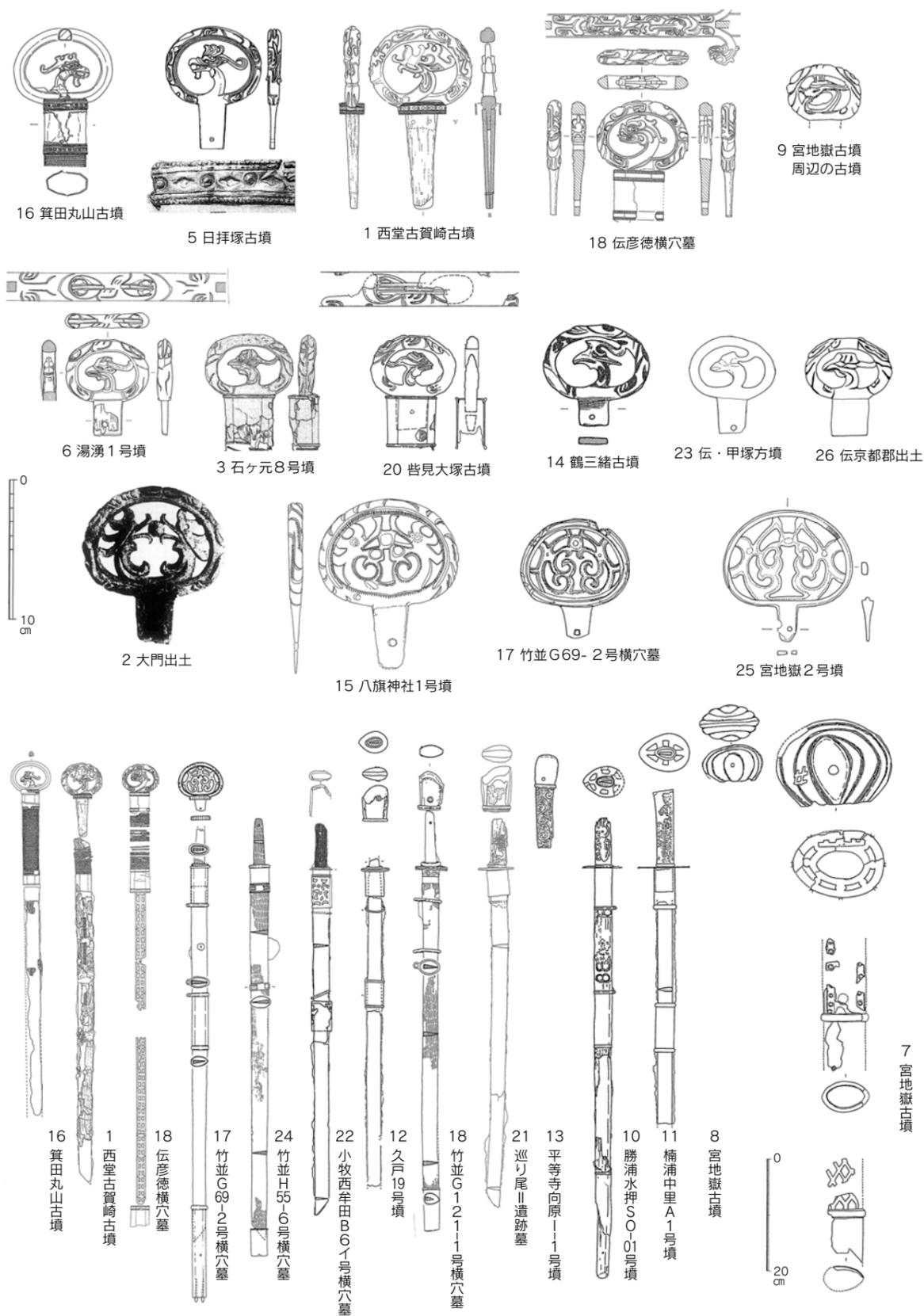


図8 筑前北部・豊前北部の金銀装大刀(2) (番号は、図9の番号と同じ)

頭大刀工人が、単鳳環頭を作るというとは、これだけ稚拙な模倣であっても単鳳環頭を必要とする人たちがいたということであろうか。また、高崎2号墳例のように、本来の単鳳環頭大刀の装具を利用して、柄頭が失われたか破損した単鳳環頭のかわりを双竜環頭大刀工人に依頼して修理したのであるか。その場合はやはりそこまでして単鳳の柄頭を必要としていたのでしょうか。そもそも、こうした修復を依頼できるような工房の在り方だったということだろうか。

大刀形式の分布から何かを考察する場合、模倣単鳳環頭大刀は、これまで無批判に単鳳環頭大刀としてあつかわれてきた。「単鳳」という意匠が何を示すのかを調べる場合には、それでもよいが、金銀装大刀を作った【工房】を管理する豪族との結びつきを検討するのであれば、双竜環頭大刀の分布として考察する必要がある。

まとめ この地域でも工房の違う大刀、つまり異なる中央豪族から入手した大刀が隣接して分布する。糸島では【工房C】の石ヶ元8号墳刀と【工房B】の高崎2号墳刀、大門古墳刀である。糸島と京都平野は、狭い範囲の中に、さまざまな方面につながりを持つ小集団が混在しており、彼らが結びついている中央豪族も、時期によって変化している可能性もある。

### (3) 宗像・遠賀川流域の頭椎・圭頭大刀

この地域では、Ⅲ・Ⅳ段階に【工房A】【工房D】で製作された頭椎・圭頭大刀が集中的に分布する。その分布は、小嶋篤による宗像型石室と宗像型土師器高坏の分布範囲に合致する(図9・10)。小嶋は宗像型石室という古墳築造技術、宗像型土師器高坏を用いた葬送儀礼から、胸肩君の支配領域(胸肩君の服属集団「胸肩部」の主要な居住範囲)が復元できるという(小嶋2018)。つまり、この地域の政治集団(胸肩君の支配領域の人々)には、【工房A】【工房D】の袋頭大刀が配布されており、Ⅳ段階の地域最高首長墳の宮地嶽古墳には頭椎大刀(図8-7・8)があり、周辺の石室群集墳や横穴墓には金銅装圭頭大刀が副葬されるという階層差が見られる(齋藤大輔氏のご教示による)。

また、宮地嶽2号墳から【工房D】の双竜環頭大刀が出土する(図8-25)<sup>7)</sup>(花田2003)。これも前節で見たように、橋本英将の考え方を参照すれば、宮地嶽古墳被葬者の下に、外交などの職掌を担当する人物がいたと理解することができる(齋藤氏のご教示による)。

前節の糸島・京都平野の状況と異なり、宗像・遠賀川流域は、大刀の様相に斉一性があり、その中では頭椎>圭頭という階層差も表現されている。この違いは、この地域が宗像の大首長の下で、政治的な一体性が強かったためだと考えられる。

これに類似した状況は、山陰の伯耆西部、日野川下流域にも認められる。そこでは、鳥取県石州府1号墳(円墳、径32m、TK209)、同5号墳(円墳、径32m、TK209)、岸本7号墳(円墳、40m、飛鳥1か)を三代の最高首長墳として、同型式の石室が日野川下流域から島根半島の東端部まで広がる。その範囲では、【工房A】【工房D】の頭椎大刀や圭頭大刀などの袋頭大刀が副葬されている。特に、石州府1号墳は、2重列の透かしをあげた大型板鐔をもつ頭椎大刀を副葬しており、頭椎大刀が上位であったことをうかがわせる。この状況は、環頭大刀を中心に副葬する隣の出雲東部の安来平野(松尾2001)とは大きく様相が異なるものである。

これらの地域のように頭椎・圭頭大刀などの袋頭大刀が中心に分布する地域にも、三累環頭大刀や獅噛環頭大刀が少数分布する。遠賀川上流域では、神崎1号墳(福岡県田川郡福智町)(金田町史編纂委員会編1968)の獅噛環頭大刀がある(図7-②)<sup>8)</sup>。古墳の実態は不明であるが、金銅製の柄頭は、環部の横径5.5cm、茎を含めた長さは9.8cmである。環部は断面六角形で内縁に沈線をめぐらす。環部の厚さは頂部が8.04mm、中心飾の牙の横で12.3mmを下端へ行くほど厚くなるタイプである。柄頭下端には、厚さ1.2mmと厚手の環頭筒金具の蓋がのこる。筒金具自体は失われているが、断面倒卵形であることが、先の蓋からわかる。長さ約5.6cmの環頭茎は、磁石がつくために肉眼観察と合わせて鉄製であることは明らかである。環部の歯のあたりでも磁石がつくため、鉄製の茎が鋳銅製の環部に差し込まれていること

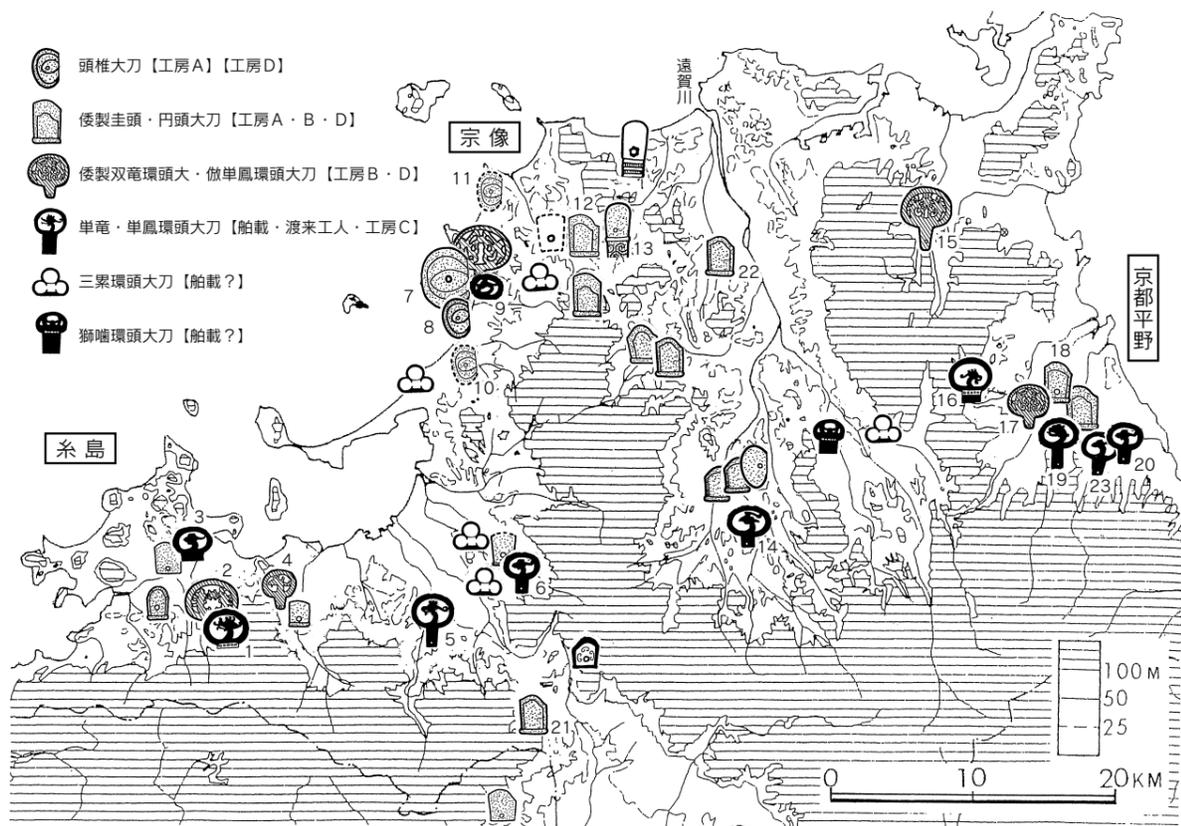


図9 筑前北部・豊前北部の金銀装大刀の分布 (数字は図8に同じ)

がわかる。鐔は金銅製の小さな環状鐔であり、鞘口からほとんどはみ出さない。鞘口金具の欠損部から金銅製の鉋が見える。金銅製の鞘口筒金具は、切先側にのみ玉縁をつくる。刀身はカマス切先である。刀身の長さは復元で69.4cm、元幅3.3cmである。

獅噛環頭大刀には、このように鉄製の茎を鋳銅製の環部に差し込むものがよくみられ、同様のものは三累環頭大刀にもある。これらは小型の環状鐔のままで板状に発達しないことから、【工房D】の作ではなく、舶載品であると考えた。また、獅噛環頭と三累環頭大刀は、大刀の大型化や全面を金銅装具で覆うなど、倭の大刀の志向性と異なっていることから、その大刀が表徴するものは、倭の工房の大刀と異なるものと考えられる。

獅噛環頭大刀や三累環頭大刀は、宗像・遠賀川流域、伯耆西部の日野川下流域のように地域の大大首長による一体性のある地域で、小首長墳や群集墳から出土する事例がある。まったくの想像でしかないが、それらは渡来人が自ら携えてきたものか、または大首長または倭王権の意をうけて、朝鮮半島諸国と通交した際に入手したというイメージをもっている。

### おわりに

金銀装大刀は長い研究史をもち、大刀形式が何を反映するのかについても、多くの説が提示されてきた。しかし、それらについては、「考古学的に認知しうる、具体事象に立脚した実証的論法は少ない(中略-大谷)。分布論による現象面の把握から、一足飛びに歴史叙述や一般理論に飛躍している。その過程は多分に直感的で、第三者による再検証や反証を許さない。」(松尾2005: p1)と厳しい指摘もある。

私も、かつて出雲地方を事例にして、私案を示したが(大谷1999a・b)、その時に製作技術から考えた大刀の分類や系譜は、その後の大刀の観察・調査を進める中で、新たな知見によって変更した点も多い。現在は、大刀そのものの観察から、製作の状況を追求し、そこからより意味のある大刀形式の違いを見出すことに取り組んでいる。今回の模倣単鳳環頭大刀の存在や、【工房C】の単竜・単鳳環頭大刀が、他の倭の工房の大刀と著しい違いをもつことはその例である。その上で、具体的な地域の状況の中で大刀形式の評価を試みる。そしてさらに大刀そのものの観察を行い、これを修正していくつもりである。今回の報告が現状における私の見解ではあるが、今後さらに修正を加えることになるであろう。第2節のタイトルを「試案」とした理由である。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々や機関に資料調査でお世話になり、情報提供や助言をいただきました。記して感謝します。穴沢味光、今井涼子、内山敏行、岡田 諭、加藤和歳、金宇大、小嶋篤、齋藤大輔、瀧瀬芳之、中山清隆、宮代栄一、九州国立博物館、九州歴史資料館、伊都国歴史博物館、木更津市郷土博物館金のすず。

### 註

- 1) この種の大刀の名称は、金銀装楔形柄頭大刀(大谷1999a)、倭風裝飾付大刀(菊池2003)、伝統系裝飾大刀(橋本2004)、金銀装倭系大刀(深谷2008)、金属装倭装大刀(齋藤2020: p148の図)などと呼ばれている。私は、倭の伝統的な装具デザインを金や銀で飾ったものであることから、「金銀倭装大刀」と呼ぶことにする。
- 2) 菊池の圭頭C2類は、柄頭が肥大化し、柄間の刃側が大きく内湾し、透入の大型の板鐔をもつなど頭椎大刀のように著しく倭風化していくので、「倭風円頭大刀」と同様に、「倭風圭頭大刀」と呼ぶことにする。
- 3) 千葉県金鈴塚古墳大刀6や兵庫県黍田15号墳の厚手の双竜環頭(豊島Ⅲ式・豊島2017)は、ともに純銅製であり、鍛造品と考えられる。(木更津市教育委員会編2020、澤田秀美氏のご教示による)。
- 4) 金鈴塚古墳では、単竜環頭大刀と双竜環頭大刀が同じ石室から出土するが、単竜環頭大刀は舶載品であり、【工房C】のものではない。
- 5) 野垣好史は、小稿のⅢ段階以降の三累環頭大刀を日本製とする(野垣2002)。また、齋藤大輔は、6世紀後半以降の三累環頭大刀が北部九州に集中することから、一部の三累環頭大刀は、西北九州で作られたと考える(齋藤2017)。これらの意見を認

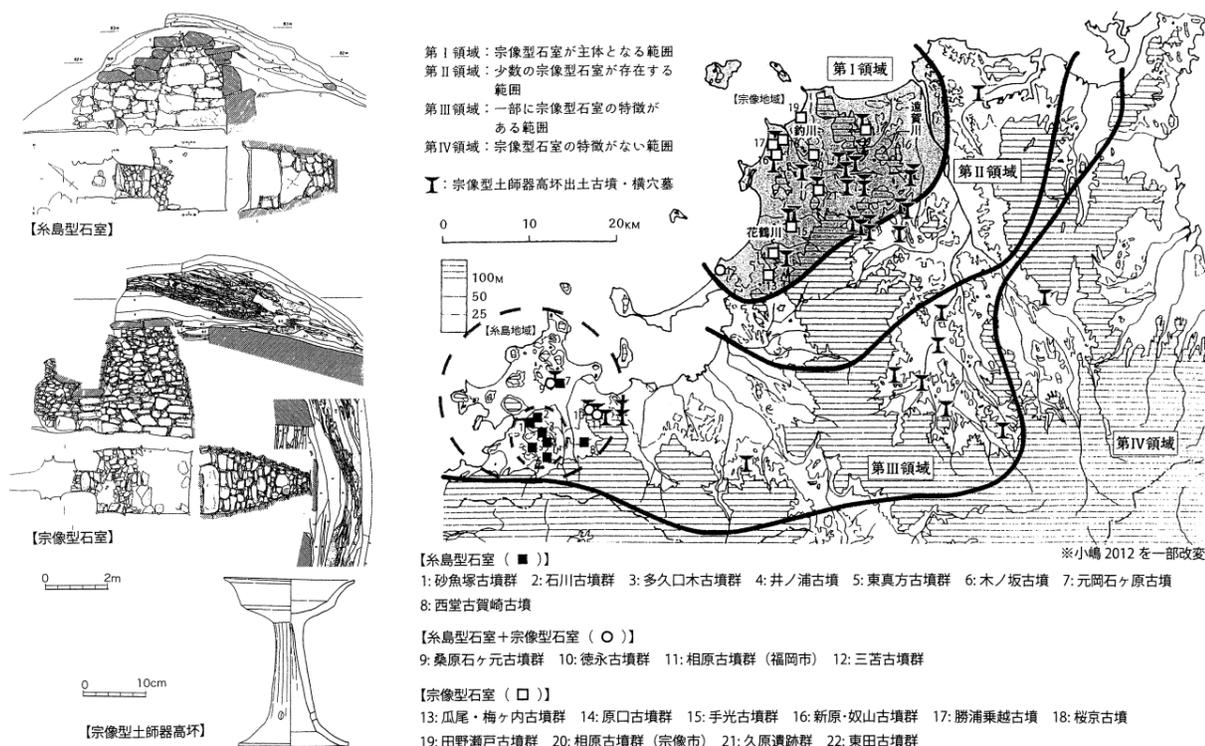


図10 古墳時代後期の糸島型石室と宗像型石室の分布 (小嶋2018を一部改変)

める場合、【工房C】のような、他の工房とは技術やデザインの交流をほとんど持たない排他的な工房の存在を認めることになる。こうした工房を認めるか否かも今後の検討課題であるが、ここでは認めない立場から、三累環頭大刀は舶載品と評価する。

6) 澤田秀美氏のご教示による。

7) 中山清隆氏が実測されたものをトレースした。

8) 柄頭の実測図を瀧瀬芳之氏から提供をうけ、これに補測した。

#### 挿図の出典

図1 図中に表記

図2 大谷2012を改変。追加した大刀の図は、報告書などからトレースした。

図3 1、2、4、6は大谷実測。11は瀧瀬芳之2016。他は報告書より。

図4 柄頭は1は新納1982、2は古谷2004に加筆、3は持田・中條2009、6は町田1986、7は新納1983、8は山内1993、9は白井・山口2002、10は金2017。環部走竜文の模式図は、1は李2012、2は古谷2004、6は町田1986より。その他は大谷作成。

図5 すべて大谷が撮影。

図6 1 檀原考古学研究所編1995、2・8 白井・山口編2009、3・21 徳江編1999、4・6・9・12 酒巻2007、5 末永1941、7・26 奥村編1983、10・18 全南大学校2001、11 菊池1996、13 田中編2010、14 田尾2007、15 樋口1961、16 持田2005、17・19・28・29 木更津市教育委員会2020、20 町田1987、22・24・27 高崎市教育委員会1992、23 瀧瀬1984、25 霜出編2013

図7 ② 柄頭は瀧瀬芳之氏実測図に大谷が補足をしてトレースした。刀身は大谷実測。 ③1・2・7・11 川江1992、3 金2017と穴沢・新谷1988から作図。4・5 浜田・栗原1970、側面図は大谷実測。6 吉松2016

8 柄頭は川江1992、外装は後藤1958。9・10 大谷作成。

図8 1 岡部・大谷2015、2 浜田・梅原1923 3 松浦編2003、5 柄頭は新納1982、責金具は中山・玉泉・島田1930、6・18 大谷実測、7・8・9 池ノ上・花田1999、10 津屋崎町教育委員会1998、11 井編2005、12 宗像市教育委員会1980、13 安部1992、14 児島・藤田偏1973、15 関川2014、16 柄頭は金2017、全体図は小田・下原・山口2004。17・18・24 竹並遺跡調査会編1979、20 坂本編2015、21 瓜生2001、22 酒井1981、23 東洋文庫梅原考古資料の拓本をトレースした。穴沢和光氏の資料提供による。25 中山清隆氏の実測図をトレースした。26 東洋文庫梅原考古資料の実測図をトレースした。穴沢和光氏の資料提供による。

図9 小嶋2018の地形図を利用して大谷が作成。

図10 小嶋2018より作成。

#### 引用文献

穴沢咏光・新谷武夫1988「山口県秋芳町大里古墳出土の単鳳環頭大刀」『古文化談叢』20(上)九州古文化研究会

穴沢咏光・馬目順一1975「昌寧校洞古墳群」『考古学雑誌』第60巻第7号

穴沢咏光・馬目順一1979「獅嘯環刀試考」『信濃』31-4 (№352)

穴沢咏光・馬目順一1983「三累環刀試論-伝・下総岩井出土の竜紋三累環把頭を中心にして-」『古文化論叢 藤澤一夫先生古稀記念論集』

穴沢咏光・馬目順一1986「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列」『福島考古』第27号

穴沢咏光・馬目順一1989「副葬品は語る(二) 武器・武具と馬具」『古代を考える 古墳』吉川弘文館

安部裕久1992『平等寺向日原Ⅰ』宗像市教育委員会

井 英明編2005『楠浦・中里遺跡』古賀市教育委員会

李漢祥2012「百濟達の環頭龍紋検討」『考古学探求』12號 考古学探求會(ハングル)

池ノ上宏・花田勝弘1999「筑紫・宮地嶽古墳群の再検討」『考古学雑誌』85-1 日本考古学協会

上野祥史2020「金鈴塚古墳出土鏡と古墳時代後期の鏡」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第2分冊考察編 木更津市教育委員会

瓜生秀文2001「古代」『筑紫野市史 資料編(上)』考古資料 筑紫野市

大谷晃二1999 a 「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究-島根県古代文化センター調査研究報告書4-』島根県古代文化センター

1999 b 「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

大谷晃二2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』

大谷晃二2010「家形石棺集成 地域概要 山陰-出雲・因幡を中心に-」『日本考古学協会2010年兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会

大谷晃二2012「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか?」『木更津市郷土博物館金のすず特別企画展 金鈴塚古墳展-甦る東国古墳文化の至宝-』木更津市郷土博物館金のすず

大谷晃二2014「双竜環頭大刀の環部文様についての予察」『北九州市文化財調査報告書第137集 八旗神社古墳群』北九州市教育委員会

大谷晃二2015「金鈴塚古墳出土大刀の研究(1) 単竜環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』第3号 木更津市郷土博物館金のすず

大谷晃二2016「御崎山古墳の獅嘯環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』№219 島根県立八雲立つ風土記の丘

大谷晃二2018「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究 島根大学考古学研究室調査報告第17冊』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会

大谷晃二2019「石州府1号墳の金銅装頭椎大刀」『国家形成期の諸問題 白石太一郎先生傘寿記念論文集』山川出版社

岡部裕俊・大谷晃二2015「西堂古賀崎古墳に関する新知見-墳丘・石室測量図の発見と単竜環頭大刀の詳細観察の成果-」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』第10号 糸島市立歴史博物館

奥村清一編1983『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会

小田富士雄・下原幸裕・山口裕平2004「福岡県京都郡における二古墳の調査」『長崎県景華園遺跡の研究・福岡県京都郡における二古墳の調査・佐賀県東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室調査報告第3冊 福岡大学人文学部考古学研究室

檀原考古学研究所編1995『斑鳩藤ノ木古墳第2・3次調査報告書』斑鳩町教育委員会

勝部明生・鈴木 勉1998『古代の技-藤ノ木古墳の馬具は語る-』吉川弘文館

金田町史編纂委員会1968『金田町史』全 金田町

川江秀孝1992「飾大刀」『静岡県史』資料編3考古3 静岡県

菊地芳朗1996「副葬品からみた福島県の後・終末期古墳」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会

菊地芳朗2003「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階 発表要旨資料集』第8回東北・関東前方後円墳研究会大会 東北・関東前方後円墳研究会

菊地芳朗2004「古墳時代刀剣類研究の諸問題-後期を中心に-」『鉄器文化の多角的研究』鉄器文化研究会第10回記念大会資料集

菊池芳朗2009「福島県後~終末期古墳出土重要遺物調査報告」『福島県における古墳時代から律令体制への転換過程の研究』福島大学行政政策学類

菊池芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会

木更津市教育委員会2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』

金宇大2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会

国立公州博物館2006『武寧王陵 出土遺物分析報告書(Ⅱ)』(韓国語)

小嶋 篤2018「『前方後円墳の終焉』から見た胸肩君」『沖ノ島研究』第4号 「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」世界遺産推進会議

児島隆人・藤田等編1973『嘉穂地方史』先史編 嘉穂地方史編纂委員会1973

後藤守一1936「頭椎大刀について(二)」『考古学雑誌』第26巻第12号

後藤守一編1958『吉原市の古墳』吉原市教育委員会

齋藤大輔2014「北部九州における装飾武器の特質とその背景」『第17回九州前方後円墳研究大会大分大会 古墳時代の地域間交流2』九州前方円墳研究会

齋藤大輔2017「武装からみた善一田古墳群と6世紀西北九州」『乙金地区遺跡群23(中巻) 善一田遺跡第4次調査 大野城市文化財調査報告第159集』大野城市教育委員会

齋藤大輔2020『古墳時代の武装と境界領域 福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修 令和元年(2019)度博士学位申請論文[文学]』

酒井仁夫1981『小牧西牟田横穴群』鞍手町文化財調査報告書第1集 鞍手町教育委員会

酒巻忠史2007『木更津市文化財調査集報12 金鈴塚古墳出土遺物の再整理2-大刀の実測-』木更津市教育委員会

坂本真一編2015『皆見大塚古墳・カワラケ田遺跡第2次調査IV区』九州歴史資料館

霜出俊浩編2013『秦野市文化財調査報告書13 秦野の遺跡5 神奈川県指定史跡二子塚古墳』秦野市教育委員会

白井久美子・山口典子編2009『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』千葉県

白石太一郎1993「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館

末永雅雄1941『日本上代の武器』弘文堂

関川 妥2014『北九州市文化財調査報告書第137集 八旗神社古墳群』北九州市教育委員会

全南大学校博物館2001『羅州 伏岩里3号墳』(ハングル)

田尾誠敏2007「相模登尾山古墳・埴免古墳」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15 雄山閣

高崎市教育委員会1992『観音塚古墳調査報告書』

滝口 宏編1952『上総金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室

瀧瀬芳之1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号古墳文化研究会

瀧瀬芳之1991「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集-設立10周年記念論文集-』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

瀧瀬芳之2016「装飾付大刀と東国社会」『金鈴塚古墳のかがやき』

## 第5章

## 伝彦徳横穴墓出土の単獣環頭大刀

—仙掌菴コレクションの大刀—

大谷 晃二

## はじめに

九州国立博物館に寄贈された行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料（以下、仙掌菴コレクションと略す）のうち、「単竜環頭」と呼ばれてきた資料について紹介する。この柄頭は、これまで「単竜環頭」と呼ばれていたが、本文で述べるようにその意匠の特徴から単獣環頭と呼ぶことにする<sup>1)</sup>。

この単獣環頭は、仙掌菴コレクションとして伝えられてきたもので（行橋市教育委員会2006）、2014年に九州国立博物館に寄贈された。この単獣環頭は、明治期に作成されたと考えられる『豊前・筑前其他出土考古品図譜』（以下『考古品図譜』と略す）にも図とともに「彦徳横穴出土 福島蔵」と記されている（図1）（三島1979）。出土時期など詳細は不明であるが、明治期には仙掌菴コレクションに加えられていたことがわかる。「彦徳横穴」は、現在の福岡県京都郡みやこ町彦徳にあった横穴墓と推定されるが、具体的な出土地点は不明である。

仙掌菴コレクションとしての所蔵時は、図2のような状態であった。この箱の資料は、単獣環頭の他に、耳環、馬具の鉸具、金銅装圭頭大刀にともなう火炎文の金銅板、楕円形と八角形の貴金具が3点ずつ、柄・鞘装具の銀板と銀線、金銅製の伏板4片がある。このうち、単獣環頭に伴うと判断されたものが、2014年の九州国立博物館の修復事業をへて、図9-⑩のように復元台座に取り付ける形で修復されている。



図1 『豊前・筑前其他出土考古品図譜』（福岡市立博物館蔵）掲載の「彦徳横穴出土」資料の図



図2 仙掌菴コレクションの寄贈前の状態（九州国立博物館提供）

- 竹並遺跡調査会編1979『竹並遺跡』横穴墓 寧楽社  
 田中新史編2010『武射経僧塚古墳石棺篇報告』早稲田大学経僧塚古墳発掘調査団  
 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店  
 千葉隆司2000『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会  
 津野 仁2008「方頭大刀の源流」『王権と武器と信仰』同成社  
 津屋崎町教育委員会1998『勝浦北部丘陵遺跡群 津屋崎町文化財調査報告書第13集』  
 徳江秀夫編1999『群馬県綿貫観音山古墳Ⅱ』群馬県教育委員会  
 豊島直博2017「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』第99巻第2号  
 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎1930『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第5輯 福岡県  
 奈良文化財研究所・都城発掘調査部考古第二研究室編2019『飛鳥奈良時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会  
 新納 泉1882「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会  
 新納 泉1983「双竜・双鳳環頭大刀」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会  
 新納 泉1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号 考古学研究会  
 新納 泉2002「古墳時代の社会統合」『日本の時代史2 倭国と東アジア』吉川弘文館  
 野垣好史2002「三累環頭大刀の編年」一日本出土資料を中心に『物質文化』74 物質文化研究会  
 橋本英将2004「伝統系装飾付大刀の製作系譜」『元興寺文化財研究所』No.85 元興寺文化財研究所  
 橋本英将2006「[折衷系]装飾大刀考」『古代武器研究』Vol.7 古代武器研究会  
 橋本英将2013「装飾大刀」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社  
 橋本英将2014「金銅装頭椎大刀の製作技術と佩用者像」堂古墳 大手前大学史前研究所  
 花田勝広2003『倭政権と古代の宗像—地域考古学の提唱—』(CD-ROM版)  
 浜田耕作・梅原末治1923「近江国高島郡水尾村の古墳」『京都帝国大学文学部研究報告』第八冊 臨川書店  
 浜田信也・栗原和彦1970「高崎古墳群」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会  
 樋口隆康1961「第七 網野岡の三古墳」『京都府文化財調査報告第22冊』京都府教育委員会  
 平ノ内幸治1984『湯湧古墳群—福岡県糟屋郡宇美町大字炭焼字湯湧所在古墳の調査』宇美町教育委員会  
 深谷 淳2008「金銀装係系大刀の変遷」『日本考古学』第26号 日本考古学協会  
 古屋紀之2004「八龍神塚古墳」境町史編さん委員会編『下総 境の生活史』資料編 原始・古代・中世 境町  
 町田 章1976「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所  
 町田 章1986「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会  
 町田 章1987「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会  
 松浦一之介編2003『元岡・桑原遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 福岡市教育委員会  
 松尾充晶2001「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター  
 松尾充晶2005「研究の目的と方法」『装飾付大刀と後期古墳—出雲・上野・東海地域の比較研究—』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター  
 松本岩雄編1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター  
 宗像市教育委員会1980『久戸古墳群Ⅱ』宗像町文化財調査報告書第3集  
 持田大輔2005「韓半島と倭国における装飾環頭大刀の展開」『益子天王塚古墳の時代』早稲田大学會津八一記念博物館  
 持田大輔2010「含玉系単龍鳳環頭大刀の検討—日本列島および朝鮮半島出土例より—」『比較考古学の新天地』同成社  
 持田大輔・中條英樹2009「益子天王塚古墳出土遺物の調査(2)—環頭大刀・馬具—」『會津八一記念博物館研究紀要』第10号  
 山内紀嗣1993「狐塚古墳(岐阜県笠原町)と環頭把頭」『天理参考館』第6号 天理大学附属天理参考館  
 吉松優希2016「山口県域における古墳時代の港—装飾付大刀をもとにして—」『東京学芸大学 アーキオ・クレイオ』



に前肢の向きと角との位置関係から、喰合型のなかでも、足が頭部の角に収まり、すべての足が外側を向く喰合型II B（大谷2006：p156）である。



図4 伝彦徳横穴墓出土単獣環頭全体写真

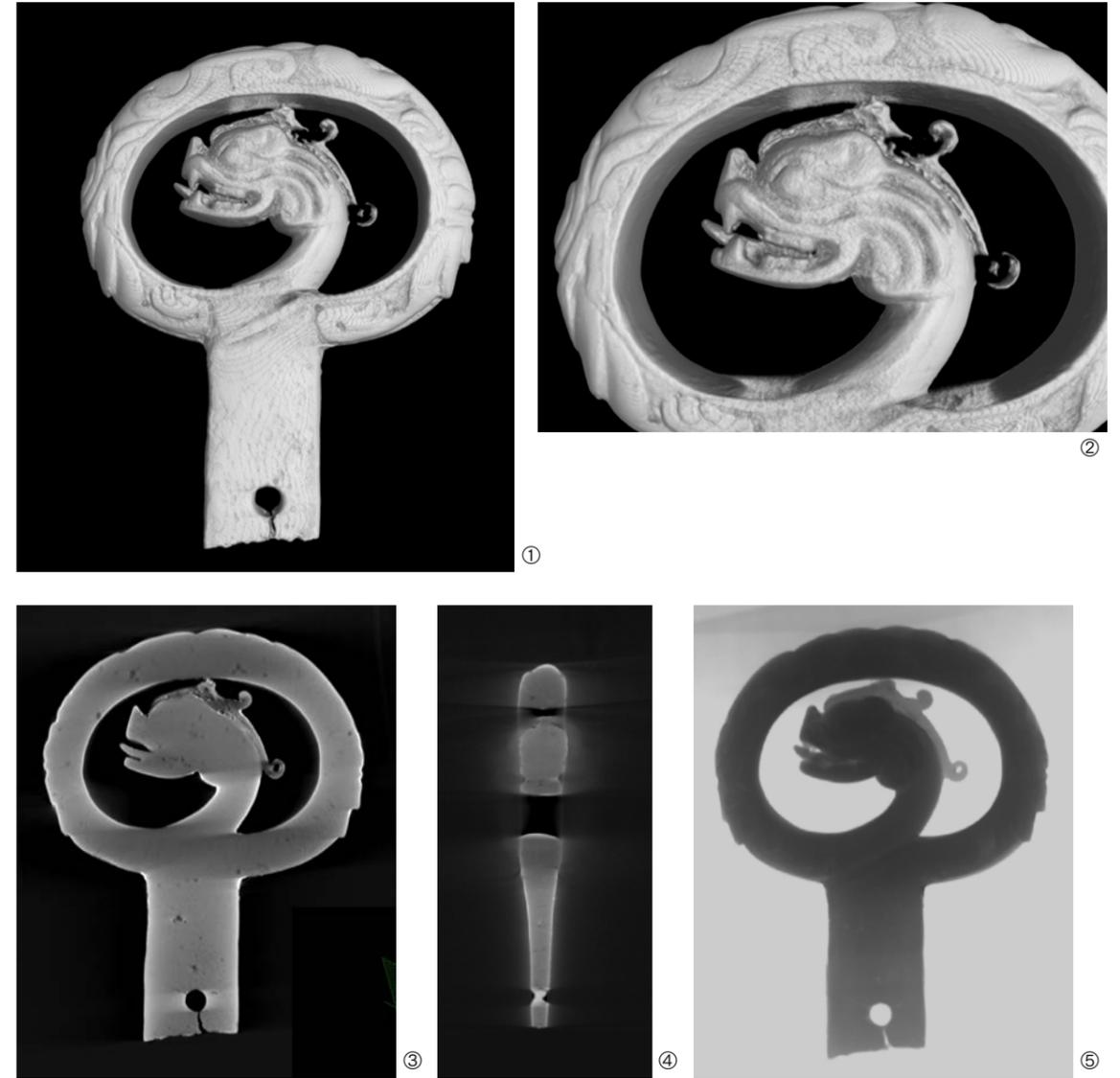
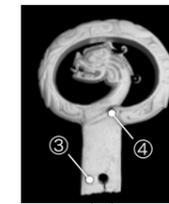


図5 環頭全体CT画像、X線画像（九州国立博物館提供）

金銅単龍環頭柄頭付大刀XRF調査結果

測定機器：ハンドヘルド蛍光X線分析計  
DELTA Professional  
(OLYMPUS CORP.)  
測定モード：Alloy plus（貴金属）  
測定対象：金銅単龍環頭柄頭付大刀（J218）  
測定箇所：左図参照  
測定者：渡辺祐基  
測定日：2019年10月31日  
結果：右表



元素	成分値 (%)			
	①破断面(中央)	②破断面(左)	③穴左	④龍首元
チタン	-	0.43	-	-
鉄	17.41	11.38	1.04	0.31
銅	60.73	56.59	81.66	10.16
スズ	16.94	22.43	12.67	5.87
鉛	2.66	1.33	1.14	0.15
金	-	-	-	64.60
水銀	-	0.58	0.41	8.41

以下、佩表からみて左向きの竜を竜A、右向きの竜を竜Bと呼ぶ(図3)。竜AとBは、同じ構図であり、右前肢を前方へ、左前肢を後方に向け、左右の後肢は、膝を折って、下腿部を後方に伸ばす。全体に半肉彫りで表現され、頭部の角の先端が足の腿にしっかり食い込むなど、文様の輪郭ははっきりとしており、あいまいさがない。

頭部は、2本の冠毛をもち、角は後方に長くのびる。竜Aの冠毛の中には沈線があるが、竜Bにはない。目と眉も表現されている。眉の後方には、耳の表現があるが、竜の頭頂部から段差をつけて表現するのみで(図7-④)、耳の形を浮きあがらせることも、耳の中のくぼみを表現することもなく、耳らしさが感じられない。上顎は途中を屈曲させて、反りかえる牙(獠牙)でめくれた上唇を表現するが、牙は表現されていない。下顎は、先端が厚くなる。牙、歯、雲気、舌の表現はまったく見られない。鬚毛も2段に表現されるが、沈線などの毛の表現はない。

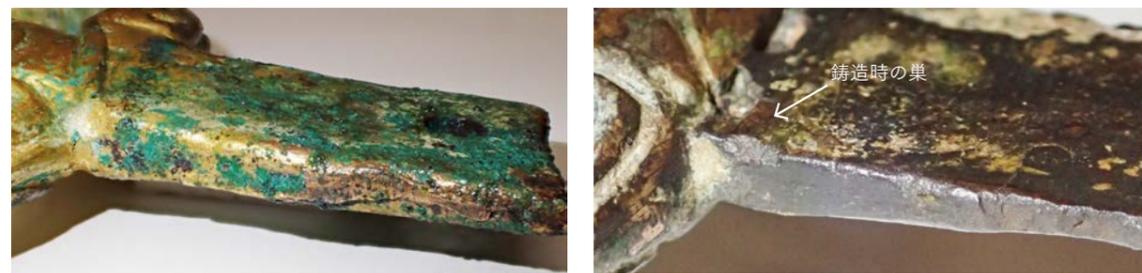
右前肢は前方に伸ばし、左前肢は後方に伸ばす。竜A Bともに、左前肢の上腕部に沈線が刻まれる(図3-ウ、図7-⑥)。後肢は、膝をおって下腿部を後方に伸ばし、その膝の位置は左右(表裏)でそろう。4つの足はすべて、外側を向き、足の爪(指)はすべて3本である(図7-⑧)。

環部の文様には、鑄造後の彫金の痕跡があまり見られず、中心飾同様に、立体的でなめらかな仕上がりとなり、鑄造前の蠟原型作成時に比較的細部まで造形されていたと推定される(図7-⑥・⑧)。

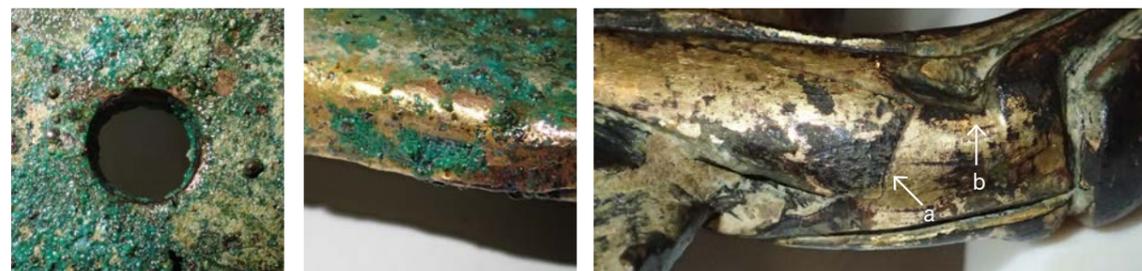
茎(図6) 環部と茎の境には段などはなく、なめらかに薄くなる。長さ3cmで、幅は環部との付け根が19.0mm、先端が幅19.2mmと先端が細くならない。厚みは5.9~4.0mmと先端がやや薄くなる。茎の茎先端をガタネやヤスリのようなもので擦り切って溝をつけ、そこを折る例があるが(大谷2006:p152)、本例にはそうした痕跡は見られない。この端部は後世の破損であることも否定できない。

さらに特徴的なのは、茎に研ぎ痕が見られないことである。単竜・単鳳環頭では、茎の平や側面に鑄造後の研ぎ痕が顕著にのこるが、本例では鑄造しのままの滑らかな面がのこり(図6-①)、茎横断面も隅丸の矩形となる(図6-④)。

目釘孔は、直径4.4~4.5mmのきれいな円形で、表裏で大きさに差はない(図6-③)。仙掌菴コレクションとして保管時には、目釘孔に房が通されていたが(図2)、そのために彫り広げたようにも見えない。現状が本来のものであろう。



①伝彦徳例の環頭茎側面(鑄造後の研ぎがない) ②釜屋1号墳例の環頭茎(鑄造後に研ぎをかけている)



③伝彦徳例の環頭茎の目釘孔 ④伝彦徳例の茎側面拡大 ⑤釜屋1号墳例の環部下端の鑄掛痕(写真中のa)

図6 伝彦徳例と釜屋1号墳例の比較(1)



①伝彦徳例の頭部拡大



②伝彦徳例の獣像の下顎



③釜屋1号墳例の鳳凰像の下顎



④伝彦徳例の走竜文の頭部



⑤釜屋1号墳例の走竜文の頭部



⑥伝彦徳例の獣像の走竜文の肢



⑦釜屋1号墳例の走竜文の肢



⑧伝彦徳例の獣像の足の加工の状況



⑨釜屋1号墳例の足の加工の状況

図7 伝彦徳例と釜屋1号墳例の比較(2)

(3) 柄・鞘の装具

**貴金具 (図9)** 貴金具は5点あり、すべて金銅製、うち3点が完形で、2点は破片である。現状の復元展示の位置でA～Eと呼ぶ。細部を観察することができた貴金具Dを例に詳細を記すと、幅は6.4～6.6mm、厚さは目測で1.5mm程度の銅板を八角形に折り曲げたものである。その接合部の痕跡は未確認である。両縁1.4mmほどの位置に沈線を引き、その両縁に5mmに4つ程度の刻みを入れ、その内側には文様はない双連珠無文貴金具である。他の貴金具もおおよそ同形同大である。

**銀製筒金具片** 薄い銀板による筒金具の破片がある。鞘尻として復元されているものが、もっとも残りがよい。銀板の厚みは計測していないが、ペラペラの薄い銀板の印象である。おそらくは銅地銀張りとは推定されるが、銅の部分はのこっていない。

**銀線 (図8)** 柄間に巻かれていた銀線である。いくつかに破断しており、仙掌菴コレクションの時は紙の台紙に巻き付ける形で保管されていたが(図2)、現在は樹脂の復元台座に巻き付けて修復されている。銀線は、幅1.8mm前後、高さは目測で0.5mm程度、断面は扁平な半円形である。これに5mmで8つ程度のピッチでタガネを用いて刻みを入れる。タガネの刃先の形状は、タガネ痕の観察から先端が深めにえぐれた逆U字形と思われるが、左右で刃がずれたような形状になっている(図8-③)。これが刃先の形状によるものか、当て方によるものかは判断ができない。銀線の側面に余白をのこしてずれて打った部分(図8-④)もある。

**伏金具 (伏板)** 鞘の佩表中央に取り付ける金銅製の伏金具がある。今回は実測ができなかったため、略図を載せた(図8-①)。現状で、4つの破片に分かれている。幅16.7～14.7mm、厚み1mm弱の金銅板に、長方形の透かしを2列に施す。透かしの大きさは、4×7cm程度だが、左右で長さや形状が異なり、いびつな部分もあり、あまり丁寧に作ったものではない。透かしの縁に4mmで4つ程度のピッチで列点を打つ(図9-⑥)。伏板は金銅鉾で鞘木に留める。鉾は、透かし4つないし3つごとに、伏板の左右に打つ。鉾は脱落した部分が多い。鉾頭は径1.8mm前後で、扁平ではなくて半球形である(図9-⑧)。伏金具の裏面は実見できていないので、鉾の脚の形状や長さは不明である。また、伏金具は、本来は鞘を包む布や鞆の合わせ目を留めるためのものであるが、そうしたものが付着しているか否かも確認できていない。

伏金具片の本来の位置については、幅16.7mmと幅が広い方が鞘口側で、14.7mmと狭い方が鞘尻側と推定される。鞘口側の端は凹形になっており(図9-⑦)、この両側辺の突起部が貴金具の下に差し込まれたと推定される。鞘尻側は突起部が欠損するが、同様の構造と推定される(図9-⑩)。

伏板の断面はわずかにカーブを描いており(図9-⑨)、鞘木表面のカーブを反映しているとみられる。

**鞘の復元** 現存の部品からは、図9-①のような全体像を復元できるが、鞘中筒金具に相当する破片はない。現状では伏金具は2つの部品となり、その鞘口側と鞘尻側の端部はのこっている。鞘中金具の有無は、伏板がどれだけ欠損しているかによるが、後述するように装具は新納IV式と考えられるので、筒金具があった可能性も否定できない。

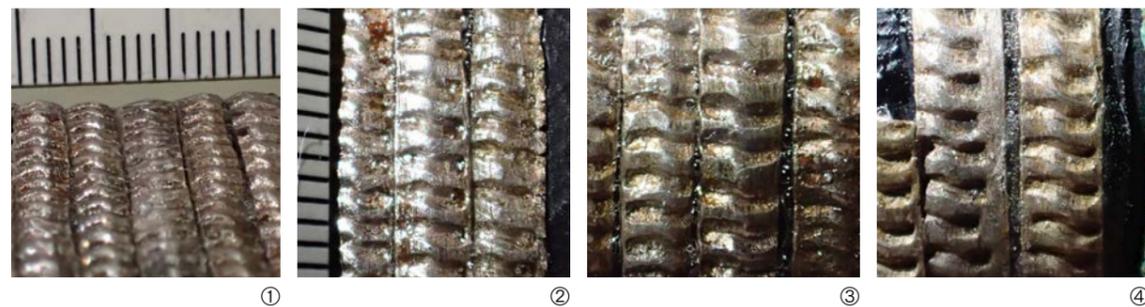


図8 柄間の銀線(目盛は0.5mm)

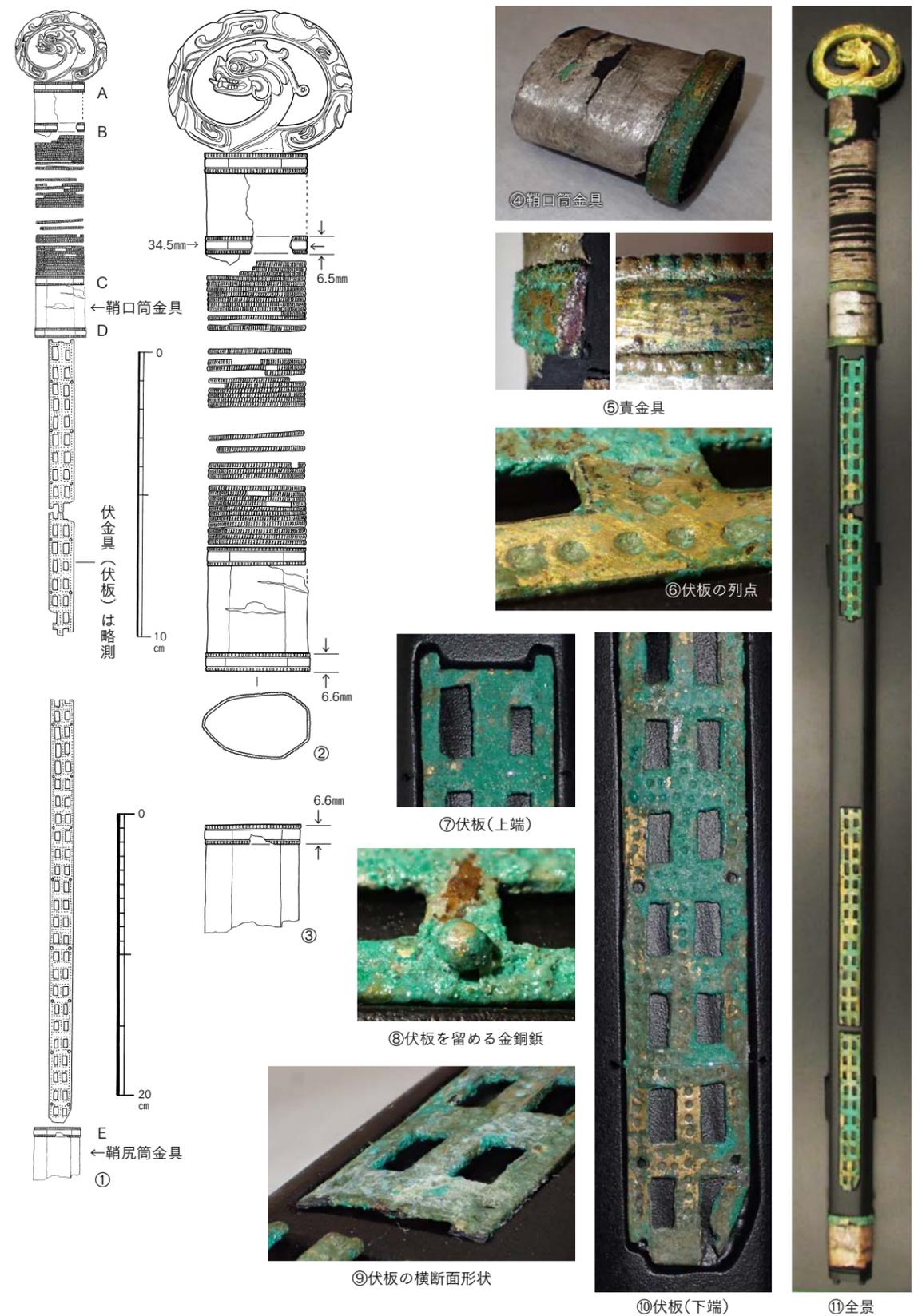


図9 伝彦徳横穴墓出土大刀の柄・鞘の装具

## 2. 考察

伝彦徳例は、蠟型鑄造、柄頭の意匠、伏金具の特徴から新納Ⅲ式（新納1982）以前の作であり、百済からの舶載品ないし初期模倣品とする考えが示されてきた（金宇大2017、齋藤2014：p146、齋藤2020：p221）。今回の資料調査で、新納Ⅳ式で倭製品と考えられてきた広島県釜屋1号墳の単鳳環頭の環部と伝彦徳例の環部が同型品である可能性が考えられるようになった。以下では、同型品である可能性の状況を説明し、これが及ぼす伝彦徳横穴墓の単鳳環頭大刀（以下、伝彦徳例と呼ぶ）の製作時期、工人や製作地の問題について考える。なお、以下では、環頭自体の製作時期、先後関係を示すために、新納泉の編年、Ⅰ式～Ⅵ式（新納1982）を用いる。

### （1）これまでの単竜・単鳳環頭の舶載品、工人の理解と伝彦徳例の位置づけ

伝彦徳例の製作時期については、金宇大と齋藤大輔により、新納Ⅲ式に先行する位置づけがおこなわれている。さらに、金は製作技法を検討することで工人集団の解釈も行っている。やや長くなるが、本稿の論点にも関わるので、金の主張を紹介しておく。

金宇大は、伝彦徳例の柄頭が蠟型鑄造品であることに注目し、製作技法の変化から時期を考える。金は、鑄造による環頭を次のA技法～C技法に分ける（金2017：p293-302）。

A技法は、「直接加工を施したロウ原型を用いて外環文様や中心飾の細部表現まで鑄造段階でつくり出し、最後に鱗など一部の表現を鑿で仕上げるもの。外環文様は、文様部分と余白部分に高低差をつけてレリーフ状に表現し、中心飾も丸みを帯びた立体的な形状をつくる」。公州武寧王陵例、伝善山出土例、伝彦徳横穴墓出土例など。（金2017：p293-296）

B技法は、木や金属で一次原型をつくり、それを寒天のようなもので包み固める、これを切り開いて、ロウ原型作成用の型をつくり、そこへロウを流し込んでロウ原型をつくるものである。このロウ原型を用いて蠟型鑄造を行う。環部が銅地金張りのものをB1技法（伝昌寧出土例、大阪府一須賀WA1号墳例、福岡県西堂古賀崎古墳例、岡山県岩田14号墳例など）、環部も中心飾も鍍金によるものをB2技法（福島県愛宕山古墳例など）にわけるとする。

C技法は、合範による鑄造を行い、鑄造段階ではある程度の大まかな形状をつくるのみで、細部の表現は鑄造後に鑿による切削加工で仕上げるもの。鑄造後の加工の度合いで、C1～C3に細分する。

金宇大のA・B技法とC技法の違いは、前者が蠟型鑄造を行うのに対して、C技法は蠟型鑄造ではなく、合範による鑄造である。したがって、同型・同範品を作ることが容易となる。

A技法とB1技法の違いは、ロウ原型を作る過程にあり、完成品からの見分け方の一つは、ロウ原型を作る際にできる型割り線（parting-line）の有無である。また、A技法の作品は1点ものとなるが、B技法は同型のロウ原型を作ることにより、同型品の製作が可能である。ただし、B技法の同型品の確認例はまだない。

時期については、各技法を新納泉の単竜・単鳳環頭大刀編年（新納1982）に照らして、A技法の武寧王陵例、北牧野2号墳例が最古段階、B1技法が新納Ⅱ・Ⅲ式、B2技法がⅢ式・Ⅳ式、C1技法がⅢ・Ⅳ式、C2技法がⅣ式、C3技法がⅣ式～Ⅵ式に集中するとする（金2017：p306）。そして、A技法の伝彦徳例は、「単龍・単鳳環頭大刀製作の展開」図（同：p323）では、岩田14号墳（Ⅲ式）より古く位置づけられている。

こうした分析を踏まえて、金は「日本列島には、数点のA技法の大刀とまとまった量のB1技法の大刀が出現し、遅れてB2技法やC1技法の大刀が出現、続いてC2技法、C3技法が現れたと推定」し（同：p306）、日本列島での単竜・単鳳環頭大刀の製作地とその工人の動向を次のように考えた。

①A技法の製作地は「列島以外のどこか、つまり朝鮮半島で製作された可能性が高い」（同、p307）。「伝彦徳横穴出土例と北牧野2号墳は百済製、伝善山出土例は加耶ないし新羅での模倣作品とみなす」（同：

p310）。

②「大伽耶の衰退・滅亡を契機に、倭の中枢が百済的な単竜・単鳳環頭大刀を製作すべく、大伽耶の工人を受け入れ」（同：p322）、大伽耶系渡来1世工人が製作したのがB1技法の作品である。

③倭の中央勢力が単竜・単鳳環頭大刀製作工房の拡張を図った結果、ロウ型鑄造技術の伝達が不十分になり、確実な量産のための方法として、合範使用と切削加工を主体としたC技法という新たな工程が創出される。量産化に伴う省力化の中で、線刻主体のC2、C3技法へと移っていった（同：p324）。

以上のように、金は、A技法からC技法という製作技術の違いを、舶載品または渡来工人の製作→倭の工人の製作→量産化に対応した技術の変化、という時間的な違いで説明した。

この基本的な流れについては、私も異論はない。ただ、舶載品や渡来工人の招来は、加耶滅亡後も幾度かあったのではないだろうか。そう考えさせる資料として、伝彦徳例があることを説明したい。なお、金宇大も別の資料を用いて、舶載品や工人移動が継続的ないし断続的に行われていたことを示している（金2019a）。以下では、外装の属性から伝彦徳例の時期を再検討し、次に伝彦徳例が釜屋1号墳の単鳳環頭と同型品であることを紹介し、そこから製作技術や工人の問題を考えていきたい。



①公州宋山里4号墳



②西堂古賀崎古墳（円菱形交互文）  
（伊都国歴史博物館所蔵）



③塚原P1号墳（双連珠無文）  
（高槻市立今城塚古代歴史館所蔵）



④伝彦徳横穴墓（双連珠無文）

図10 貴金具の比較

### （2）双連珠無文貴金具からみた伝彦徳例の時期

単竜・単鳳環頭大刀の貴金具には、銅地金張りと鍍金、双連珠文の中の文様には円文（魚々子文）、菱形、円菱形交互、無文があり、円文には凸と凹がある。伝彦徳例は、金銅製双連珠無文貴金具である。

貴金具の一般的な変遷は、銅地金張りから金銅製へ、文様は、円菱形交互文（Ⅲ式）、円文（Ⅲ・Ⅳ式）→菱形文（Ⅳ式）→無文（Ⅳ式）→貴金具なし（Ⅴ式）である<sup>2)</sup>。このことから伝彦徳例はⅣ式併行となる（図10）。

これに対して、金宇大は、双連珠無文貴金具は、韓国公州宋山里4号墳の円頭大刀などにもあるので、新しい時期の限定根拠にはならないとする（金2017：p309）。しかし、宋山里4号墳例の貴金具（国立公州博物館2015）（図10-①）は、無文部分の幅が狭く、倭で出土するⅣ式の無文貴金具とは異なる。伝彦徳例のサイズも作りも倭のⅣ式の貴金具と同じであり、私は伝彦徳例の貴金具はⅣ式のものとして理解する。

### （3）伏金具からみた伝彦徳例の時期

齋藤大輔は、伏金具の透かしの形と配置から、連続する菱形文の隙間を鈍角二等辺三角形で充填する3列志向（武寧王陵例・Ⅰ式）→長方形1列で縦方向の間隔が狭いもの（海北塚古墳例・Ⅱ式）→長方形1列で縦方向の間隔が広いもの（釘崎3号墳例・Ⅳ式）→心葉形透かしの系列が出現（静岡県宇洞ヶ谷横穴例・Ⅳ式）→心葉形透かしが主流（Ⅴ式）と変遷をとらえ、伝彦徳横穴墓例は武寧王陵と海北塚の間に位置づけ、柄頭の位置付けとあわせてⅡ～Ⅲ式の過渡期と考えた（齋藤2014：p146）。

しかし、武寧王陵例（Ⅰ式）、海北塚古墳例（Ⅱ式）、福岡県西堂古賀崎古墳例（Ⅲ式）は、金板包み

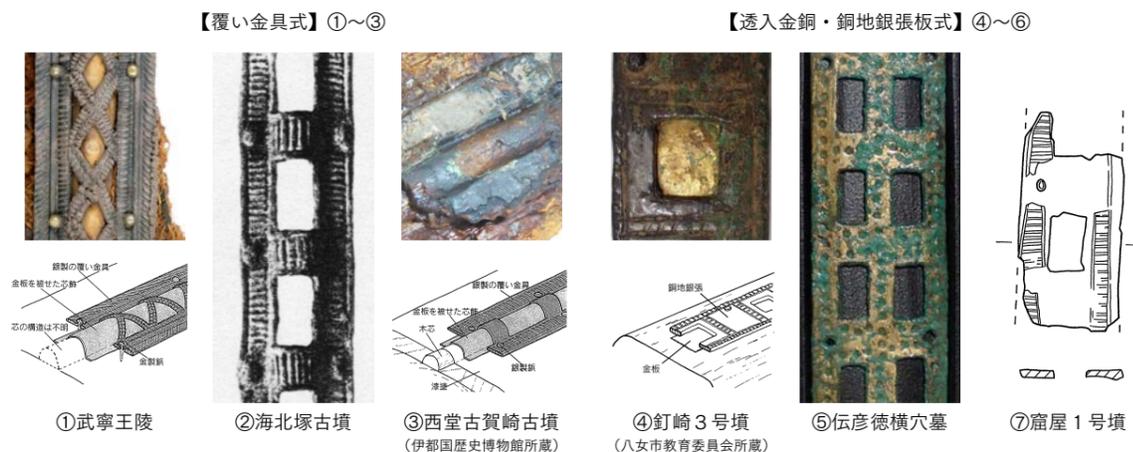


図11 伏板の種類と変遷

の芯を透かし入りの銀板で覆うものであり、そのために伏金具と芯が重なる部分はブリッジとなって突出するものである（大谷は覆い金具式とよぶ）（岡部・大谷2015：p12）。一方、伝彦徳例のように平板な金銅板または銅地銀張に方形透かしを入れるものは、釘崎3号墳例（IV式）、兵庫県窟屋1号墳例（IV式）がある。伏金具が板状であるという点を重視すれば、伝彦徳例の伏金具はIV式に伴うものとなる。

#### （4）環部走竜文からみた伝彦徳例の時期

前節の検討で、伝彦徳例の外装具は新納IV式に並行すると考えた。では、柄頭自体の検討から製作時期を考えることはできないだろうか。伝彦徳例の中心飾は類例がなく、単鳳・単竜環頭編年の組上にあげることが難しい。一方で、環部走竜文は単竜・単鳳環頭大刀に一般的なものである。ここでは、環部走竜文の比較から伝彦徳例の環頭の時期を考えてみよう。

伝彦徳例の環部走竜文は喰合型II B（大谷2006）である。このII Bは、含玉系単鳳環頭大刀に多くみられ、単竜環頭では千葉県山王山古墳例、長野県平地1号墳例、静岡県谷津原1号墳例、福岡県釘崎3号墳例の「山王山系列」にのみみられる（大谷2006）。伝彦徳例の環部文様にもっとも類似するのが、広島県釜屋1号墳例である。環部走竜文の特徴は次のとおり。①両者ともに喰合型II Bの走竜文である。②竜の頭部が明確に識別でき、角も2本がしっかりと表現されている（図13のA）。③右前肢の上腕部の付け根を「？」形に表現し（図13のイ）、左前肢の上腕部を浅いU字形にする（図13のウ）。④中心飾の首の腹側に突帯があり（図13のエ）、これが環部内縁につながり、全周して茎まで突き抜ける。

こうした図像の特徴は、単鳳環頭の変遷の中でどのような位置にくるのであるだろうか。

単鳳環頭の変遷は、新納泉の編年の後、穴沢味光・馬目順一が系列の概念を提示して以降（穴沢・馬目1986）、系列ごとに変遷が考えられるようになった（池田2009、持田2010など）。「系列」の設定と個別資料の先後関係については、論者によって違いがあるが、ここでは、釜屋1号墳例の位置づけを検討するために、関連する単鳳環頭の系列、その先後関係を検討したい（図12）。なお、「系列」は中心飾の類似性とその変化で設定されるが、先行型式の模倣の連続という観点から環部についても比較していく。

釜屋1号墳例に関する系列では、次のように考える。

安坪3号墳例・黒川古文化研究所例（III式）→慶応大学K224例・歴博A225例（III式）→松山市出土例・伝彦徳例出土例を安坪系列とする。これらから分岐または後続して、円光寺古墳A例（IV式）→釜屋1号墳例（IV式）→（未発見資料）→八龍神古墳例（IV式）を円光寺系列（池田2009）<sup>3)</sup>とする。

安坪系列の特徴は、中心飾の鳳凰像の冠毛の形状と先端が環状となる角、そして環部まで達する長い頸毛である<sup>4)</sup>。環部文様では、浅いU字形の前肢上腕部と後肢の屈曲部の表現である。安坪3号墳例

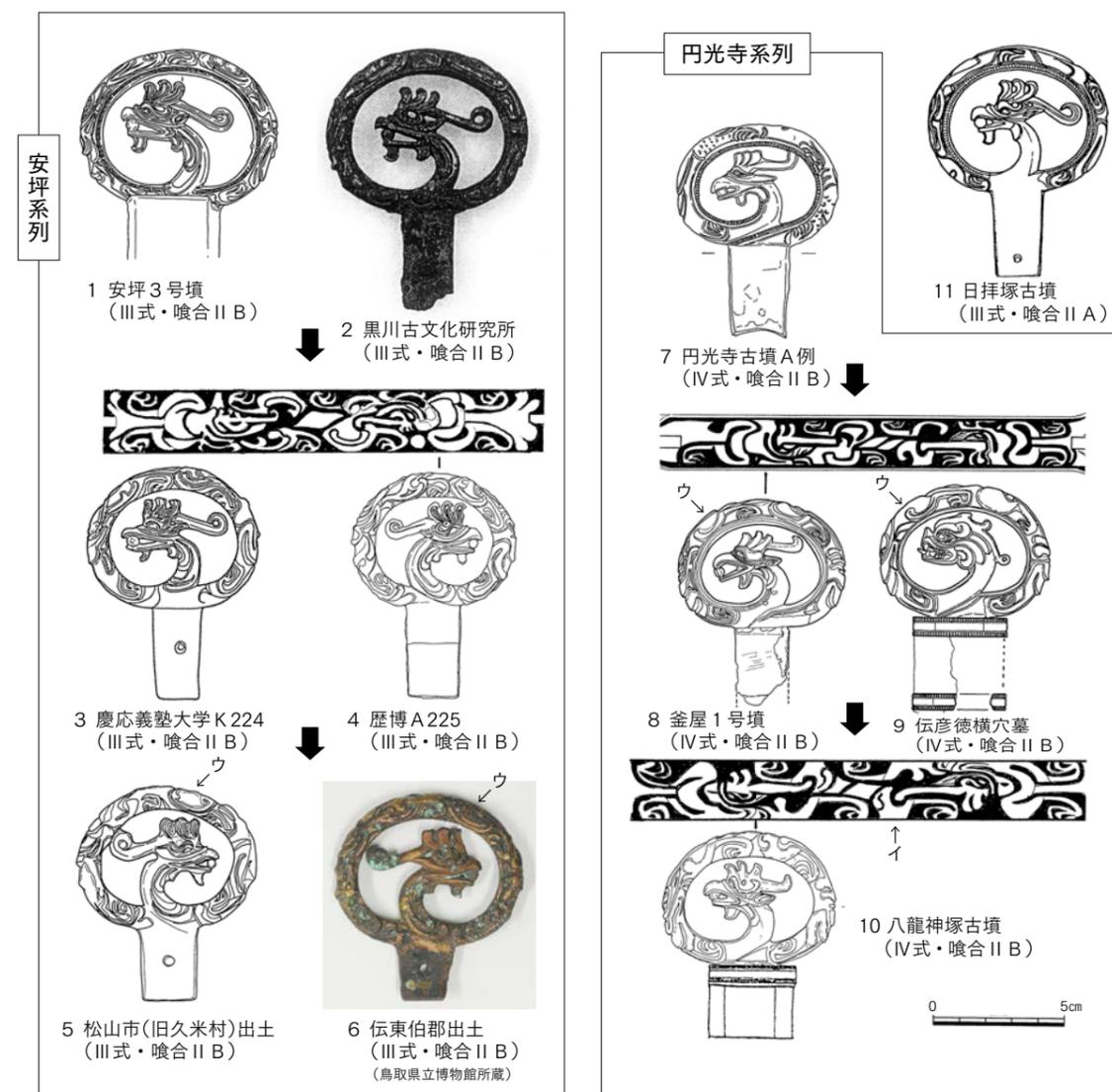


図12 釜屋1号墳単鳳環頭に関連する系列と伝彦徳例の比較  
（III式・IV式は新納1982、喰合II A・II Bは大谷2006による）

（新納III式）<sup>5)</sup>の環部は大きいため、環部走竜文の前肢の上腕部や足、大腿部が細くのびた感じになる。環部の内縁に刻みを入れた突帯をもつ。次の慶応大学K224、歴博A225では、環部内縁の突帯はなくなり、環部の小型化にともない肢が短くなり、上腕部の形状が浅いU字形となり、凹線による表現が特徴的とある。後肢の屈曲も明瞭な凹線で表現される。また、後肢の後方に尾羽のような表現が現れる。中心飾の鳳凰の口の端もそれまでのU字形からV字形に変化し、V字形の口の端がやや反りあがる。これら肢や口の特徴は、次の松山市出土例と東伯郡出土例に引き継がれる。

円光寺系列は、耳から離れてのび、先端がカギ状に曲る角が特徴である。円光寺古墳A例（吉松2017）に環部内縁の刻み目突帯があることから安坪3号墳例から分岐したと考える。また、安坪系列の後半に特徴的な前肢上腕部の浅いU字形の凹線（図12のウ）は、釜屋1号墳例でも沈線で表現されている（図13のB面ウ）ことから、伝松山市出土例などと併行する可能性も考えられる。なお、八龍神古墳例は、環部内縁突帯がなくなる。中心飾のアゴの向きが水平で、冠毛の傾き形状も異なるので、釜屋1号墳例との

間に未発見の資料が入るのか、そもそも別の系列になるのかもしれない。その一方で、環部走竜文の上腕部の表現は、釜屋1号墳例からの変化で理解できる。

以上のように考えると、釜屋1号墳例は、安坪系列、円光寺系列の変化の中で生み出されたものとなる。伝彦徳例の環部走竜文が釜屋1号墳例に類似するのであれば、環頭の特徴からも、伝彦徳例は、新納IV式となる。伝彦徳例がIII式に先行するとなると、単鳳環頭の変遷、先後関係との整合性がとれなくなる。

(5) 伝彦徳例と釜屋1号墳例が同型品である可能性

前項の検討で、伝彦徳例と釜屋1号墳例の環部文様の類似性を指摘した。ここでは、両者が同型品であることを示したい。あらためて、釜屋1号墳の単鳳環頭について概要を記す。釜屋1号墳は広島県福山市に所在し、墳丘は詳細不明、明治43年に長さ4m、幅2.3mの石室から鉄刀、須恵器、玉類とともに単鳳環頭が出土した(新谷2012)。この環頭は、発見者である土地所有者宅に現在も所蔵されている。柄頭以外の装具はわかっていない。

以下、釜屋1号墳の環頭を伝彦徳例と比較しながら紹介したい。釜屋1号墳の環頭は、長さ78.2mm、環部の縦径48.1mm、横径63.2mmを測り、環部の厚さも含めて、伝彦徳例よりも1.5mmほど大きい(図13-③)6)。釜屋1号墳例は、全体に鋳造後の彫金・切削加工で細部を仕上げたもので、その痕が顕著にのこり、金字大がC1技法の具体例として紹介した(金2017)。表面の凸部の鍍金が剥けているのは、発見後に環頭を遊びに使ったりしたためであろう7)。

釜屋1号墳と伝彦徳例の実測図を重ねると(図13-④)、環部の外形、特に竜の顎の先端の段、後肢の大腿の屈曲による段、角の先端部など輪郭の特徴的な部位が一致する。外形だけでなく、環部走竜文の図像、角、目、右前肢の上腕付け根の位置なども一致する。一方、左前肢の上腕部付け根など一部、一致しない点があることも注目される。

中心飾は、釜屋1号墳例の角は横断面が楕円形で伝彦徳例のように板状ではない。冠毛は明瞭に3つに分けて表現するが毛の表現はない。目は扁平な三角形に表現され、眉はわずかに反るだけで、先端は巻き上げない。耳の中には線刻がほどこされている。顎毛には佩表のみ線刻がある。頸毛は2つの段で表現し毛の表現はない。このように、神獣像と鳳凰像のために違いがあるのは当然だが、類似点もある。それは、下顎の平面形がU字形で先端が尖らないことである(図7-②・③)。これは単鳳環頭の新納III式・IV式のものに見られる特徴で、環部走竜文が背中合型のものや、V式のものには尖った下顎となる。また、中心飾の顎からのびる環部内縁突帯(図13-①エ・②エ)がある。環部内縁突帯が顎から始まる例は、円光寺古墳A例、釜屋1号墳例、伝彦徳例の3例のみである。

環部については前項で記したが、細部の表現では違いもある。竜の上顎の牙や耳の輪郭がしっかりと表現され、足の指が細いことである(図7-④・⑤、⑧・⑨)。これらは釜屋1号墳例の鋳造後の彫金の加工で生じた部位である。

茎については、釜屋1号墳例は、茎の側面も平も、研ぎの痕がある(図6-②)。茎の先端は斜めに欠損する。先端部が丸いのは、欠損が鋳造欠陥によるものかは不明。釜屋1号墳例には目釘孔はない。

釜屋1号墳には鋳造技術に未熟な点がみられる。茎と環部の接合部には、巢による穴が顕著にみられる(図6-②)。この他にも中心飾の竜の首にも巢のくぼみが2か所見える。さらに、環部の佩表5時から6時には、鋳掛をした痕がある(図6-⑤のa、図13-①a)。このすぐ右側(走竜の左足首)には、鋳造欠陥(巢)かそれ以前の原型の破損なのか、大きなくぼみがある(同b)。肢の輪郭にも見えるが、他の肢よりも凹みが深い。また、鋳掛の上部は、本来なら左足首を彫りこんで表現するため、くぼむはずだが、そうっておらず、当初から加工されていないようである。つまり、鋳造前の状態で、竜の足が表現されていないことになる。このように、金字大の指摘するとおり、A技法の伝彦徳例に比べると、C1技法の釜屋1号墳例は、鋳造技術の未熟さが目立つ。

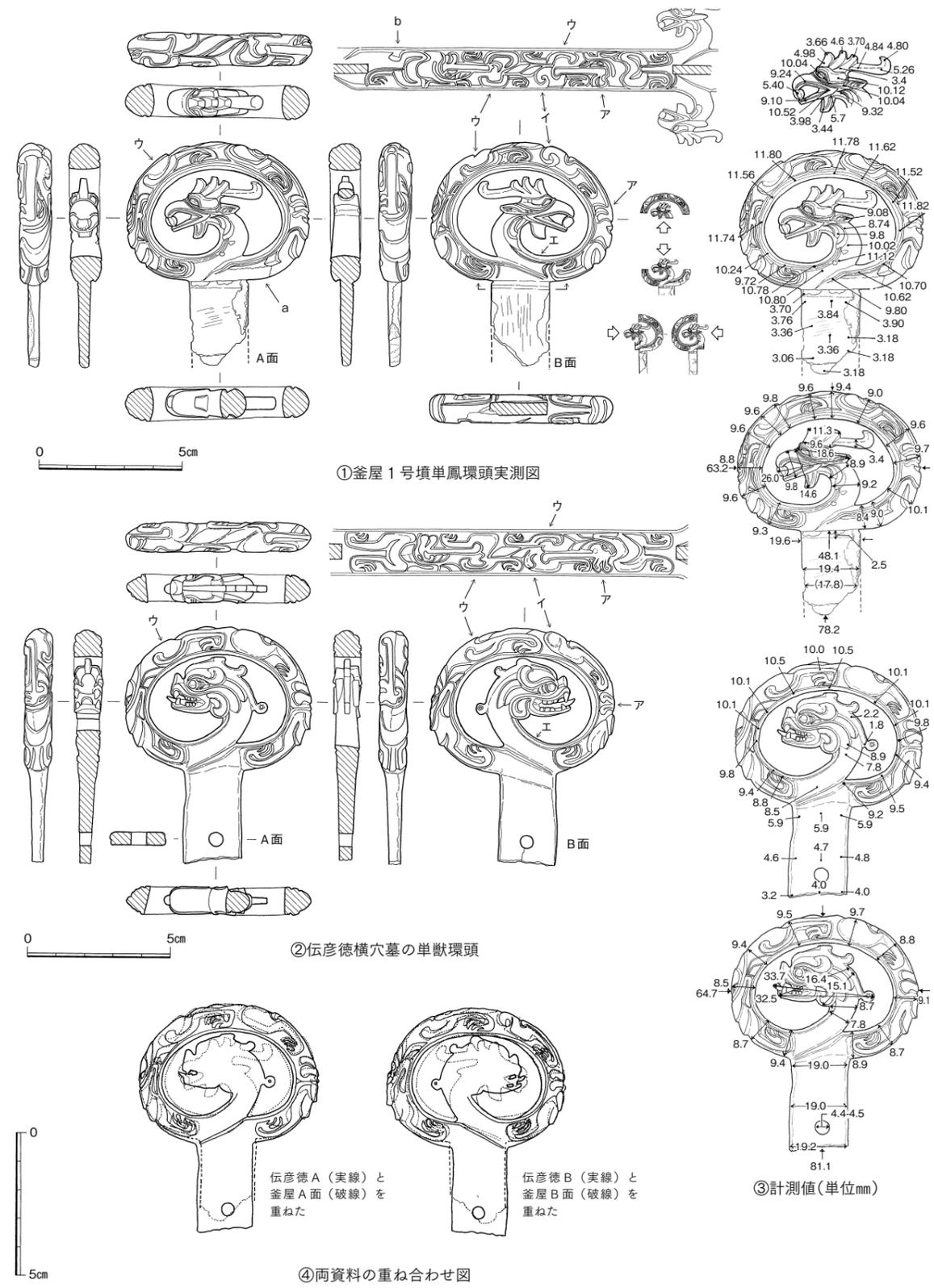


図13 伝彦徳例と釜屋1号墳例の比較(3)(1/2)

(6) 伝彦徳と釜屋1号墳例の製作工程の比較

改めて両資料の特徴をあげると次のとおりである。

**特徴 a**：伝彦徳例は蠟型鑄造品であり、鑄造前に蠟原型を製作する必要がある。釜屋1号墳例は合範鑄造でも製作可能である。

**特徴 b**：伝彦徳例は、鑄造前に文様の大半を加工するが、釜屋1号墳例は、鑄造後に彫金・切削加工により文様の大半を加工する。釜屋1号墳例の鑄造前の原型には環部の竜Aの後左足は彫られていない。

**特徴 c**：伝彦徳例の茎は鑄造後の研ぎをしていないが、釜屋1号墳例は、しっかりと研いで仕上げる。

**特徴 d**：完成品では、両資料の環部の形状は一致し、主要な環部走竜文も一致する部位が多い。ただし、釜屋1号墳例の鑄造後の彫金で成形した部分では、両資料間でずれも一部にある。

**特徴 e**：完成品の量量は、彫金・切削加工で仕上げた釜屋1号墳例の方が、鑄造後に大きく切削加工をしていない伝彦徳例よりも、環部の厚み、環部の幅、横径で1.5mm前後大きい。

**特徴 f**：両資料とも、中心飾の厚みは環部の厚みをほとんど超えない。

以上の特徴が生じた理由をどのように説明できるであろうか。私は、単竜・単鳳環頭の一部には、同範・同型品があると考え、その具体例として単竜環頭では大阪府塚原P1号墳と大阪府大泉20群3号墳、単鳳環頭では千葉県翁作古墳と山梨県寺の前3号墳などを示した(大谷2006)。これらは合わせ鑄型(合範)によるもの<sup>8)</sup>で、鑄造時には細部の文様はまだできていない、のっぺらぼうに近いものを鑄出し、鑄造後に彫金によって仕上げたものと考えた。こうした事例を認めるならば、今回の伝彦徳例と釜屋1号墳の場合も、同じ原型を用いたことで生じたと考える。

以下、次のような製作工程の試案を提示して批判をあおぎたい(図14)。

- ①粘土や木を用いて1次原型を作る。環部の主要文様は、おおまかな輪郭または割付線などを刻む。環の内側は埋まっている。
- ②1次原型に粘土などを用いて1次雌型を作る。
- ③1次雌型に蠟を流し、開いて蠟製の2次原型を取り出す。この1次雌型を複数回使えば、同じ2次原型を複数作ることができる。
- ④1次原型時に刻んでおいた図像の輪郭にそって環部走竜文を彫刻する。中心飾も獣像、鳳凰像それぞれを彫り出し、2次原型を完成させる。この時、伝彦徳例は、環部の細部まで加工するので、2次原型の当初の厚みよりも薄くなる。一方、釜屋1号墳例は、あまり加工せず、厚みは1次原型の厚みに近いものとなる。これが**特徴 e**の生じる理由である。
- ⑤これを土で包み、焼いて蠟の2次原型を流し捨て、鑄型(2次雌型)を作る。
- ⑥鑄型(2次雌型)に青銅を流し込む。
- ⑦鑄型を壊して製品を取り出す。
- ⑧細部を研いで仕上げる。この時に伝彦徳例は、表面を研ぎ、鑄出されなかったごく一部を彫金する。一方、釜屋1号墳例は、彫金・切削加工を施して、図像の大半を仕上げる。この時の彫金・切削加工の箇所は、主に文様の凹部であるため、環部の最大の厚みはそれほど減らない。
- ⑨鍍金をして完成。

今回、1次原型では環部の中が埋まったものだと考え、2次原型製作時に中心飾を彫り出すことで、獣像と鳳凰像の作り分けを想定した。これについては、環部と別に中心飾の蠟原型を作って、後から取り付けてもかまわないが、**特徴 f**の状況から、一体で作ったものと考えた。

では、釜屋1号墳例と伝彦徳例では、同じ原型を使いながら、なぜこのように製作工程の違いが生じたのだろうか。金宇大が指摘するように、工人の鑄造技術の差によるものと考えられる。釜屋1号墳例は、先に見たように、環部の下や中心飾の頸部に巢があり、伝彦徳例をつくった工人とは、鑄造の熟練度に違いあることがわかる。次に、伝彦徳例をつくった工人像をその意匠の系譜から考えたい。

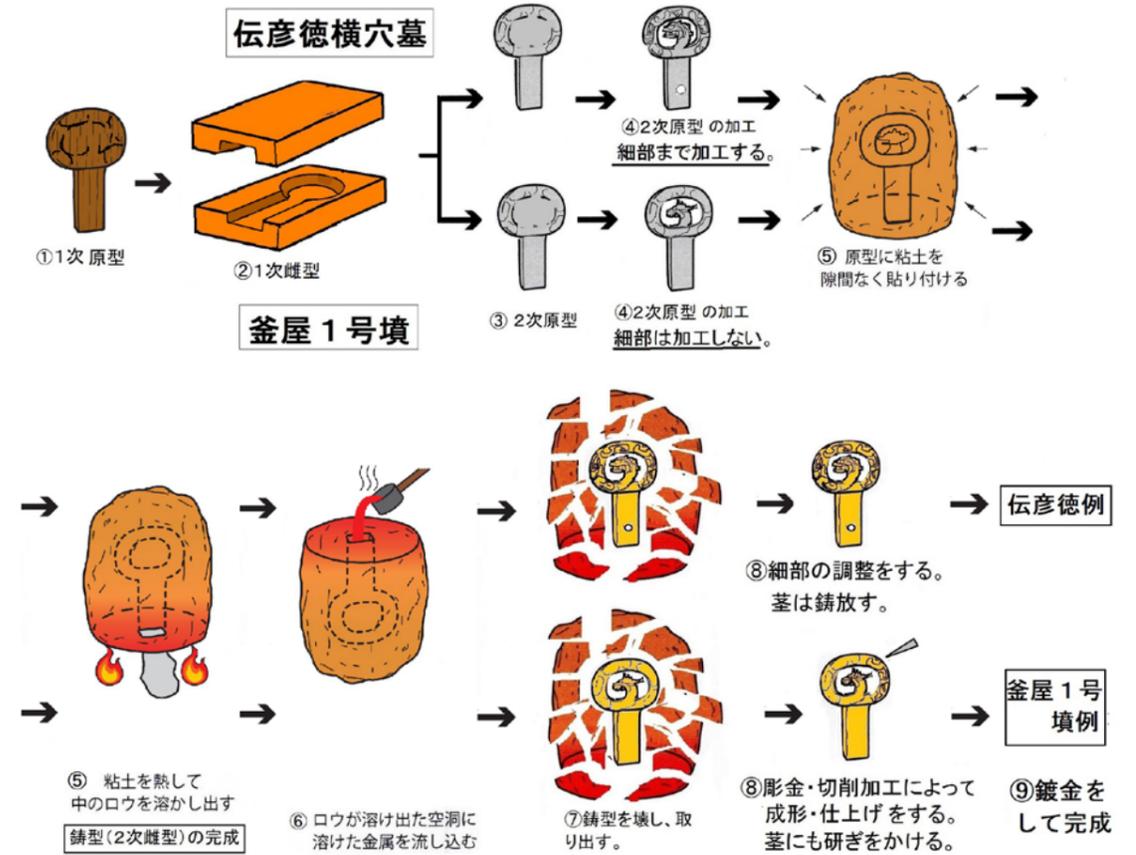


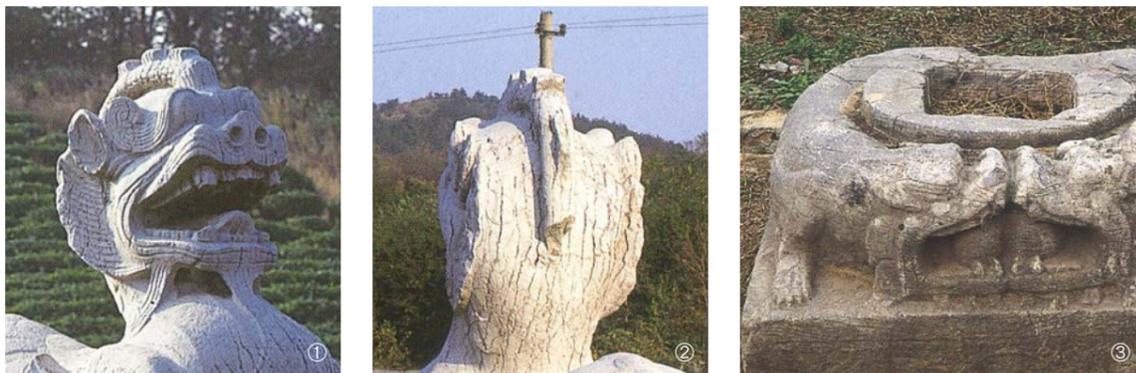
図14 伝彦徳例と釜屋1号墳例の製作工程想像図(金宇大の原図(金2019b)を改変・利用)

(7) 伝彦徳例の獣像の系譜からみたその工人像

伝彦徳の例の中心飾の獣像に類似する資料として、中国南朝の陵墓の有角有髭の石獣がある(図15-①・②)。主な類似点は次のとおり。①角は後頭部から首にまで密着してのびる。②目は杏仁形に大きく見開く。③上顎と下顎の口の開き方は、V字でなく大きなU字形に開く。④鼻は正面観が山形で面をなす。相違点は、石獣は頬毛が上にのびるが、伝彦徳例は下がる。この点は、石柱台座の獣像に類似がある(図15-③)。石獣は目と眉の後方に耳を作り、鬚髭があるが、伝彦徳例にはこれがない。

日本出土の考古資料の鬼神、神獣、竜の意匠が、中国の壁画彫刻や石造物の意匠に系譜がつながることはよく知られている。獅噬環頭大刀の中心飾は、北魏の雲崗石窟第8洞主室北壁の獣面や鄧県南朝画像磚墓の彩繪獣面に類似し、藤ノ木古墳の金銅装鞍金具の鬼神は北魏洛陽瀘河出土の石棺や荀景墓誌石の鬼神などに似る(勝部1993)。武寧王陵例や日本出土の単竜環頭の意匠も、雲崗石窟第12洞の交竜文の竜頭に類似する。また、南朝陵墓の梁蕭宏墓の石柱(奈良県立橿原考古学研究所編2002: p42)にも類似の竜首の浮彫がある。

私は、伝彦徳例の獣像が南朝の石獣(麒麟、天禄など)と同じものを意味するというつもりはない。伝彦徳例をつくった工人は、こうした中国大陸の石獣などに表現される神獣の意匠を知っていた人物だと考えるのである。つまり、この伝彦徳例の工人は優れた鑄造技術をもち、こうした意匠を知っていた人物である。それは中国または朝鮮半島の工人の可能性が高い。



①②宋文帝長寧陵（435年没）の右石獸 ③梁蕭秀墓（518年没）の左右柱台座の獸像

図15 中国南朝の石獸と伝彦徳例の中心飾りの比較（奈良県立橿原考古学研究所提供）

(8) まとめ

ここまでの検討をまとめると、次のようになる。

- ①伝彦徳例の外装は新納IV式のもの。
- ②伝彦徳例の環頭の環部走竜文は、単鳳環頭IV式と共通し、その製作時期もIV式併行期である。
- ③伝彦徳例と釜屋1号墳例の環頭は、同型品である。
- ④伝彦徳例と釜屋1号墳例の環頭は、同じ原型を用いながらも工程は異なり、前者は鑄造技術に熟練した工人の作で、後者は未熟な工人の作である。
- ⑤伝彦徳例の工人は、中国南朝の石獸またはそうした系譜の図像を知っている人物である。

以上の状況から想定される伝彦徳例と釜屋1号墳例の製作地について、考えられる組み合わせをあげてみた。

案	伝彦徳例	釜屋1号墳例	製作時期	想定される状況の一案	評価と問題点
A案	舶載品	舶載品	IV式	熟練度の違う工人が、中国・朝鮮半島の同じ工房でそれぞれを製作し、製品を倭へ送った。	日本出土の新納IV式以降の単竜・単鳳環頭にも舶載品があることになる。
B案	舶載品	倭製品		中国・朝鮮半島で熟練した工人が製作した。ほぼ同じところに1次原型が倭へもたらされ、倭で熟練度の低い工人が作った。	日本の単鳳環頭の編年体系には影響しないが、原型だけが倭に運ばれることがあるのだろうか。
C案	倭製品	倭製品		熟練した渡来工人と熟練度の低い倭の工人が、同じ工房で製作した。	渡来工人は新納IV式の時期にも来た、または、渡来1世代に長寿の人がいた。*1

私は、原型だけが倭に運ばれたとするB案は難しいと思う。両資料が同時期に同じ工房で製作されたとするA・C案を可能性として考えたい。

A案については、中国または朝鮮の工房でも優品と劣品はあってもよい。渡来工人と倭人の製作の区別を製品の精粗だけで判断するのは正しくない。工人が図像をどの程度理解していたのかを読み解く必要があるだろう。釜屋1号墳例は、必ずしも図像が崩れているとはいえず、工程が違うだけである。

C案については、従来の工人の渡来は竜鳳文環頭大刀の倭製化の初期というイメージに対して、今後は個別資料の検討を通じて、渡来人が数回来ている可能も検討すべきであろう（金2019a）。

また、C案の渡来工人に長寿の人がいて、彼が作ったとする場合、渡来第1世代が渡来した時期と新納IV式をつかった工人の間には、何年くらいの間があるのだろうか。渡来工人第1世代が新納III式より前に倭に来た場合、IV式との間の期間はどれほどになるだろうか。新納泉のI式からIV式を1型式10年で割り振る考え（新納1987）に従えば、20～30年（工人1世代か2世代）となる。また、金宇大は、562年の大伽耶滅亡を契機に、日本に来た渡来工人がB1技法でIII式の大刀を作り、渡来工人第2世代

の工房をへて、倭での大刀生産拡大の中でC1技法が出現したと考える。このC1技法の出現年代は具体的には示されていないが、挿図の「単龍・単鳳環頭大刀製作の展開」（金2017：p323）と上記の表現を考慮すると30年もしくはそれ以上の間（工人2世代か？）を見込んでいると思われる。とすれば、長生きした渡来工人が伝彦徳を倭でつくることはありえるだろう。

おわりに

伝彦徳横穴墓出土の単竜環頭大刀を通じて、単竜・単鳳環頭大刀の舶載品または工人の渡来が、数度にわたりあった可能性を指摘した。この根拠は、資料の観察によるものであるが、鑄造技術、彫金・切削加工の理解、個別資料の観察において、私自身の不勉強な点が多い。こうした観察・記載・評価をより深めていくことが製作地の議論において必要不可欠であると考えられる。

謝辞

伝彦徳横穴墓の大刀および釜屋1号墳の環頭の資料調査、ならびに関連資料の情報提供などについて、次の方々と機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。穴沢味光、今井涼子、内田実、金宇大、小嶋篤、齋藤大輔、澤田秀実、新谷武夫、吉松優希、村上忠孝、伊都国歴史博物館、今城塚古代歴史館、岩戸山歴史文化交流館、九州国立博物館、奈良県立橿原考古学研究所、福山市教育委員会。

註

- 1) 当時の人が伝彦徳資料を、竜かそれとも他の神獣を意図して作ったのかはわからない。それは、今日私たちが「単竜環頭」「単鳳環頭」と区別して呼び分けている資料が、当時の人々の認識した竜や鳳凰に対応しているかが、わからないと指摘されるのと同じである。しかし、考古学的に意匠や型式の分類や変遷を考える上で、伝彦徳の柄頭は、単竜とは区別して呼ぶべきだと考える。
- 2) 新納泉は、双連珠円文責金具（銅地金張）を塚原P1号墳の単竜環頭（新納IV式）にともなうと考えたが（新納1982：p127）、同墳からは双連珠無文責金具（金銅製）も出土している。出土状況の写真（高槻市史編さん委員会1973）から考えても、双連珠無文責金具が同墳の単竜環頭大刀に伴うと考えられる（町田1986：p294、岡部・大谷2015：p11）。
- 3) 円光寺系列を設定した池田征弘は、八龍神古墳例の次に兵庫県窟屋1号墳例を位置づける（池田2009：p55）。私は窟屋1号墳例の環部走竜文は、背中合型の初期のものと理解しており、中心飾も頸毛の表現が異なっており、別系列とする。また、円光寺古墳A例は、②の特徴が不明瞭である。これは鑄造後の彫金が浅くて、表現が不十分になった可能性を考えている。
- 4) 従来、これらの資料は、その最古型式を福岡県日拝塚古墳例と考えて、「日拝塚系列」とされてきた（持田2010：p416）。しかし、私は、この頸毛の特徴を重視して、日拝塚古墳をのぞき、より限定して安坪系列とした。
- 5) 金宇大は、安坪3号墳例は、柄や鞘の装具が付け替えられた可能性を指摘する（金2017：p309）。私も同意見であり、安坪3号墳例は、倭系双竜環頭大刀工人の作った柄と鞘装具が取り付けられたものとする。そのため、柄頭の編年観と外装による編年観はずれることになるが、ここでは柄頭の製作時期を問題としているので、新納IV式の時期としてあつかう。
- 6) 計測値は、別々の調査場所での計測によるもののため、まったく同一の箇所を計測することはできていない。
- 7) ちんけりをして遊んだとのことである（新谷2012）。
- 8) この合範は、鑄造時につかったものか、2次原型を作るためのものかは不明である。

挿図の出典

図2 九州国立博物館提供、図5 九州国立博物館提供、図9① 九州国立博物館提供、図10①国立公州博物館2015、図11①と③の模式図は岡部・大谷2015、①の写真は国立公州博物館2006、②梅原1937、⑥池田編2009。  
 図12 1・7は金2017、2は黒川古文化研究所1990、3・11は新納1982、4は高田・永嶋2012を加筆・改変、5は吉松2018、6は鳥取県立博物館提供、10は古屋2004を加筆・改変。図14 金宇大2019bのイラストを利用して作成した。図15 奈良県立橿原考古学研究所提供。  
 上記以外は、大谷が作成・撮影した。

## 西 幸子

### 第6章

# 筑紫の豪族の馬装

### はじめに

『魏志』倭人伝に「牛馬なし」と書かれた日本列島に、渡来文化として馬と騎馬文化が伝わり定着していくのは、今日までの出土資料から4世紀末以降と目される<sup>1)</sup>。九州北部地域では5世紀前半以降に馬具が出土し始め、騎馬文化の浸透する様子が窺える。

文献史料の少ない古墳時代において、古墳から出土する馬具は当時の騎馬文化とそれに伴う交流の様相を復元するための重要な資料である。馬具は、人が騎乗するための道具（轡、鞍、鐙など）や、馬を飾る道具（雲珠・辻金具、杏葉など）を組み合わせ、1つのセットとして使用する。その馬具のセット関係＝「馬装」には一定の規則性や関連性があり、そこから馬具を保有する被葬者と中央政権や地方、そして朝鮮半島との関係や、の中で果たした役割が推測できる。

九州国立博物館には、周防灘沿岸、京都平野周辺の収集品と目される馬具が所蔵されている。これら馬具は周辺の豪族の性格や役割を考える上で非常に重要な資料であるにも関わらず、その多くが世に知られておらず、これまで十分に歴史的解釈に反映されてこなかった。

よって本稿では、九州国立博物館所蔵馬具の考古学的位置づけから資料的価値を見出し、復元された馬装から見える北部九州の豪族たちの性格と、彼らの果たした役割に迫りたい。

### 1. 九州国立博物館所蔵の馬具

九州国立博物館には行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料（以下、仙掌菴コレクション）と呼ばれる考古資料群が所蔵しており、その中に周防灘沿岸の京都平野周辺で収集された資料と目される、5～7世紀の馬具類が複数含まれている。馬具は全部で8種類20点、<sup>ぎょうよう</sup>鏡板<sup>かがみいた</sup>、<sup>つじかなぐ</sup>辻金具といった馬を飾るための馬具が専らである。

残念ながら、仙掌菴コレクションの馬具に関する採集場所、採集時期、採集の経緯や収集された経緯等は記録がないためよく分かっていない。しかし、古墳に副葬される5世紀～7世紀代の馬具には、<sup>かがみいた</sup>鏡板<sup>ぎょうよう</sup>と杏葉の組み合わせに一定の規則があるため、形状からセット関係の推測が可能である。そして、遺物に見られる年代的特徴や型式の類似性から、仙掌菴コレクションの馬具には、次の3つの馬装のセットがあると想定される。

①5世紀後半代の馬装：<sup>さんれいぎょうよう</sup>三鈴杏葉3点<sup>さんかんれい</sup>＋<sup>すずつきどうき</sup>三環鈴（＋鈴付銅器？）（図3・4）
1つ目は、<sup>ちゅうどうすずつきばぐ</sup>鑄銅鈴付馬具の三鈴杏葉、三環鈴のセットである。三鈴杏葉3点はほぼ同じ法量で、いずれも<sup>へんえんくかく</sup>扁円区画と<sup>さんかくくかく</sup>三角区画を持ち、内区には珠文<sup>しゅもん</sup>が鑄出される。しかし、明確な中心珠文<sup>しゅもん</sup>を持たない古い様相を示す。埼玉県四十塚古墳例と群馬県大山鬼塚古墳例の中間的な型式から、年代は5世紀末頃とみられる。

三環鈴は全体径が約10cmと小型で、鈴径に対して鈴の高さが高い俵形の鈴形状は古い様相を示す。静岡県南沼上3号墳出土例に類似し、時期は5世紀後半代古相と考えられる。

三環鈴は馬具と共伴する例が多く、特に、埼玉県埼玉稲荷山古墳や愛知県志段味大塚古墳など、三鈴杏葉・五鈴杏葉との共伴例が多い。仙掌菴コレクションの三鈴杏葉と三環鈴もほぼ同時期の遺物で、材

参考文献

穴沢咏光・馬目順→1976「龍鳳文環頭大刀試論－韓国出土例を中心にして－」『百済研究』7

穴沢咏光・馬目順→1986「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布－一つの試論－」『考古学ジャーナル』No.266　ニュー・サイエンス社

池田征弘編2009『窟屋1号墳』兵庫県教育委員会

池田征弘2009「金銅装単鳳環頭大刀について」『窟屋1号墳』兵庫県教育委員会

梅原末治1937「摂津福井の海北塚古墳」『近畿地方古墳墓の調査』二　日本古代文化研究所

大谷晃二2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』

岡部裕俊・大谷晃二2015「西堂古賀崎古墳に関する新知見-墳丘・石室測量図の発見と単竜環頭大刀の詳細観察の成果-」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』第10号　糸島市立歴史博物館

勝部明生1993「藤ノ木古墳の鞍金具文様の世界」『藤ノ木古墳の全貌』榎原考古学研究所編　学生社

金　宇大2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会

金　宇大2019 a 「旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価」『文化財と技術』第9号　工芸文化研究所

金　宇大2019 b 「刀剣から読む古代朝鮮と倭」『刀剣が語る古代国家誕生』資料集　古代歴史文化協議会

黒川古文化研究所1990『黒川古文化研究所名品選』

国立公州博物館2006『武寧王陵　出土遺物分析報告書（Ⅱ）』（ハングル）

国立公州博物館2015『日帝強占期資料調査報告17輯　宋山里4～8・29号墳再報告書』（ハングル）

齋藤大輔2014「北部九州における装飾武器の特質とその背景」『第17回九州前方後円墳研究大会大分大会　古墳時代の地域間交流2』九州前方円墳研究会

齋藤大輔2020『古墳時代の武装と境界領域　福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修　令和元年（2019）度博士学位申請論文〔文学〕』

新谷武夫2012「安芸・備後の装飾大刀」『芸備』第41集　芸備友の会

高田寛太・永嶋正春2012「武器」『国立歴史民俗博物館資料図録8　古墳関連資料』国立歴史民俗博物館

高槻市史編さん委員会1973『高槻市史』第6巻考古編　高槻市役所

奈良県立榎原考古学研究所編2002『図録中国南朝陵墓の石造物　南朝石刻』

新納　泉1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号　史学研究会

新納　泉1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号　考古学研究会

古屋紀之2004「八龍神塚古墳」境町史編さん委員会編『下総　境の生活史』資料編　原始・古代・中世　境町

町田　章1976「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ　奈良国立文化財研究所（『東アジアの装飾墓』1987　同朋社出版　に再録）

町田　章1986「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会（『東アジアの装飾墓』1987　同朋社出版　に再録）

三島　格1979「館蔵本「豊前・筑前其他出土考古品図譜」解題」『福岡市立歴史資料館　研究報告』第3集　福岡市立歴史資料館

持田大輔2010「含玉系単龍鳳環頭大刀の検討-日本列島および朝鮮半島出土例より-」『比較考古学の新天地』同成社

行橋市教育委員会2006『匠の技』－京都平野の名品展－

吉松優希2017「山口県萩市円光寺古墳の出土遺物」『東京学芸大学　アーキオ・クレイオ』第14号

吉松優希2018「愛媛県松山市（旧温泉郡久米村）出土単鳳環頭柄頭」『國學院大學博物館研究報告』第34輯

<sup>[1]</sup> 第5章 伝彦徳横穴墓出土の単獣環頭大刀

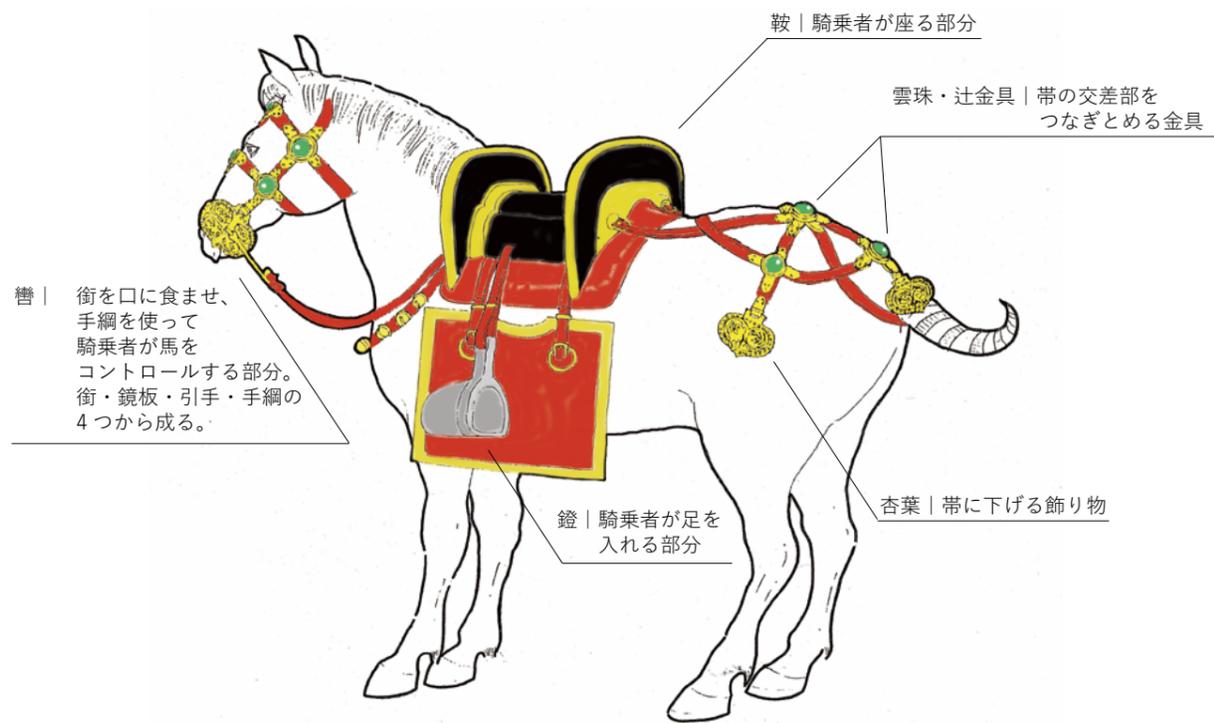


図1 馬具各部名称図

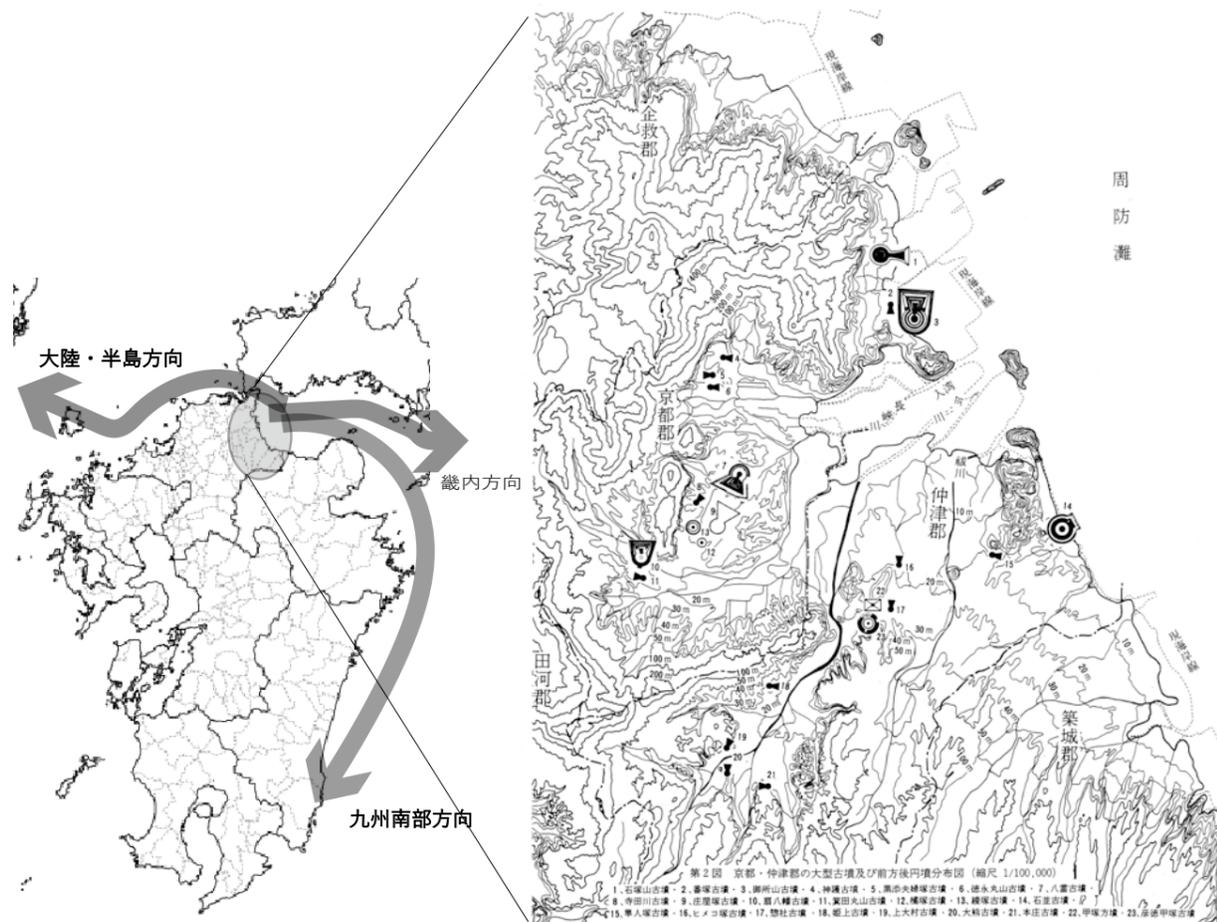


図2 豊前北部地域の周辺地形図

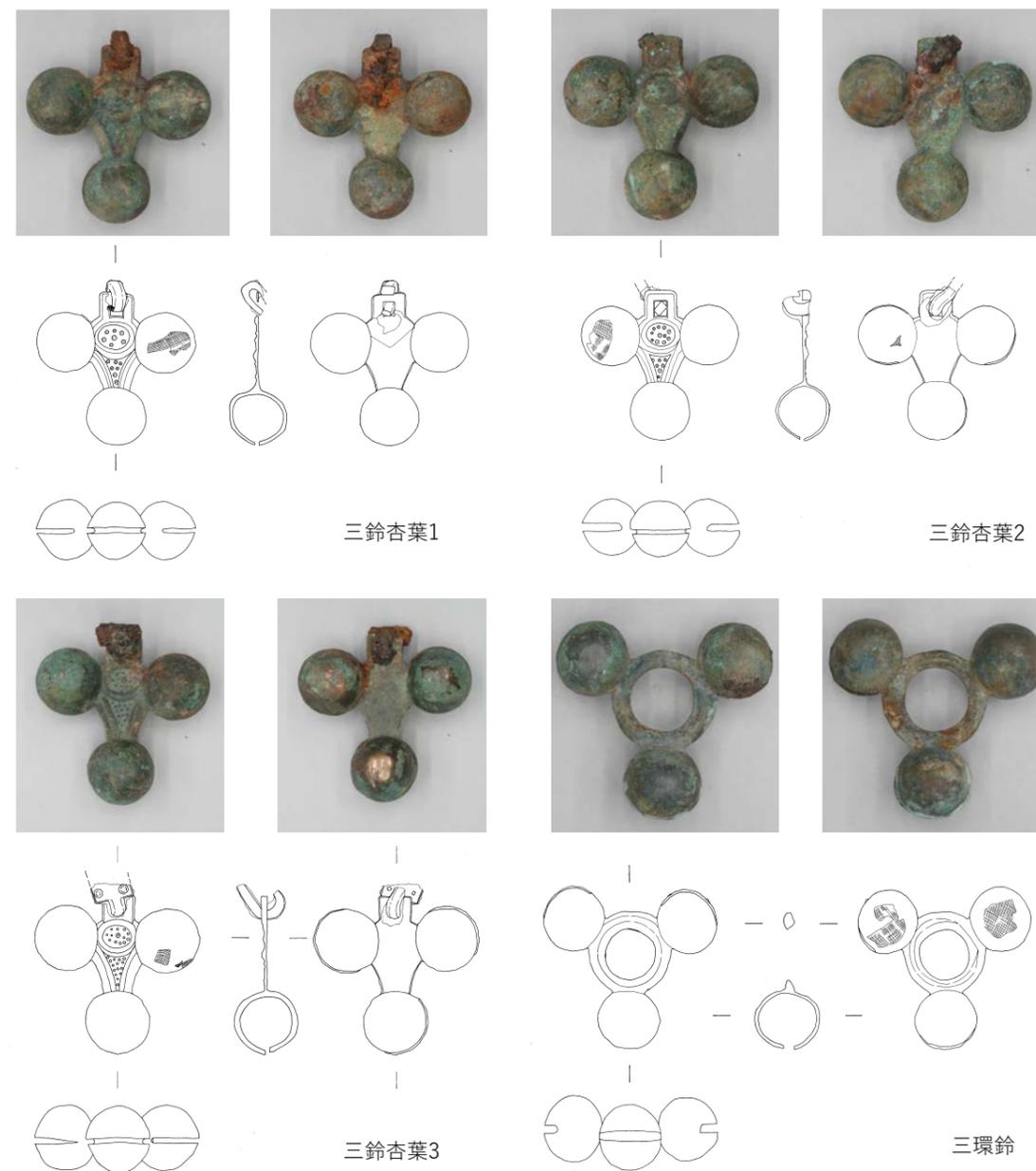


図3 三鈴杏葉・三環鈴 (実測図 S=1/4)



図4 鈴付銅器 (実測図 S=1/6)

質や遺存状態も近く、また同じ箱に入っていた点から、同一セットの可能性が高い。

また、同じ保管箱には鈴付銅器と呼ばれる遺物も含まれる。鈴付銅器は鳴器・宝器の可能性が指摘される遺物で馬具との共伴例も多い。各型式の特徴から、年代は5世紀後半頃と考えられる(初村2018)。さらに本例は、高橋健自氏の「豊前国京都郡泉村大字竹並横穴発掘」品の可能性が高い(高橋1925)。三鈴杏葉・三環鈴と同時期で、材質や遺存状態も近似するため同一セットの可能性はあるが確証には欠ける。

②6世紀後半代の馬装：楕円形十字文鏡板+楕円形三葉文杏葉(+辻金具(4脚)?) (図5・6)

2つ目は、楕円形十字文鏡板と楕円形三葉文杏葉のセットである。

鏡板も杏葉も鉄地金銅張で、地板鉄板と縁金の間に金銅板を挟まない、金銅板一枚被せ技法で作られたタイプである。鏡板は、鏡板内側で銜・引手を連結し、鏡板内面に銜留金具を付ける構造で、別造りの銜端覆金具を持つ。また杏葉は、三葉文中央に1点、各葉先に1点ずつ銜を打ち、中央垂下の葉文が大きく発達する。いずれも、楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉の中では新しい様相を呈し、時期は6世紀後半頃と目される。

楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉のセットは、6世紀以降に多い主要な鏡板・杏葉の組み合わせ関係の1つで、本例も型式・時期からみて同一セットで間違いはない。

ところで、鉄地金銅張辻金具(4脚)も、6世紀前半~後半の時期が想定される馬具で、半円形の脚に鉄地銀装の3つの銜と刻み目のない責金具2本を持つのが特徴である。この責金具2本を持つ辻金具は、滋賀県鴨稻荷山古墳や三重県井田川茶白山古墳、福岡県桂川王塚古墳など、楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉のセットと組み合う例が多く見られる。責金具には刻み目の装飾を施す例が多いが、三重県山添2号墳や熊本県塚塚古墳では、刻み目のない責金具2本の雲珠との共伴例も見られる。よって、十分な確証はないが、辻金具(4脚)は楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉のセットと組み合う辻金具で



図5 楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉 (実測図 S = 1/4)

ある可能性も考えておきたい。

③7世紀前半の馬装：心葉形透彫杏葉(図7)

最後に、仙掌菴コレクションの中で明確なセット関係は見出せないが、重要な馬装を構成する馬具として、心葉形透彫杏葉を取り上げる。

青銅製の心葉形をした縁金と、その内側を埋める厚さ0.5cmの薄い文様板、帯から杏葉を吊り下げるための金具である釣鉤金具が残っている。また、同一個体と目される文様板片も残っている。文様板全体は円文からスパイラル状に唐草が派生する透彫忍冬文と目され、表面には毛彫も施される。桃崎分類のB 2 a 類(透彫小鋸式毛彫)に該当し(桃崎2018)、復元される文様意匠は、兵庫県印南野升田山15号墳例や神奈川県室ノ木古墳例より形骸化するが、長崎県笹塚古墳例よりは唐草紋の形状を保つ。鋸数が少なく、比較的新しい様相を呈するため、時期は7世紀前半でも古い段階に位置づけておきたい。

この心葉形透彫杏葉は、同じ九州北部地域では福岡県船原古墳や沖ノ島7号遺跡等で出土例があるが、いずれも心葉形十字文鏡板付轡や金銅装鞍と共伴してセット関係を成している。同じコレクションの中に組み合う馬具は見出せないが、本来は上述したような馬具と組み合っていたと推測される。

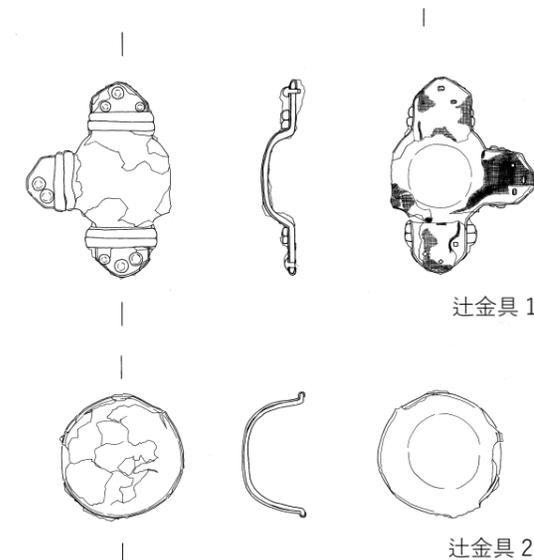


図6 辻金具 (実測図 S = 1/4)

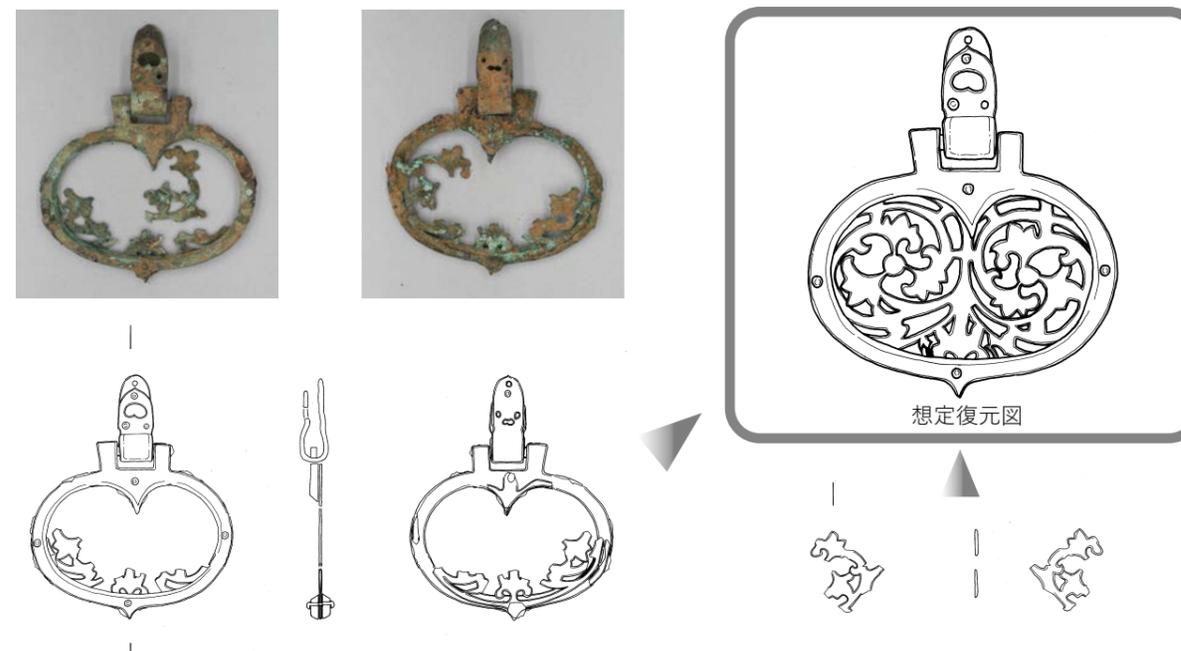


図7 心葉形透彫杏葉 (実測図 S = 1/4)

## 2. 仙掌菴コレクション馬具から復元される筑紫の豪族の馬装

仙掌菴コレクションの馬具の年代やセットとなる組合せの妥当性から、3つの馬装セットを想定した。残念ながら出土地はほぼ未詳だが、多くは周防灘沿岸の豊前地域で採集された資料群と思われる。以下、馬装のセットが判明した馬具から、当時の地域の様相に迫る。

### ① 5世紀後半の豪族の様相 (図8)

5世紀後半代の馬装に鈴付銅器が含まれるならば、三鈴杏葉・三環鈴は京都郡、それも行橋市竹並遺跡の出土品の可能性が高い。これまで、三鈴杏葉は西日本には分布しないとされ、出土が集中する東日本地域内の首長層の、倭政権に対する役割を示す馬具とされてきた(内山2011)。しかし、本三鈴杏葉の存在からこの見解は訂正が必要である。まず、三鈴杏葉の祖型である五鈴杏葉の初期型式が九州北部と朝鮮半島にも点在する。また鑄銅鈴付馬具の、馬が走って音が鳴ることに意味を持つ「聞く馬具」である点を踏まえれば、475年の百濟漢城陥落に伴う百濟救援のために、朝鮮半島、引いては列島内を含む全国的な情報通信網の構築に関わって、主に陸上交通面で創出された馬具と考えるのが妥当である(桃崎2014)。さらに、同じ行橋市で三環鈴を持つ稲童21号墳(5世紀中葉)では、甲冑と武器類が共伴し、朝鮮半島の有事に際して最新装備で渡海軍に動員された被葬者像が想定されている。

時期は異なるが、竹並遺跡周辺は安武・深田遺跡が「築城駅」、延永ヤヨミ園遺跡周辺が古代港の「草野津」比定地、また今川を遡って筑豊地域にもつながる陸海交通の要衝である。

そのような立地条件、そして三鈴杏葉と三環鈴の機能から、5世紀後半代に列島、あるいは半島の陸上交通網による情報通信を担いつつ、朝鮮半島経営にも携わる人物が存在したと想定される。

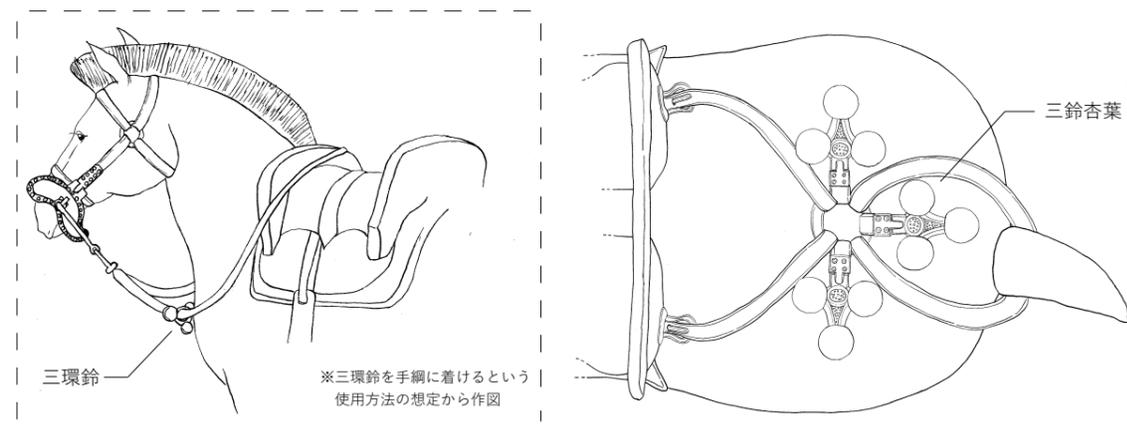


図8 5世紀後半代の馬具セット馬装復元図

### ② 6世紀後半の豪族の様相

楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉の馬装は、6世紀以降に出現する主要な大型金銅装鏡板付轡・杏葉のセットだが、5世紀中葉以降出現するf字形鏡板付轡・剣菱形杏葉の馬装同様、組み合わせの規則性と形状の規格性の強さから、倭政権によって生産と流通が管理された馬具で、保有者と倭政権との強い関連性を示す馬具である。しかし、楕円形十字文鏡板と楕円形三葉文杏葉は淀川流域から琵琶湖沿岸地域、f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉は河内・大和地域と、分布の多い地域が同じ畿内地域でも異なるため、馬具の複数の製作工房と管理エリート層の存在、そして多角的な流通ルートの存在が指摘されている(松浦2005)。その背景には、継体朝の成立や百濟の榮山江地域への本格的な進出など、朝鮮半島との交流をめぐる九州北部地域と畿内地域の経済的・政治的関係の変化が想定されている。

豊前地域では5世紀後半に福岡県番塚古墳でf字形鏡板付轡・剣菱形杏葉の出土がみられ、地域首長

である被葬者が政権と強い関わりを持っていたことが窺える。ところが、番塚古墳以降、豊前地域では中央との関連性を示す大型金銅装鏡板付轡・杏葉の出土例は知られていなかった。本例が豊前地域出土品であれば、6世紀後半にも中央との関係を持つ地域首長が存在し、その関係は5世紀後半とは別の経緯・ルートで確立され、経済的・政治的情勢が変化しても本地域が倭政権との間に強い関係を持ち続けたことが想定される。

### ③ 7世紀前半の豪族の様相 (図9)

心葉形透彫杏葉とそれと組み合わせる心葉形十字文鏡板付轡は、九州北部の玄界灘沿岸地域に多く、本例と同じ技法で作られた心葉形透彫杏葉B2類(透彫小鋸式)には、福岡県沖ノ島7号遺跡例や長崎県笹塚古墳例の、半島との中継地点に位置する遺跡が含まれるため、半島で作られた舶載品と指摘されてきた(内山2003)。また、韓国昌寧末屹里遺跡で出土した心葉形十字文鏡板付轡緑金と辻金具が静岡県堀ノ内D1号・13号出土の心葉形透彫杏葉B2類(透彫小鋸式)と酷似しており、新羅製と指摘されている。新羅自体には同種馬具がほとんど存在しないため、倭国向けに特別に製作された特注品として、560年頃から646年まで続いたと考えられる「新羅の調」「任那の調」の一環として、列島への搬入が想定される(桃崎2018)。豊前地域は半島から畿内へかけての海上ルート上にあたるが、舶載品である心葉形透彫杏葉の存在から、本地域も外交使節や物資の往来の中継地点として機能していたことが想定される。また、豊前地域は古代以降新羅との関係が深い地域でもある。そのような環境から、新羅系舶載品である心葉形透彫杏葉を入手した、翻って、入手できるだけの重要な地域の有力首長が存在したことも想定される。

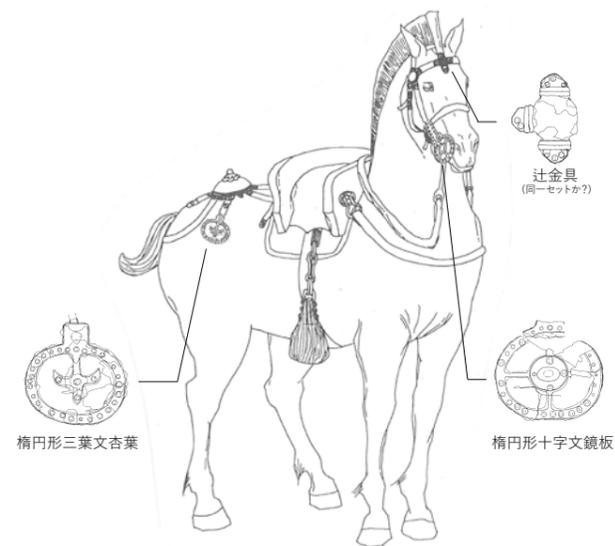


図9 6世紀後半代の馬具セット馬装復元図

## おわりに

九州国立博物館所蔵の仙掌菴コレクションに含まれる馬具から、5世紀後半から7世紀前半にかけての豪族の馬装とそこから見える当時の地域の様相を検討した。豊前北部地域は周防灘を望む、大きく見れば瀬戸内海の最西端を画する位置で、西は大陸・半島から九州北部、東は瀬戸内地域から畿内、さらに南の九州南部地域を結ぶ、海上ルート上の重要な結節点である。そのような地域だからこそ、5世紀後半代には半島有事に際して地方豪族が活躍し、5世紀後半から6世紀後半代にかけて経済的・政治的に倭政権と強い結びつきを持ち続け、7世紀前半には外交使節・物資の往来をも担うような性格と役割を担った地域、重要な馬具を保有するだけの地域であったと考えられる。その歴史を物語る重要な資料が、まさしく仙掌菴コレクションの馬具なのである。

## 註

- 1) 馬の存在を示す馬歯の最古資料は、山梨県塩部遺跡、長野県篠ノ井遺跡で4世紀後半、馬具の最古資料は、兵庫県行者塚古墳の鑲轡で4世紀末である。

## 第7章

## 仙掌菴コレクションの馬具

西 幸子

## はじめに

九州国立博物館には仙掌菴コレクションと呼ばれる考古資料群(行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料)が所蔵してある。これらは九州北部、特に資料を所蔵していた福島家と縁の深い、周防灘沿岸の京都平野周辺で収集された資料と考えられるが、その中には古墳時代のもと考えられる馬具が複数含まれている。この中の一部の資料は、古書等に描かれた図面などからその存在が知られていたが、多くは今現在も世に知られていないため、その資料的な価値が十分検討されていない。

2013～2014年にかけて、筆者はこの仙掌菴コレクションの馬具を実測し、観察する機会を得ていた。本稿ではその際に作成した図面や写真をもとに仙掌菴コレクションの馬具の資料を紹介するとともに、若干の検討から資料の考古学的な位置づけを行いたい。

## 1. 仙掌菴コレクションの馬具

九州国立博物館に所蔵されている行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料(以下、仙掌菴コレクション)は、江戸時代より続く旧家である行橋市福島家によって蒐集されてきた考古資料群である。2013年当時、仙掌菴コレクションの資料は福島家に所蔵してあった状態のまま、6つの保管箱(内、2つは5重箱と7重箱)に遺物が収められており、馬具は箱の中で、玉類や飾金具などと組み合わせて装飾的に配列されていた。馬具の点数は合計16点で、いずれも5世紀～7世紀までの古墳時代に使用されたものである

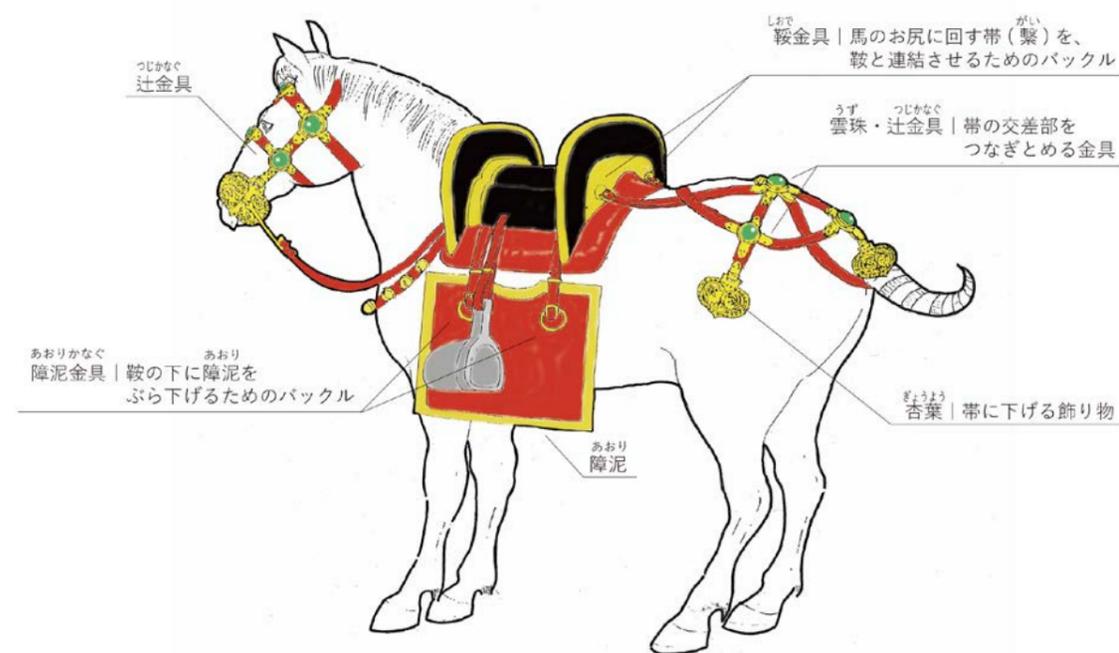


図1 本稿で扱う馬具の使用位置と使用方法

## 参考文献

- 石山勲1980「九州出土環鈴について」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集』早稲田大学出版部
- 内山敏行2011「中期後半から後期前半の下毛野」『季刊考古学・別冊17 古墳時代毛野の実像』雄山閣
- 中村友昭2010「古墳時代後期のイモガイ装馬具に関する基礎的研究—築池2003-3号地下式横穴墓出土例をもとに—」『先史学・考古学論究V下巻 甲元眞之先生退任記念』龍田考古会
- 初村武寛2018「第6章 鈴付銅器の編年と用途」『鎔情報に基づく戦後復興期消滅古墳副葬品配列の復元研究』公益財団法人 元興寺文化財研究所
- 松浦宇哲2005「12 三葉文円形杏葉の編年と分析—鉄地金銅装馬具にみる多元的流通ルートの可能性—」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究室報告第3冊
- 松浦宇哲2005「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 宮代栄一1993「中心部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号
- 宮代栄一1996「古墳時代の金銅装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号
- 桃崎祐輔2011「岡山県勝負砂古墳から出土した鍔銅鈴付馬具類の予察」『福岡大学考古資料集成4—特集：九州中世学の構築2—』福岡大学人文部考古学研究室
- 桃崎祐輔2014「馬具からみた九州の地域間交流—舶載馬具と国産規格品馬具に注目して—」『第17回九州前方後円墳研究会大分大会 古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会

表1 仙掌菴コレクション馬具一覧

番号	遺物	法量	図版番号	馬装
1	三鈴杏葉1	残存長9.2cm、残存幅9.6cm、鈴径約3.5cm、厚さ約0.2cm	第5章第3図	5世紀代の馬装セット
2	三鈴杏葉2	残存長9.5cm、残存幅10.0cm、鈴径約3.9cm、厚さ約0.3cm	第5章第3図	
3	三鈴杏葉3	残存長9.0cm、残存幅9.45cm、鈴径約3.5cm、厚さ約0.2cm	第5章第3図	
4	三環鈴	残存長9.7cm、残存幅10.5cm、鈴径約3.6cm、高さ4.0cm	第5章第3図	
5	扁平状無稜鉢辻金具	残存長8.4cm、高さ1.7cm	第5章第6図	6世紀代の馬装セット
6	半球状無稜鉢辻金具	残存径5.1cm、高さ2.7cm	第5章第6図	
7	無脚雲珠・辻金具1	残存径6.9cm、高さ2.5cm	第7章第2図	
8	無脚雲珠・辻金具2	残存径約6.6cm、高さ約1.4cm	第7章第2図	
9	無脚雲珠・辻金具3	残存径7.4cm、高さ1.9cm	第7章第2図	7世紀代の馬装
10	無脚雲珠・辻金具4	残存径7.1cm、高さ1.9cm	第7章第2図	
11	楕円形十字文鏡板	残存長7.8cm、残存幅10.1cm、厚さ1.7cm	第5章第5図	
12	楕円形三葉文杏葉	残存長9.4cm、残存幅9.3cm、厚さ1.1cm	第5章第5図	
13	心葉形三葉文杏葉	残存長6.8cm、残存幅7.6cm、厚さ0.1cm	第7章第4図	7世紀代の馬装
14	イモガイ装飾金具	イモガイ螺頭部：残存長5.2cm、残存幅5.6cm、高さ1.8cm 飾金具：残存長2.9cm、残存幅3.0cm、高さ1.6cm	第7章第6図	
15	心葉形透彫杏葉	残存長10.4cm、残存幅8.7cm、厚さ0.5cm	第5章第7図	
16	四弁瑞花形鞍座金具	残存長5.8cm、残存幅5.9cm、厚さ0.9cm	第7章第5図	

(表1)。これら馬具が福島家に蒐集された入手時期や経緯は、残念ながら記録がなく判然としない。また、各馬具の採集場所や時期、採集の経緯等についても、1点を除き不明である。

この内、馬装のセット関係が分かる資料は、第2部第5章「筑紫の豪族の馬装」で検討した。よって本稿では第5章で扱いきれなかった馬具類について、紹介していきたい。

## 2. 馬具の紹介と考古学的検討

本稿で紹介するのは、無脚雲珠4点、心葉形三葉文杏葉1点、四弁瑞花形鞍座金具1点、イモガイ装飾金具1点である。

### ①無脚雲珠

鉄地金銅張で文様のない半球状の鉢に縁が付く金具である。ほぼ同形のものが4つで、径は7cm前後、縁に6～8つの鋸が打たれている。この金具は、金具の裏面に革ベルトの有機質痕跡が残った出土例から、A. 雲珠・辻金具として使用されたもの、裏面に木質や布の有機質痕跡が残った出土例から、B. 鞍金具・鞍褥<sup>1)</sup>の金具として使用されたもの、2つの使用方法が確認されている。仙掌菴コレクションの無脚雲珠の裏面をみると、裏面全体に布状の有機質痕跡が残るものと、布と皮革状の有機質痕跡が層状に重なって残るものがある。よって、この無脚雲珠は雲珠・辻金具として、皮革の上に布を巻いた帯同土を連結していたと想定される。

無脚雲珠で径が7cm以下の小型品は、大阪府白雉塚古墳、岡山県三輪山6号墳、群馬県少林台12号墳、

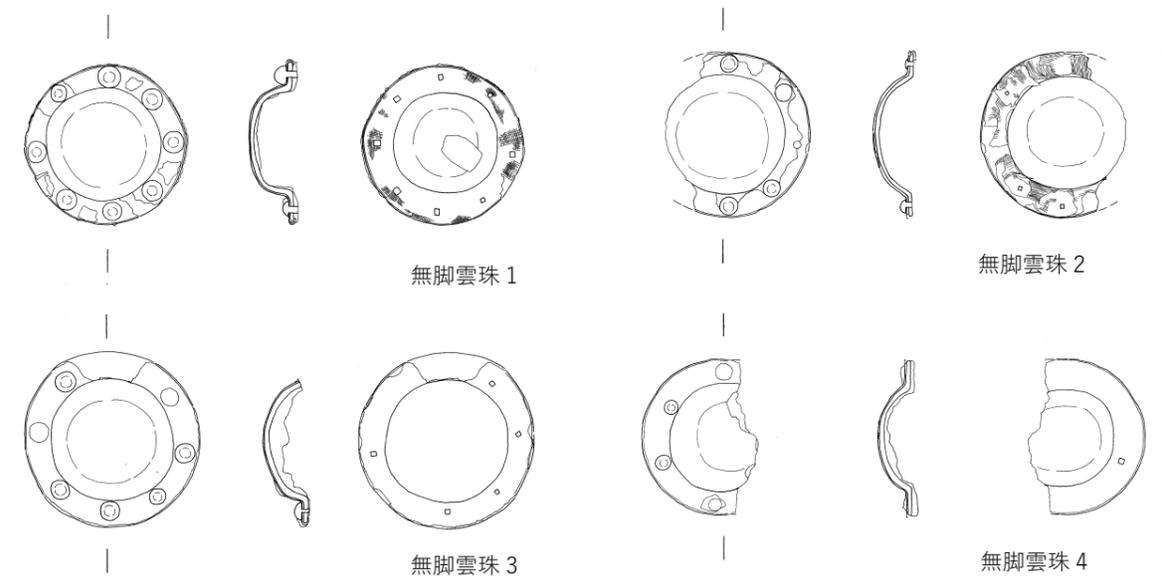


図2 無脚雲珠 (実測図 S = 1/3)

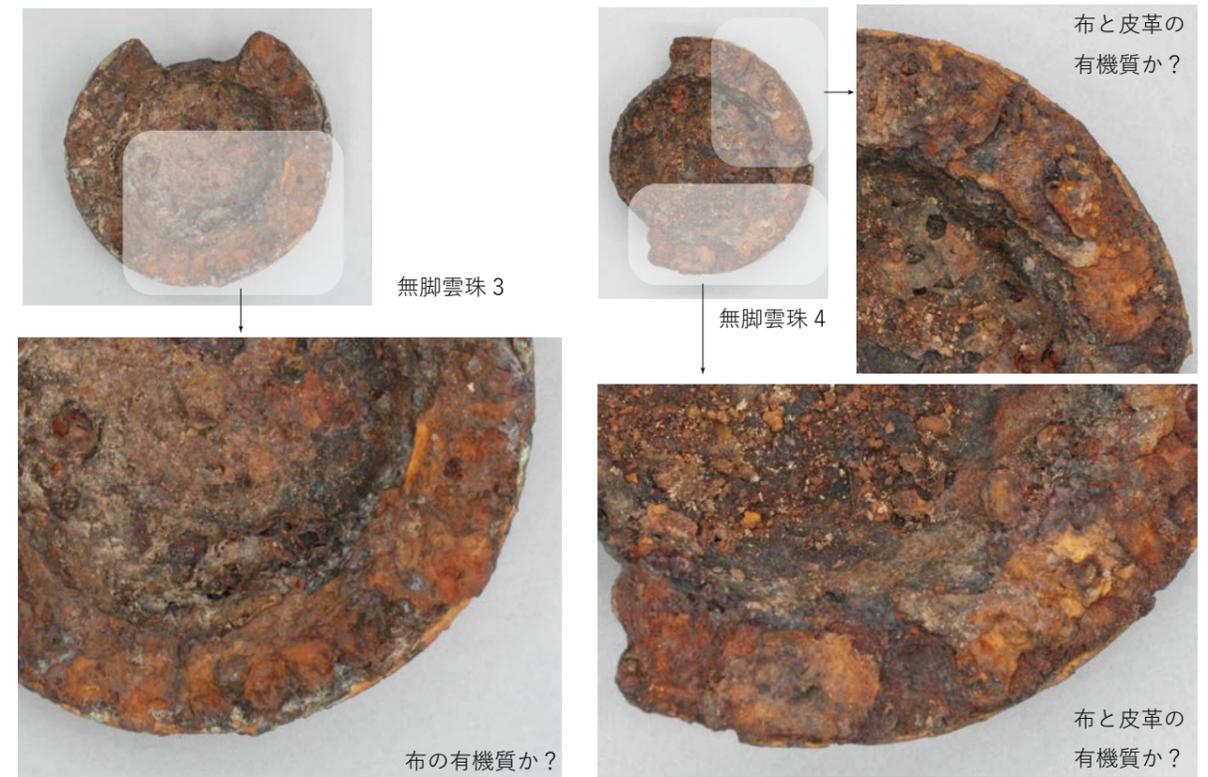


図3 無脚雲珠の裏面にみられる有機質痕跡

山口県王喜寺山古墳、福岡県城山横穴群Y88、熊本県臼塚古墳など6世紀前半～後半の古墳で出土例がある。本例は使用される鋸の数が6～8個と少なく、6世紀後半の熊本県臼塚古墳、福岡県城山横穴群Y88出土例と形状が類似することから、時期は6世紀後半頃と考えておきたい。また両者の裏面にも有機質痕跡が確認でき、特に臼塚古墳の無脚雲珠は緑金裏面に十字状の有機質痕跡がみられるため、本例と同様交差した帯を連結させる辻金具や雲珠として使用されたことがわかる。

### ②心葉形三葉文杏葉

古墳時代に鉄地金銅張の技術で製作された杏葉や鏡板は、下から地板鉄板→(金銅板→)文様板→緑金→金銅板の順に、数枚の金属板を重ねて作られている。本例は一番上に被せられた金銅板だけが残った心葉形三葉文杏葉である。心葉形三葉文杏葉は6世紀前半～7世紀前半の古墳で出土する杏葉だが、6世紀末を境に形態が大きく変化する。本例は、外形がより縦長のハート形に近づき、緑金の幅が太く三葉文と一体化した、新しい型式に該当する。また、使用された鋸数は左右下端の想定3つと少なく、三葉文の文様が簡便化して二葉文化した特徴から、最も新しい時期のものと考えられる。

この新型式的心葉形三葉文杏葉は、奈良県広陵市牧野古墳や同県平林古墳など、大和の有力古墳から出土し、大和王権や畿内中枢部の有力氏族と関連性が高い馬具とされる。特に、牧野古墳は、敏達天皇の皇子で欽明天皇の父である押坂彦人大兄皇子の墓と有力視されるため、上記三名に勤仕した刑部氏との関連が示唆されている(桃崎2014)。九州では肥後国葦北郡(現在の熊本県八代市・水俣市周辺)に「葦北国造 刑部鞞負部」が分布していたことが知られるが(井上1983)、豊前周辺で刑部の存在は確認できない。京都平野の周辺では装飾古墳で有名な福岡県宮若市竹原古墳で新型式的心葉形三葉文杏葉の出土例がある。

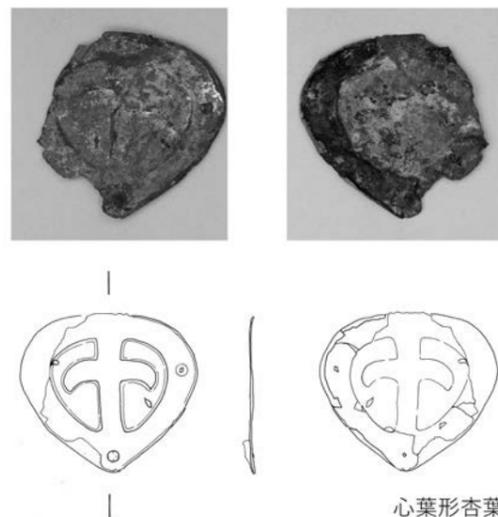


図4 心葉形杏葉 (実測図 S = 1/3)

### ③四弁瑞花形鞍座金具

四弁瑞花形鞍座金具は2個1対で鞍の前輪や後輪に装着されたバックルの基部の飾りである。本例は銅地銀張製で、先端の尖った4枚の各花卉の中に二葉文を表現した意匠である。端部を折り曲げて全体を緩やかなドーム状作り上げることで立体感を出す。出土例は少ないが、島根県向山1号墳、群馬県五代大日塚古墳、同県大応寺甲古墳などに類例があり、二葉文が完全に分かれ切らない表現は、向山1号墳出土例に類似する。向山1号墳は、島根県松江市に築かれた全長22mの大型方墳で、出雲東部地域で6世紀末の最有力首長と目される山代方墳に次ぐ有力首長の墓とされる。また、五代大日塚古墳も全長30mの前方後円墳で花形杏葉と共伴、大応寺甲古墳も三類環頭大刀と共伴するなど、6世紀末～7世紀前半にかけて各地域内で一定の権力を持った有力者層の墓に副葬される傾向がみられる。

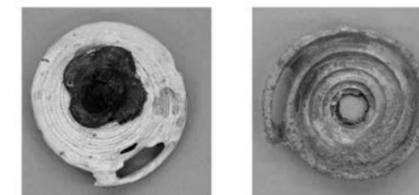


図6 イモガイ装飾金具 (実測図 S = 1/3)

### ④イモガイ装飾金具

イモガイの螺塔部上部に、鉄地金銅張で4枚の花びらの形をした四弁花形座金具を乗せた飾金具である。座金具は鋸になっていて、イモガイの中央を貫通し、帯などにカラメて固定し、装飾する。現在、座金具の鋸脚部分は欠損している。また、イモガイと座金具も分離しているが、イモガイ上面の錆痕跡から同一個体と判断できる。イモガイ装飾金具は6世紀後半～7世紀前半の遺跡から出土し、特に九州では有明海沿岸部や筑後川流域、遠賀川流域にかけて集中して分布することが指摘されている(中村2010)。

## 3. 唯一出土地が記された馬具、イモガイ装飾金具

### ①『豊前筑前其他出土考古品図譜』に描かれた、貝製飾金具

仙掌菴コレクションの遺物の多くは、福島家が入手した時期・経緯、そして、各遺物の採集場所・時期、採集の経緯等がよく分かっていない。しかし、一部の資料は論文で紹介されていたり、古書等に掲載された図とその注記から、出土地を推測することのできる資料もある。馬具では、唯一イモガイ装飾金具について出土地を確認することができる。

仙掌菴コレクションのイモガイ装飾金具が掲載されているのは、明治12～27年にかけて執筆された『豊前筑前其他出土考古品図譜』(作者不明)である。図譜360頁の下半に、一寸九分×一寸六分(約5.73×4.83cm)、厚さ三分(約0.9cm)・五分(約1.5cm)の飾金具が描かれている。注記から、貝の上に銅と金装の四弁花形座の飾金具が乗っていて、図の渦巻模様から貝は螺塔部分であることがわかる。この図の左横には墨字で「田川郡金川村字平塚古墳」と採集地が、そして鉛筆書きで「福島蔵」、つまり福島家所蔵と記録されている。

実物のイモガイ装飾金具とこの図譜の貝製飾金具を比較すると、実物の法量は5.6×5.2cm、厚さ1.8cmと、図譜の法量と合致はしないが、おおよそ近似した数値を示す。また、貝の上に乗る飾金具も四弁花形座で鉄地金銅張と、表面状では銅と金装であるため、図譜の記録と一致する。さらに、図譜の貝製飾金具の特徴として、貝の螺塔の最端部に細長い穴が開いているが、仙掌菴コレクションのイモガイ装飾金具にも、ほぼ同一箇所細長い穴が開いている。

よって、法量が近似していて、形状に一致する箇所が多いこと、さらに記録された福島家に実際に所蔵されていたという事実から、仙掌菴コレクションのイモガイ装飾金具と『豊前筑前其他出土考古品図

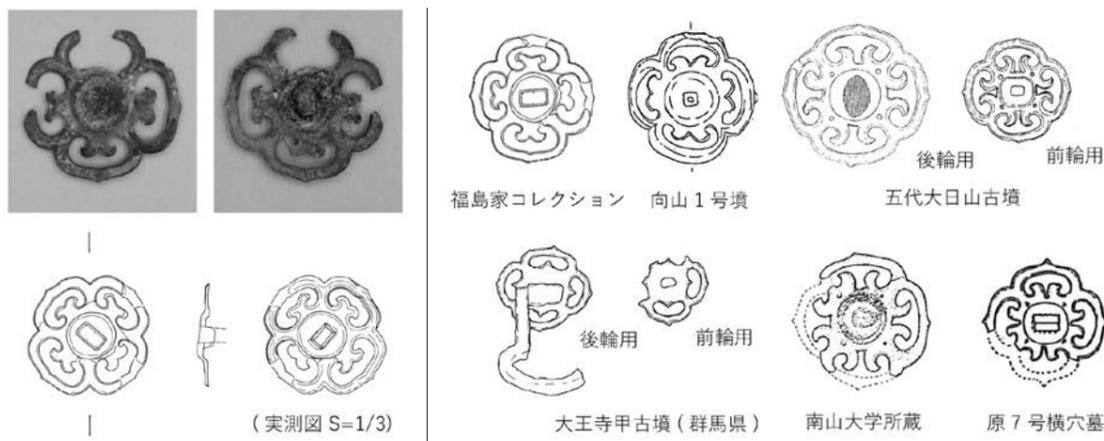


図5 四弁瑞花形鞍座金具と日本列島出土四弁瑞花形鞍座金具

譜』の貝製飾金具は、同一個体とみて間違いないと考える。よって、翻って、このイモガイ裝飾金具の採集地は、田川郡金川村字平塚古墳であることがわかる。

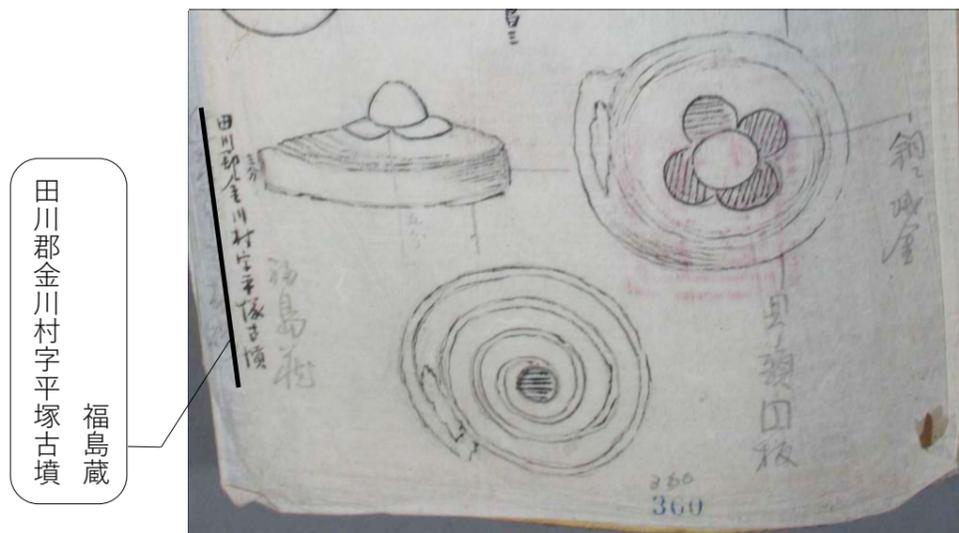


図7 『豊前筑前其他出土考古品図譜』掲載の福島蔵イモガイ裝飾金具

### ②イモガイ裝飾金具の出土想定地

イモガイ裝飾金具が採集された田川郡金川村は、明治22年（1889）の町村制施行にともなう町村合併で、夏吉村（明治16年に東夏吉村、西夏吉村、新城村が合併して成立）と糴村の2村が合併してできた村である。その後、昭和8年（1933）に伊田町に編入、昭和18年（1943）に伊田町と後藤寺町が合併し、現在に続く田川市が誕生している。

田川市の遺跡分布図では、現在「平塚古墳」の名称で把握されている古墳は存在しない。そこで、旧金川村の範囲内で字名平塚を探してみると、『豊前村誌』1（書写者不明）では東夏吉村に字名平塚が確認できる。明治16年発行『福岡県細見全図』では、夏吉村になる以前の旧三村は、北から新城村→西夏吉村→東夏吉村の順で記されていて、東夏吉村は下香春村の西隣に記されているが、村の範囲は分からない。『豊前村誌』1によると、東夏吉村の西方には若宮社（現在の若八幡宮か）、南方には龍ヶ迫池（竜ヶ迫池のことか）があり、性福寺と因隆寺、地名の秋里は、西夏吉村にあることがわかる。

これらの文献記録から旧東夏吉村の村域を推測すると、およそ若八幡宮周辺から南側の夏吉地区周辺で、糴、下伊田、伊田、そして香春町に接する範囲と考えられる。この旧東夏吉村の想定村域内には、田川盆地で古墳時代後期に最大規模を誇る夏吉古墳群、そして若八幡横穴群、上吉田古墳群、上吉田横穴群、棚木横穴群、蛭ヶ丘横穴群、一本松古墳群などの墳墓が見られる。特定はできないが、仙掌菴コレクションのイモガイ裝飾金具は、これら墳墓群の周辺で採集された遺物と想定される。

### ③仙掌菴コレクションのイモガイ裝飾金具からみた田川盆地の交流

イモガイ裝飾金具に使われたイモガイは、琉球列島に生息する巻貝なので、素材を手に入れるには、産出地の琉球列島から貝を運んでくる必要がある。弥生時代以降、琉球列島産の貝は装身具などの素材として九州より東の地域にも流通していて、琉球列島と本土地域で南海産貝交易を目的とした地域間交流があったことがわかっている。その流通経路は、九州の東側沿岸を通過して北上し、九州以東地域に運ばれる経路が主要ルートであったが、5世紀中頃～6世紀前半にかけて朝鮮半島で琉球列島産貝製品の需要が高まるとともに、朝鮮半島への貝の輸出元である有明海沿岸、筑後川流域、遠賀川流域の九州島北西部に貝を運ぶため、九州の東側沿岸を北上した後、阿蘇や日田地域を抜けて九州島北西部に抜ける



図8 福岡県旧田川郡東夏吉村周辺(想定)の墳墓群

ルートが開拓され、主要流通経路となることが指摘されている（中村2014）。特に、新羅地域へのイモガイ流通には、イモガイ製釧を有する福岡県飯塚市小正西古墳の存在から、遠賀川上流域から玄界灘沿岸地域の被葬者の関与が指摘されている（高田2014）。

仙掌菴コレクションのイモガイ裝飾金具が出土した田川盆地は、西にある関の山によって飯塚市と分断されるが、盆地の中央を流れる彦山川は北上して遠賀川に合流していて、遠賀川上流域に該当する。イモガイ裝飾金具だけでなく、田川盆地内では轟尾B-2横穴墓や狐ヶ迫7号横穴墓、狐塚I-1b横穴墓でイモガイ製釧がみられるなど、琉球列島産貝製品の出土数が多い。田川盆地は、仲哀峠、薬師峠、砺石峠を介して京都平野、中津、日田地域とつながっていて、自らが九州東側沿岸部から琉球列島産の貝を入手した可能性も十分想定される。

田川盆地は5世紀前半～8世紀にかけて加耶・新羅地域に系譜を持つ朝鮮系資料が多く、『豊前国風土記』逸文の「田川郡鹿春郷…新羅国神自度到来住此河原…」など、加耶・新羅地域との関わりが深さ

が指摘されている(亀田2004)。また、イモガイ装飾金具は上述の通り、朝鮮半島への琉球列島産貝製品の輸出に関わった九州北西部を中心に分布する(中村2010)。このような田川盆地の特徴と遺物の傾向を踏まえると、田川盆地も5世紀中頃以降の朝鮮半島への琉球列島産貝製品の輸出に関わった可能性が想定できるのかもしれない。しかし、これまでに盆地内で出土した琉球列島産貝製品はいずれも6世紀後半以降のもので確証に欠けるため、可能性の提示に留めたい。

## おわりに

本稿では、第2部第5章で扱いきれなかった仙掌菴コレクションの馬具を紹介し、考古学的な検討から各馬具を所有した被葬者や地域の様相を探った。結果、無脚雲珠は裏面に残る有機質の痕跡から、雲珠・辻金具として使われた6世紀後半の馬具であると考えられる。また、心葉形三葉文杏葉および四弁瑞花形鞍座金具も6世紀後半～7世紀の古墳時代後期後半から終末期の古墳に副葬された馬具である。いずれも有力な地域首長層の墓からの出土が想定されるべき馬具類で、7世紀前後の豊前地域周辺にそのような馬具を保有する被葬者がいた可能性が示唆される。

そして、イモガイ装飾金具は『豊前筑前其他出土考古品図譜』に記録が残る福島蔵の貝製飾金具と同一品と判断し、福岡県田川市旧東夏吉村周辺からの出土したことを明らかにした。琉球列島の貝を使用したイモガイ装飾金具は、古墳時代中期から終末期にかけての田川盆地と南島地域、あるいはその先にある朝鮮半島との交渉の様相を示唆する資料である。

以上、7年前に観察した資料を本稿で紹介することで、検討させていただいた責任をやっと果たすことができた。今後本資料が多くの研究に取り上げられ、遺物それ自体の価値、さらに出土地の特定を含め、検討がさらに深まることを願う。

## 註

- 1) 鞍褥とは、馬の背と鞍の間に挟む有機質製の敷物である。壮麗な敷物を敷くことで、馬装をより一層飾り立てる装飾的な効果のほかに、鞍が擦れて馬の背中に傷をつけないための緩衝材としての機能も持つ。

## 参考文献

- 井上辰雄1983「大和政権と九州の大豪族－その統治政策を中心として－」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
- 亀田修一2004「豊前西部の渡来人・田川地域を中心に」『福岡大学考古学論集-小田富士雄先生退職記念-』小田富士雄先生退職記念事業会
- 鈴木一有2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳 調査報告編』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告184
- 高田貫太2014『古墳時代の日朝関係－新羅・百濟・大加耶と倭の交渉史』吉川弘文館
- 田川市教育委員会1983『夏古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群』田川市文化財調査報告書第2集
- 中村友昭2010「古墳時代後期のイモガイ装馬具に関する基礎的研究－築池2003-3号地下式横穴墓出土例をもとに－」『先史学・考古学論究V下巻 甲元眞之先生退任記念』龍田考古会
- 中村友昭2014「琉球列島産貝製品からみた地域間交流」『第17回九州前方後円墳研究会大分大会 古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会
- 長谷川清之1989「田川市楠植木忠氏資料の紹介(その1)」『郷土田川』32号 田川郷土研究会
- 宮代栄一1993「中心部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号
- 宮代栄一1996「古墳時代の金銅装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」『日本考古学』第3号
- 宮代栄一1996「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第9号
- 宮代栄一1998「無脚雲珠」の型式学的研究-その用途をめぐって-』『土曜考古』第22号
- 桃崎祐輔2014「馬具からみた九州の地域間交流－舶載馬具と国産規格品馬具に注目して－」『第17回九州前方後円墳研究会大分大会 古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会